

レム論 あるいはレムのSFはどこがすごいのか

丹野義彦

国際学会のためポーランドのクラクフを巡る機会があった。クラクフといえば、私にとっては、何より作家レムが住んでいた場所として記憶されている。スタニスワフ・レム(1921～2006年)は、『ソラリス』、『枯草熱』、『天の声』などのSFで知られるポーランドの作家・思想家である。クラクフのヤギェロン大学で医学を学んだが、医師にはならず、SFへの道を進み、世界的な作家となった。クラクフ市内では何回かLemとかSolarisという言葉を目にした。



私は学生時代に駒場の仲間と「鋒鋳」(ほうぼう)という文学同人誌を作って創作を発表しており、レムやカフカや大江健三郎や安部公房などが創作のモデルだったのだが、私は認識論と存在論に関心があり、それは結果的にSFに近いものとなった。どのようにしたら彼らのように書けるのか、その発想の方法論の秘密を知りたいと思い、レムやカフカや大江についての方法論的メモを作っていた。中でも、レムの科学的認識論と想像力は卓抜していた。1983年に、レムについてのメモをまとめて、同人誌「鋒鋳」に「ソラリス・ビーグル・アンドロメダ」というレム論を書き、それがきっかけで、何本かレムの評論を書くことになった。

そのうち本業の心理学のほうで忙しくなり、創作やレムは休業状態だったのだが、30年以上たった2017年に、「鋒鋳」の同人である畏友 沼野充義が、NHKの『100分de名著』で、レムの『ソラリス』を取りあげてくれた(『100分de名著 ソラリス』テキスト、沼野充義著)。ソラリスにおける人間劇を正面から向き合ってわかりやすく解説していて画期的であった。こういうレム論を私もやりたかったのだなあと、うらやましく思った。また、沼野は、2015年に、ポーランド語から直接翻訳した『ソラリス』を早川文庫で発表した。

これらの本の中で、沼野が私のレム論を「日本におけるレム論のもっとも優れたもののひとつ」と紹介し

てくれていたのは、うれしいことだった。私のレム論に関心を持っていた方は、他にも何人かおられたのだが、発表した雑誌の多くが廃刊となっており、今では手に入らなくなっている。そこで、このサイトで残しておこうと思った。

ここに示したのは、以下の8本である。

1. スタニスワフ・レム論
ソラリス あるいは科学者SFの復権 第1回 自然
「SFの本」第2号 1983年
2. スタニスワフ・レム論
ソラリス あるいは科学者SFの復権 第2回 人間
「SFの本」第3号、1983年.
3. スタニスワフ・レム論
ソラリス あるいは科学者SFの復権 第3回 科学
「SFの本」第4号、1983年.
4. 討議 スタニスワフ・レムの世界
科学と神 あるいはレムの仕掛けた罠について
笠井潔・巽孝之・丹野義彦
「SFの本」第5号、1984年.
5. スタニスワフ・レム論
サイバネティクス・パラダイム あるいは不可知性のシミュレータ
「SFの本」第7号、1985年
6. スタニスワフ・レム論
基礎論 あるいは起源のパラドクス
「CONNECTIVE」創刊号 1985年
7. 特集＝スタニスワフ・レム
枯草熱 あるいは因果のアポフェニー
「ユリイカ」 1986年1月号
8. フィリップ・K・ディック 『ヴァリス再考』
ヴァリス論／なぜディックはマクロコスモスからミクロコスモスへと転向したか
「銀星倶楽部」12 ペヨトル工房 1989
(8はディック論であるが、レムとも少し関連があるので追加した)

改めて目を通してみると、大学院生時代の熱い知的な情熱がよみがえってくる。この間、いろいろな変化があった。2006年にレムが亡くなった。沼野が生前のレムに直接会っているというのもうらやましいことである。また、2015年に、沼野がポーランド語から直接翻訳した『ソラリス』を発表したことも大きい。当時の早川文庫は『ソラリスの陽のもとに』というタイトルで、飯田規和氏がロシア語訳から日本語訳をしたものであった。沼野によって、飯田規和訳にはなかったソラリス学の部分が70ページくらい追加された。沼野はもともとロシア文学研究者なのだが、レムを原文で読みたいために、ポーランド語を勉強するようになったというからすごいものである。また、レムの多くの作品が翻訳されて全6巻のスタニスワフ・レム・コレクションも刊行された。本来なら内容をアップデートしたいところだが、ここではあえて手を入れないままとしておきたい。

1. スタニスワフ・レム論

ソラリス あるいは科学者SFの復権 第1回 自然
「SFの本」第2号 1983年

丹野義彦

未だ解明しえぬ神秘的なものを、「神」と呼ぼうが、「偶然」と呼ぼうが、等価である。その意味では、第一線の科学者たちは、毎日、「神」と接しているとすら言うてよい。

●ソラリスの3相構造

スタニスワフ・レムの代表作『ソラリスの陽のもとに』（1962年、飯田規和訳、早川文庫版）は、きわめて衝撃的なSFである。こんな異様な宇宙的設定のどこが、なぜ、どのように、日常生活の中に住むわれわれ読者に対して、衝撃を与えたのだろうか？ この疑問を解いてみたい、というのが本論の目的である。

ソラリスは、3つのレベルの物語の複合体である。ソラリスは、第一に、ソラリスの海を主人公とする宇宙生命体の物語である。第二に、ソラリスは、海と対峙するケルビンを主人公とする科学者の物語である。そして第三に、ソラリスは、海と科学者との交渉過程に生じた科学そのものの物語である。

ソラリスの3つの物語レベルは、科学の3つの相にそれぞれ当てはまる。すなわち、

- ①科学される自然
- ②科学する人間
- ③自然と人間との交互作用としての科学

したがって、作品ソラリスを全体的に読み解いていくためには、とりあえず、科学の3相の図式に従うことが有効である。レムは、ソラリスにおいて、科学にまつわる3つの層を描き分けており、それぞれの層でレム独自のテーマを展開している。自然だけのSF、人間だけのSF、科学だけのSFなら、数多くあろう。しかし、科学をトータルに捉えたSFは、現在、非常に少ない。本論では、こうした数少ない作品の中から、以下の2作品を取りあげて、ソラリスとの比較をおこなっていきたい。

『宇宙船ビーグル号』（1950年） ヴァン・ヴォクト 浅倉久志訳

『アンドロメダ病原体』（1969年） マイクル・クライトン 浅倉久志訳

この2作品を選ぶのは、これらが科学の3つの相それぞれにおいて、ソラリスと同じ構造を持つので、ソラリスの特徴を浮き彫りにしやすいためである。

- ①自然：3作とも、人間の知る自然界の生命概念からは考えられない生命形態をリアルに描写し、それによって、逆に、生命の本質の不明確さをあばき出そうとしている。
- ②人間：3作とも、科学者を主人公とする。3作とも、宇宙生命との接触という危機場面において、科学者がいかなる行動をとるのかを克明に描き、その失敗から、人間存在の不安定さ、偶然性をあばき出そうとしている。
- ③科学：3作とも、この接触のために、科学的方法を第一位に置いている。しかし、あらゆる科学的努力が払われるが、真の接触はできない。それを通して、人の科学的認識の限界をあばき出そうとしている。

科学者がSFの主人公ではなくなった現在において、ソラリス・ビーグル・アンドロメダは、科学者SFの一つのパラダイムを形成している。以下では、稿を3回に分けて、自然、人間、科学の各層ごとに、3作品の類似点を確認し、相違点を明らかにしていく。そしてその過程から、前述のソラリスの衝撃の謎を解いていきたい。

●ビーグルの宇宙生物

ソラリス・ビーグル・アンドロメダのもっともすぐ目につく共通点は、宇宙生物が登場する点であるが、その奇想天外さの程度は異なる。

ビーグルでは、4匹の宇宙怪獣が登場する。ヴォクトは、宇宙的環境が、いかに過酷であり、生存のために生物がいかに残酷にならざるを得ないかについて、その生物の内面にまで立ち入って描いている。しかし、それらの形態は、猫、鳥、猛獣、細菌のカリカチュアであり、その内面も人間に了解できる程度のものである。また、人間との関係においても、単なる敵一味方の関係であり、人間は、ただ彼らを退治すればすむ。宇宙生物が敵として人間を侵略するパターンは、ウェルズの火星以来、数知れぬSFに書かれてきた。しかし、そうした作品は、宇宙人をインディアンに変えれば、すぐ西部劇へと変換可能である。（ところで、素朴な疑問だが、もしビーグル号にアンドロメダ菌株が進入したり、または、もしビーグル号が惑星ソラリスに着いたりしたらどうなるか？）

●アンドロメダ菌株

一方、アンドロメダ菌株は、アミノ酸から成り立たず、酵素もなく、あらゆるエネルギーを養分として増殖する。この点では、地球で考えられる生命形態の枠を越えている。

しかし、細菌という形態には、まだ地球的な匂いがある。それどころか、以下の理由によって、細菌という形態は、むしろ反SF的と言えるのである。イギリスの生物物理学者J・J・メリック（1962年）の計算によれば、人類が、宇宙に進出した場合、他の生物と接触する確率は、次のようになる。

品種	確率
単細胞生物（裸の遺伝情報）	・・・ 78.40%
単純な多細胞生物	・・・ 19.40%
複雑な多細胞生物	・・・ 1.40%
神経系を持つ多細胞生物	・・・ 0.78%
人間能力を持つ多細胞生物	・・・ 0.02%

この表から、「宇宙生物との接触を描いたSF作品が1万個あるとすれば、そのうちで、人間レベルの能力を持った宇宙人が登場するSFは、2個を越えてはならない。残る9998個のSFに、宇宙人は登場してはならない」という原則が導かれる。したがって、この「J・J・メリックの原則」に基づいて書かれた作品アンドロメダは、科学的存在価値を自ら論証する稀なSFであり、他のSFのリアリズムの仮面をはぐ、反SF的な作品ともいえよう。

●ソラリスの海

2ミクロンのアンドロメダ菌株と、惑星大のソラリスは、大きさは全く異なるが、どちらも非日常的な大きさであるという点では一致する。ソラリスも、地球で考えられる生命形態の枠を大きく越えている。（以下、ソラリスからの引用はすべて、飯田規和訳、早川文庫版による。）

ソラリスは、二重星の回りをまわる惑星だが、「二重星をめぐる惑星に生命は発生しない」という「ガモフ＝シャプリーの理論」を踏みにじり、惑星の軌道が安定している。その後の調査で、ソラリスの海は、アインシュタインの法則を積極的に応用して、空間と時間の相関関係を直接的に再構成することによって、軌道を安定させていることがわかった。「そのことが明らかになると、科学の世界には今世紀はじまって以来の最大の嵐がまきおこった」

大規模な調査が行われ、「電気、磁気、パルスの源のあるソラリスの海は一種の数学的言語のようなもので話をしているらしいこと」などが解明された。「科学者たちは次のような結論に傾いていたーソラリスの海は思考力を持つ怪物である。ソラリスという惑星のほとんど全体をおおっている原形質状の海はそれ自体が一つの脳であって、その脳はこの世に存在するすべてのものの本質について、思いもよらないほど大規模な理論的研究をおこなっている。」

しかし、海を解明しようとする試みは成功しない。ソラリスに感じて提出された科学的仮説は何万にものぼり、それらの仮説をアルファベット順に配列して一冊のハンドブックができあがるほどである。また、719人の命が、事故あるいは自殺によって失われた。

人間の焦りをよそに、海はただ飽きもせず、表面の形態を変える運動をくりかえすだけである。この運動は、ロバチェフスキーの円錐体やリーマンの負の曲線のような、なんらかの高次方程式の四次元モデルを思わせるが、「その、とてつもない複雑さのゆえに、その類似は非常に微々たるものにすぎない」それは「存在論的自己変態」とでも呼ぶうるものである。

「ソラリスの海がつくり出す擬態を上空から眺めると、それは地球上の都市を連想させるが、それはあくまでもすでに知っている現象の中で類似物を探そうとする無意識な意図から出た錯覚にすぎない」「これら巨大なものが、見る者に恐怖を起こさせるのは、・・・そこには恒久的なもの、確かなものが全然ないからであり、そこでは物理学の法則さえふみにじられているからである」

ソラリスは地球で考えられる生命形態の枠を大きく越えている。ソラリスの海には、地球上の生命概念で説明できるところはほとんどない。

文庫本の180頁から194頁までに描かれたソラリスの海の、なまなましい動きは、ソラリスの魅力の源である（紙幅の関係で引用できないが、手元があれば、今すぐ参照してほしい）。

このような文章がかつて誰かによって書かれたことがあったであろうか？ すなわち、ソラリスの海のイメージそのものに、不可解にも人を引きつける魔力があるのだ。ソラリスの海には、一度読んでしまったら、それが単なる架空の話ではなく、宇宙のどこかには必ずこうした海が実在するのだと信じ込ませるような魔力がある。

ここには、次のようなプロセスがはたらく。ソラリスの海は、レムによって勝手に作り出されたイメージではない。海はまず読者すべての心理の深層に実在する。次に、作品『ソラリス』がそれを引き出す。そして、心の中に実在する海が、宇宙空間にある架空のソラリスの海へと投影される。その時点で、心的実在の海と対応のついたソラリスの海は、もはや心の外、宇宙空間に実在するイメージとして、不可逆に定着する。

おそらく、レムにとっても、このイメージはリアルなものであり、ソラリスの海というSF的空間を設定しえたからこそ、このイメージを吐き出すことができたのではなかろうか？ こうした作業は、SFという形以外では表現不可能なイメージであろう。『ソラリス』がSFでなければならなかった必然性のひとつは、ここにある。

この心的実在が何であるのか、解釈はいくらでもつけられよう。例えば、海は回帰して行く子宮のイメージであるとか、海はエッシャーの球体オブジェのような、夢の中の魔術的異次元交差点のイメージであるとか、海は暗闇にぼっかり浮かぶ、ぶよぶよの球体としての「自己意識」のイメージであるとか。しかし、解釈はどうあれ、海のイメージは確かに心理的に実在し、それが作品『ソラリス』の魅力の源となっているのである。

●レムの3つのパラダイム

ソラリス・ビーグル・アンドロメダは、奇想天外な宇宙生物を描くことによって、逆に、地球上の生命形態の特殊性を浮き彫りにすると言える。つまり、われわれにとって、唯一自明に見える「生命」が、決して自明なものなどではないことを明らかにするのである。

レムは、生命の遍在性、唯一性への疑問をSFの形で、大胆かつ具体的にスペキュレートする。レムは、このために3つのパラダイムを作りだした。

第一が、この**ソラリスのパラダイム**である。これには、長編『砂漠の惑星』や、泰平ヨンシリーズ等が属する。すなわち、宇宙には、地球上とは全く異質で理解できない生命形態があり得ることを描いたパラダイムである。『砂漠の惑星』では、自己増殖能力を持つサイバネティクス機械同士が生存競争をかさねて進化し、その惑星の自然を支配している状況が描かれる。物質とエネルギーが入れ替わり、ブラックホールあり、ホワイトホールありのこの宇宙で、生命とは全く偶然の産物ではないのか？ 地球型生命以外の生命形態もありうるのではないのか？ こう問い直してもよい。生命の形式は無限に有り得て、われわれの知っている生命形態とは、きわめてローカルな現象に過ぎないのではないのか？ こう考えると、イワン・エフレーモフの『アンドロメダ星雲』に描かれた宇宙生物は、あまりにも偶然によりかかりすぎていると言えないだろうか？（エフレーモフの地球中心主義と、レムの相対主義との比較については、沼野充義の論稿「レムの宇宙論」『SFセミナー' 81』を参照のこと）

第二は、**生命創造のパラダイム**である。「リンファートルの公式」や「泰平ヨンの回想記第7話」のジアゴラス教授の話、「真実」等が、このパラダイムに属する。現在の地上の生命形態は、無限にあり得た可能性の中から進化によって選ばれた、たった一つの選択肢に過ぎない。こう仮定したマッド・サイエンティストたちは、他の可能性に基づいた、別種の生命形態を実際に作り出してしまうのである。これは、クローンのような、生命の模倣とは違う。リンファートル博士は、ポリマーを素材にして、またジアゴラス教授はゼリー状のシリコンを素材にして、タンパク質とも細胞とも代謝とも無関係のサイバノイドを製作する。これらは、外界を知覚する器官を持たないのかかわらず、知識を獲得し、思考することができる。リンファートル博士の作った「彼」は、すでに人類を越えた段階に達し、人類を滅ぼすであろうとすら予測されるのである。

「われわれにはこいつを言いあらわすことばがないのだ。……つまりこいつは全く生物でもなければ、一定の問題を解くように作られた創造物でもないからだ」（「泰平ヨンの回想記第7話」深見弾訳）

ここには、生命の形態は唯一であるという考え方に対する、思考実験上の反証がある。生命ではない「生命」が作り出せるのであるから。

第三は、**サイバネティクスのパラダイム**である。やはり人間の作りだしたサイバネティクス機械が発達して、多くの点で人間と区別できなくなってしまう、という状況を描いたパラダイムである。サイバネティクスの能力は、ゲーデルの証明により理論上は有限であるが、しかし、万能チューリング・マシンの思考実験によれば、事実上は無限であるとされている。レムの世界のサイバネティクスは、人間とほぼ区別できず（「審問」）、法律上の主体を獲得し（「ミスター・ジョーンズ、きみは存在しているのか？」）、詩を作り（「詩人白楽電の絶唱」）、精神病にかかり（「泰平ヨンの回想記第6話」）、そして人間の中に潜り込み、いつの間にか社会の過半数を占める（「泰平ヨンの回想記第5話」）。もし、人間とサイバネティクスの区別ができないのであれば、生命など機械とどう違うだろうか。ここにも、生命の唯一性への疑問と、生物は機械とは違うと奢る人間への警告がある。

レムのサイバネティクス・パラダイムの中でもっとも重要な作品は、「泰平ヨンの回想記第1話 鉄の箱」と、「友人」「手記」の系列である。これらの作品は、進化によって作られたのではない意識体を、スペキュレートすることによって、古典的な認識論のアポリアや存在論の命題が変容するさまを描いている。そして、「鉄の箱」で、コンピュータの外部から内部を推測して書いたレムは、「友人」や「手記」においては、コンピュータの内部レベルに立ち入って描いてしまう。一般的に言って、SFが文学史上に占める意義の一つは、言語の外にあるもの（すなわち、フランケンシュタインに始まり、宇宙人、そして機械など、人間にあらざるもの）の内部に立ち入った言語表現が可能であるか否かを試みた点にあると言えよう。「語り得ぬことについては、沈黙しなければならない」とはヴィトゲンシュタインの言葉であるが、レムのこうした作品においては、人間の言葉の境界の外にある語り得ぬことをまさに語ろうとする精神のヴォルテージが感じられる。

ソラリスのパラダイムと生命創造のパラダイムが、生命とは似ても似つかぬ「生命」を提出するのに対し、サイバネティクスのパラダイムが生命と区別がつかぬほどよく似た「非生命」を提出するという点で、方向は逆である。また、ソラリスのパラダイムが宇宙で自然に発生した生命を描くのに似対し、生命創造のパラダイムとサイバネティクスのパラダイムは、人間が地上で人工的に作り出したものを描くという点でも、方向は逆である。しかし、これら3つのパラダイムは、いずれも生命の遍在性、唯一性、進化性に対する思考実験上の反証を提出することによって、生命を相対化する比較の場を設け、地球上の日常的な生命概念を揺り動かすという点では、同じ方向にある。

●生命の本質

では、レムはなぜ生命の自明性を覆すことにこだわるのであろうか？

これを考えるとき、レムの短編「侵略」が参考になる。この作品のストーリーは、ある日、地上に隕石に乗った生物が落ちてきて、それをめぐって宇宙人の侵略だ何だという騒がれるが、結局は何も分からないというものである。この作品でレムはこう書いている。

「日常生活では、人はふつう、生命のことなんか真剣に考えんものだ。生命に、つまり今あるようなわれわれの生命に慣れっこになっちゃっているからだ。ところが、生命を新たにもう一度発見するために必要なものは、われわれとは全然別の組織体オルガニズム、違った形態と機能を備えた組織体だ」(深見弾訳)

この文章からも推測されるように、レムは、宇宙生命や機械など、異種の生命形態を描くことによって、比較対象を提出し、われわれが持つ生命概念を疑わせ、「生命とは何か？」の深淵へと引きずり込もうとしているらしい。すなわち、日常の自明の中に眠っている生命の本質の不明確さを揺り動かすことが、作家レムの第一の基本戦略なのである。なぜなら、生命の本質への問いこそ、科学、哲学、宗教、神話などを問わず、人間のあらゆる認識活動の原点であるからだ。

生命とは何か？ 物質過程の付属現象に過ぎないのか？ あるいは物質とは全く異質の現象であるのか？

これが古くからの機械論と生氣論の対立である。それは論点と意匠を変えてはいるものの、J・モノーに代表される生命科学の立場と、意識を、関心、志向性、生氣、といった非物質で捉える実存主義、現象学、ベルグソニズムの立場との対立などとして、現在でも綿々と続いている。この対立を越えようと、ベルタランフィは有機体論を提出した。

生命科学における知見の集積は目ざましいが、それでも、生命の本質の謎に間して科学が解明したことは、ごくわずかである。「生物学は、かつて、ジョージ・ウォルドがいったように、その主題をはっきりと定義できない、特異な科学なのである。誰にも生物の定義はできない。誰も本当に生物が何であるかを知っていない。古い定義、摂食、排出、物質代謝、増殖等を示す個体、というものは、無価値である。例外を幾らでも見つけることができるからだ。」(『アンドロメダ病原体』朝倉久志訳)

DNAモデルの創始者クリックによれば、以下の3点を挙げて、神秘主義的ではない生氣論(新生氣論)を唱えるものが科学者の間にあるという(「分子と人間」)。第一に、生物と無生物の間に明確な線が引けないこと。第二に、生命の発生が不明なこと。オパーリンの画期的な化学進化論以来、生命の起源に関する多くの実験が行われたが(ミラーとオーゲル『生命の起源』)、決定的なことはまだ何もいえない。クリックは、『生命—この宇宙的なるもの』の中では、生命が隕石か宇宙塵にのって飛来したという汎精子説を、逆説的ながらまともに取り上げている。第三に、人間の意識の発生が不可解なこと。生命は、このように、未だ解明し得ぬ謎なのだ。

こうした科学的説明の不可能さと、自明の生命感とのギャップから、汲めども尽きぬ疑問がわいてくる。この謎こそ、あらゆる哲学的命題の源泉となっている。存在とは何か？ 人間は由来も場所も分からず、暗闇の中に突然現れた光体として以外考えられないのではないのか？ 何ゆえここにあるのか？ 生命とか意識とかは、他の物の存在と、どのように、なぜ異なるのか？ 人間を作り上げた他の存在(たとえば神)が存在するのか？ 人間がこのようなことを認識することができるのはなぜか？ 自らの素性も知らないような人間が、何かを認識することなどできるのか？ 人間が認識したと信じていることは、実は幻で、先天的に認識されるべく用意されたものをただなぞった結果にすぎないのではないのか？

●生命の謎とSF

すべての思弁哲学は、生命の謎から出発しているといっても過言ではない。そしてまた、生命の謎こそが、SF作家をして地球外生命という発想をSFの形で、表現せしめる。宇宙生物を描いたSFは、哲学と同じ根から発している。この意味で、宇宙生物SFは、哲学小説と呼んでよい。これは、HGウェルズ以来のSFの財産でもある。

ソラリスのパラダイムの他に、宇宙生命のスペキュレーションをおこなったSFで忘れてはならないのが、アーサー・C・クラークによるパラダイムである。属する作品は、『幼年期の終り』『2001年宇宙の旅』や、小松左京の『果てしなき流れの果てに』等である。オールディスの『十億年の宴』によれば、このパラダイムの創始者は、オラフ・ステープルドンであるらしい(彼の2大長編の翻訳が待たれる)。

クラークによるパラダイムとソラリスのパラダイムを比較すると、両者の特徴が明らかになる。同じ宇宙生物SFではあるが、クラークが目に見えない全知全能型の、意志としての生物を描く(力の比喩ーポリンダー)のに対し、ソラリスでは、目に見える、不可解な、認識の対象としての生命が描かれる。いずれのパラダイムも、人類が、宇宙生物を真には認識できないという点では共通する。しかし、その敗北の後、クラークが、人間の無力を悟りその生命に導かれて合体進化する結末を描くのに対し、ソラリスでは、その生物に突き放されて、人間の認識の限界を見せつけられ、おとしめられる結末が描かれる。クラークが、宇宙の彼方に、神に変わるものを予定するのに対し、ソラリスでは、宇宙の彼方に何も目指すものがなく、そこにはただ敗北する人間が取り残されるばかりである。

いわば、クラークのパラダイムの目的が存在論的思弁にあるとするならば、ソラリスのパラダイムの目的は認識論的思弁にあるといえよう。

●模倣現象／コピー現象

レムは、生命の本質の自明性を揺り動かした後、さらに、生命の起源に関する人間の本能的な二者択一式課題設定をあばいていくのである。

このことは、レムの描く模倣の現象を解明していくことによって明かとなる。レムは多くの作品中で、宇宙生物が地球上の物体や人間のコピーを作るというモチーフを使っている。ソラリスでは、人間の潜在意識を再生する現象と、海自体がおこす超擬態と呼ばれる模倣現象とが描かれている。この他、『エデン』、「迷路の鼠」、「侵略」などにも、同じモチーフが使われている。

ところで宇宙生物のおこなう模倣は、レム以外の作家でも使っており、SFではおなじみのモチーフである。ざっと上げて、フィニイ『盗まれた街』、ホイル『10月1日では遅すぎる』、ファーマー『恋人たち』、クラーク『2001年宇宙の旅』……

しかし、レムの描く模倣の意味は、他の作家の作品のそれと若干異なる。他の作家の作品では、ある宇宙生物が、ある明確な目的で、コピーを製作する。『盗まれた街』の宇宙生物は、地球侵略のために、人間をコピーして人間と入れ替わり、『10月1日では遅すぎる』の未来人は、ある目的のために、各時代の地球をコピーしてつぎはぎし、『恋人たち』の女性の形をした宇宙人は、生存のため、性交した男の顔を模倣した子供を作り、『2001年宇宙の旅』の宇宙生命は、地球の宇宙飛行士を安心させるために、人間の部屋をコピーする。ここには、明確な主体性、目的性、行為性が設定されている。

これに対して、レムの描く模倣現象には、こういった明確な主体性も目的性も、行為性も含まれてはいない。レムの宇宙生物は、明確な意図なく、コピーを作ってしまう、いや、作るのですらなく、単に模倣するだけだ。『エデン』や「迷路の鼠」におけるコピーなどは、ただ馬鹿馬鹿しくも、地面に捨てられてころがっているだけだ。このコピー人形に解釈を加えたり、感情移入するのは、人間の側の一方的な思い込みすぎない。他の作家が、宇宙人の模倣行為の裏に、明確な解釈可能な意図を設定するのに対して、レムは何の意図をも設定しない。

レムの模倣の考え方は、生命の起源に関する、目的論と因果論（進化論）の対立を解消させてしまう命題である。もし、宇宙にこうした模倣現象がありうるとしたならば、目的論も因果論も、ともに大きな反証を突きつけられたことになる。なぜなら、コピーは何ら目的なく作られたのであり、例えば神の意図のような必然性を持って作られたわけではないので、目的論では説明できない。また逆に、かといって、コピーは偶然や突然変異や進化によってできたわけでもない、因果論でも説明できないからである。コピーの人形を見た主人公たちは、いずれもかなりのショックを受けている。それほど人間は、生命の起源を、目的論か因果論かの二者択一で割り切る思考方法に慣れ切っている。レムは、SFではおなじみの模倣現象を独自に用いて、人間の認識の自明性をあばく。

●科学と哲学の境界線の解消

レムの作品に共通する論法は、物の起源を問うに当たって、科学主義と哲学主義のどちらでも説明できない現象をスペキュレートし、反証をあげることによって、両方の思考法を越えるという方法である。

「私たちは、純粋に本能的に、すべての物質的世界は次のような二分法にはっきりと従っている、と考えてしまうからであります。つまり、この物質的世界は**誰か**によって創られたのか（その場合、信仰の立場に立てば、私たちはその**誰か**を**絶対者**とか、**神**とか、**造物主**と呼ぶわけです）、あるいは誰かによって創られたという訳でもないか、のどちらかということです。後者の方は要するに、私たちが科学者として世界を研究した場合、世界は誰によって創られたわけでもない、ということを意味します。ところが、アヘロプーロスはこう言ったのです。"Tertium Datur" つまり、世界は誰の手によって創られたという訳ではないのだが、それでもやはり創られたのであり、宇宙には創造者がいるということです。」（「新しい宇宙創造説」 沼野充義訳）

この論法が、意識の起源に適用されると、生氣論と機械論に変わる前述のサイバネティクスのパラダイムとなる。また生命の起源に適用されると、目的論と因果論に変わる前述の生命創造のパラダイムや、ソラリスのパラダイムの模倣現象となる。

さて、生命や意識の自明性や二者択一思考を明らかにしたレムは、この論法を世界の起源に対して適用する。世界はなぜ今のようにあらねばならなかったのか？ 神と偶然に変わる第三の創造者は、いくつも考えられる。『天の声』においては、世界は、ビッグバン前後をつなぐニュートリノのプログラム情報によって作られた。「泰平ヨンの航星日記第18回の旅」において、世界は、この世を合法化するためにビッグバン以前へ向けて発射された素粒子によって作られた。「新しい宇宙創造説」において、世界は、創造者のゲームによって造られた。こうした奇想天外な説明は、世界はこれ以外にもありえたという反証を、科学と哲学の両方に対して突きつけるために提出されたものである。

レムが描く科学と哲学との境界線の解消は、現場の第一線の科学者と共通の感覚なのではなかろうか？ 世界は未だに科学も哲学も解明し得ていない。そうである以上、われわれが方法論としてどちらを取るかは、正誤の問題でなく、全く自由である。いずれの立場をとっても、科学主義とか、哲学主義とか、主義という言葉をつけざるを得ない。それらの選択は、好みや、性格や、素質や、社会的立場や、教育などの関数である。未だ解明しえぬ神秘的なものを、「神」と呼ぼうが、「偶然」と呼ぼうが、等価である。その意味では、第一線の科学者たちは、毎日、「神」と接しているとすら言ってよい。安易な体系化の前に未知なるものを未知なるものと認めたり、仮説を提出し、それを検証したり、反証したりするためには、開かれた強靱な意志を必要とする。地球型生命の唯一性を否定するレムの立場は、一見、不可知論や悲観的懐疑論のように見えるが、そうではない。レムは科学と哲学の限界を描くことによって、実は、その限界の外を描こうと試みる。こうした作業を支えるものは、レムの、科学者としての開かれた強靱な意志である。

2. スタニスワフ・レム論

ソラリス あるいは科学者SFの復権 第2回 人間
「SFの本」第3号、1983年.

丹野義彦

地上的な地獄と宇宙的な地獄とが、ソラリス・ステーションで交差したとき、内宇宙と外宇宙は出会い、溶け合った。ソラリスの衝撃の秘密はここにある。

●マッド・サイエンスからビッグ・サイエンスへ

本論の目的は、スタニスワフ・レムの『ソラリスの陽のもとに』がなぜ衝撃的であるかを解くことにある。前回は科学される「自然」に焦点を絞って、ソラリスと『宇宙船ビーグル号』および『アンドロメダ病原体』を比較し、レムの認識論的立場について述べた。今回は、科学する「人間」に焦点を絞り、3作の主人公である科学者について比較し、その過程からソラリスのドラマについて述べてみたい。

まず、3作の第一の共通点は、主人公がビッグ・サイエンスに従事していることである。このことが、彼らの人格や行動を大きく規定している。この点は、同じく科学者でありながらも、ビッグ・サイエンスには属しないマッド・サイエンティストを描いたSFと比較することで明らかになる。ここでは、マッド・サイエンティストのモデルとして、F＝J・オブライエンの「ダイヤモンドのレンズ」(1858年、『失われた部屋』大滝啓裕訳、サンリオSF文庫所収)を取り上げる。主人公は、幼い頃から顕微鏡を使った研究に打ち込み、友人を殺してまで、無限の性能を持つ顕微鏡を完成する。その視野に主人公がみたものは、ミクロの世界の美女であった。そして、この美女の死と共に彼は発狂する。彼の特徴は、

- ①認識と生活が分離し、前者が後者を凌駕する。認識のみが、彼の自己実現領域である。認識のためにはあらゆる犠牲を厭わず、友人を殺し、人間関係を失っても平気である。
- ②彼は自らを天才であると直感する。彼の認識論上の不可知論は、天才の抑うつ期の症状であるかのごとくである。
- ③性欲と認識欲とが混じり合う。認識の対象に性的な同一視を起こし、距離を失う。
- ④認識は孤独の中で、自閉的に行われ、成果の発表を見下している。彼の敵は、自然というより、むしろ他人であるようだ。狂気とつねに接し、彼が正気か狂気かの運命は、自分の科学的仮説が真か偽かの運命に大きく左右される。

こうしたマッド・サイエンティスト像は、当時の科学者のカリカチュアである。愛すべき、古いタイプの科学者像は、M・ガードナーの『奇妙な論理』に、幾人も紹介されている。しかし、今や科学そのものが変化した。マンハッタン計画以後、天才の時代は終えんし、科学活動は、ビッグ・サイエンスに吸収された。ソラリス・ビーグル・アンドロメダの主人公たちの特徴を比較すると、

- ①認識はあくまで手段である。彼らはさしあたりの目的を、ある課題解決におく。その解決こそが彼らの自己実現領域である。彼らの行うのは、認識そのものではなく、認識を含む行為と呼ぶべきである。
- ②彼らは、自らを凡人であると認めるが、それ以上でもそれ以下でもないことを知っている。それ故に、着実に方法的手段を積み、認識に達し得ることを知っている。かれらの認識論的不可知論は、凡人の躁期の症状であるかの如くである。
- ③彼らは人格のあらゆる幅において認識行為をなし、結果に対して責任を持つ。彼らは旺盛な行動力と責任感の故に、その仕事の任に当たっている。それらは専門家としての能力と同等に評価される。対象との距離は最適かつ一定になるべく、訓練される。
- ④彼らは、プロジェクト・チームを組む。それ故、同僚との協調性や社会的常識を要求される。彼らも常に狂気と接しているが、彼らを救うものは、自らの行為そのものである。

●行為としての科学

ソラリス・ビーグル・アンドロメダの第二の共通点は、主人公の科学者としての行為が、作品のストーリー展開を決定していることにある。科学者の行為は何よりシンプルであり、彼らは開かれた共通の言葉で語る。3作のストーリーは、次の4ステップに要約できる。

- ①問題の観察と明確化
- ②仮説設定
- ③実験
- ④評価(仮説棄却の場合は、②に戻るループ)

ビッグ・サイエンスは、科学の内容をも変質させた。「世界を知ろうとすることは世界を作ることであり、生命を知ろうとすることは生命を作ることである。傍観するように知ると言うことはありえない」(現代思想 1981年4月号編集後記)

どこかに、「科学」のアイデアというものが存在し、次に科学者の行為を促すといった状況はすでに過去のものである。彼らの行為が先ず存在し、その行為の結果が科学である。その意味では、数学とは、数学者の数学的行為の記録である。もっとも、未来をも含む記録であるが。

●隔離された空間としての科学

第三の共通点は、主人公たちが、隔離された狭い空間ににいることである。ソラリスでは、ステーションの壁が、ビーグルでは宇宙船の壁が、アンドロメダでは厳重な滅菌システムが、それぞれ主人公たちを日常社会から隔離している。彼らはルドルフ・シュタイナーの言う霊界に参入しているかの如くである。

空間的に拘束された主人公たちの状況は、＜知＞のあり方を端的に象徴するものといえよう。＜知＞とは、外側にある暗い無限に対して、ぽっかり開いた閉領域である。そして、科学者は、＜知＞の最前線のこちら側にいて、向こう側にある無限の闇を取り込むべく活動している。科学の原初的イメージには、内／外、および明／暗という2組の差異項が付きまとう。だから、SFにおけるロケットは、科学精神の象徴に他ならない。（もちろん、ロケットは、ペニスの象徴だとか、精子の象徴だとか、槍＝武器の象徴だとかいう人もいるけれども）

ところで宇宙をこうした二分法で分けるのは、職業的科学者に特有のものであるらしい。同じくロケットで宇宙を飛ぶSFでありながら、レンズマン・シリーズの兵士、『宇宙商人』のテレビ・ディレクター、宇宙都市シリーズ（ブリッシュ）の一般市民（オーキー）は、宇宙二分法図式を持たない。彼ら「非科学者」は、地球上と宇宙の区別をせず、宇宙の無限に対して、全く恐怖を抱かない。生活者は、図式を必要とするほど脆弱な精神構造をしていない。純系の科学者だけが、無限から保護される必要がある。

したがって、ソラリス・ビーグル・アンドロメダにおいては、無限と有限の境界である壁が、ストーリーの展開に重要な役割を果たしている。人間は、壁を通れない。これに対して、ソラリスの幻、ビーグルの宇宙生物、アンドロメダ菌株は、いずれも、壁を自由に通り抜けて人間に危害を与える。壁は、人間の知の限界を象徴する。一方で、壁は、行動の自由を制限するものとして、科学者を遮る。しかし、その一方で、壁は、観察対象との間に一定の距離を保つ。そして一たび科学者が挫折したとき、壁は内側を保護するものとして機能する。壁は生きた細胞膜のように、2方向性を持つ。逆に言えば、＜知＞の限界とは、人間を無限から保護している。したがって、膜のバランスが崩れたとき、密室の中に狂気が忍び込む。

は

●危機の科学

第四の共通点は、危機の科学を描いていることである。強固な反証を目の前にして、生命概念の古いパラダイムは、もはやアド・ホックな修正の余地がない。T・クーンに従えば、ソラリス・ビーグル・アンドロメダは、非通常科学を描いている。しかし、危機に面するのは、科学そのものであると同時に、科学者自身の自己同一性でもある。

もともと、認識とは、危機において生まれるといえよう。認識とは、ある知識が単に主体に付け加わることではない。これまでのやり方では、状況にどうにも適応できなくなったとき、主体は何らかの行為を発する。それが一つの認識を生む。つまり、認識とは、危機における行為の結果である。自明であった過去は、一度破壊されねばならない。しかし、これは危機の前半分に過ぎない。たとえこれを乗り切ったとしても、得られた認識が、過去と斉合的に調和され、自らを一貫した個体として維持できなければならない。得られた認識内容が自明化されるためには、一度破壊された過去こそ呼び戻されねばならない。両者が斉合的に調和されるか否か、主体は内的な戦いを強いられる。これが危機の後半分、すなわち、自己同一性の危機である。

発生認識論者ピアジェは、この2つの認識の過程をそれぞれ、同化および調節と呼んだ。認識の営みが成立するためには、内外の2段階に渡って、危機に見合うだけの主体の安定を必要とする。

科学する人間の立場から危機の科学を眺めると、より危険なのは後者、すなわち、調節の危機である。ソラリス・ビーグル・アンドロメダの科学者は、宇宙生物を前にして、まず同化の危機に直面する。その失敗は、宇宙生物に殺されることである。しかし、彼らは必死に仮説を考え出し、実験を試みる。新しいパラダイムを作り出すことは、実は想像するほど困難ではない。彼らは同化の危機を乗り切る。むしろ科学者にとって本当の危機は、調節の危機、すなわち新旧のパラダイムの再統合にある。合理的であろうとする意欲が強ければ強いほど、彼らは過去の自明性から遠ざかる必要がある。だから、科学者は、たとえ同化の危機を乗り越えても、すでにもとの自明な空間へは戻って来れないかも知れない。彼らが自己同一性を失って狂気に面するのはこのときだ。

●認識の空間から精神病理学的空間へ

ソラリス・ビーグル・アンドロメダは、宇宙生物との戦いの形式をとる。3作とも、主人公は男性である。（もちろん、科学者SFは男性の物語とは限らない。K・ウィルヘルムの『クルーイストン実験』や、ウィンダムの『地衣騒動』などの主人公は女性の科学者である。）彼らは、死か発狂かの極限状況に追いつめられている。閉ざされた認識の空間は、精神病理学的空間と化す。これが第5の共通点である。

ビーグルでは、テレパシー、幻聴、作為体験、被害妄想など、精神異常の諸症状が書き込まれている。怪獣のテレパシーによって操作された乗組員たちは、お互いに殺し合いをはじめ、ビーグル号の船内は疑惑の空間と化す。

さらに、主人公は、最後には、誇大妄想にとりつかれ、他の乗組員たちの意志を機械によってコントロールし始めるようにすらなる。

アンドロメダの主人公は、持続的な疲労や緊張、睡眠不足を経て、夢と現実との境界があやふやとなる。そして、あるものはてんかんの発作を起こして失禁し、またあるものは次々と重大なミスを犯し、あるもの

は不安におびえ、死の薬を願う。

ソラリスでは、2つの形態の狂気が描かれている。

理由は全く不明だが、海は、ケルビンの潜在意識の中に眠る、昔の恋人ハリーのイメージを、ニュートリノによって、実在化させた。ハリーは、昔、ケルビンが精神的に追い詰めたせいで自殺した恋人である。彼はそのことに対して罪の意識を抱いていた。海が実在化させるのはまさにそういう心の傷、病的な部分なのだ（心理の島仮説）。ハリー・幻を見たケルビンは、まず自分が発狂したのだと思い込む。これが第一の狂気である。しかし、この疑惑は、派手ではあるが、それだけ自覚しやすく、退治可能な狂気であると言える。事実、ケルビンは、自らが正気か狂気かの決定を、コンピュータを用いて行うことができたのである。

ソラリスの第二の狂気は、静かな、それだけ手に追えない狂気と言える。

ハリー・幻は、普通的手段では消すことができない。退治しても次から次へと送られてくるからだ。ケルビンはこの幻と何らかの関係を持たざるをえない。ハリー・幻の側も変容する。最初は単なるコピーの人形に過ぎなかったハリー・幻は、しだいに主体性を持ちはじめ、自分の存在の秘密を探り出そうとし、自分がコピーにすぎないことを知って自殺まで図る。しかし、肉体が不死身の彼女は死ねず、それに対し、ヒステリーをおこす。彼女は、すでにまぎれのない1個の人格である。ケルビンの心も動き、ハリー・幻との間に相互的な関係が生じる。彼は、ハリー・幻との心的円環の中に閉じこもる。しかし、一方で、彼は毎晩悪夢にうなされるようになり、科学的活動にも、他の日常活動にも意欲をなくし、無気力自閉の生活を送るようになる。彼の心象風景と呼応するかのように、ソラリスの海の風景は、不気味な動きを見せる。赤い太陽の時はケルビンの心の高揚、青い太陽の時は、ケルビンの心の衰弱や悲しみなどと、呼応している。この変化過程が、ケルビンのドラマの圧巻である。これが、第二の、静かな狂気である。ケルビンだけではない。ステーションの同僚たちも、それぞれの幻を抱え、アルコールに浸り、しかも同僚のひとり自殺まで遂げている。

●ソラリスの罠

ではなぜ、ケルビンは無気力となり、静かな狂気に陥ってしまったのだろうか？ 例えば、ファーマーの『恋人たち』では、やはり宇宙生物が化けたにせの女性との恋愛事件が描かれているが、『恋人たち』の主人公は本物の愛というものを知り、それによって実存的に救われてさえいる。なんとケルビンと違うことだろうか？ 『恋人たち』のように、ソラリスでの現地妻を侍べらせて、享乐的な空間ともなり得たはずだ。なのになぜ疑惑の空間と化したのか？ なぜケルビンは悪夢にうなされるのか？ なぜ、同僚はアル中になり、自殺を遂げたのであろうか？

これを考えるためには、ケルビンとハリー・幻との関係の複雑さを念頭におく必要がある。ハリー・幻は、ケルビンにとって他者であり、潜在意識の投影としての自己自身であるが、同時に人間ではない「もの」である。彼女はケルビンにとって、同時に他者、自己自身、観察対象物の3つの関係として存在する。

まず、他者としてのハリー・幻は、ケルビンにとって、ハリー・実在に対する罪意識をあがなう対象及び愛の対象として存在する。彼はひとりの恋人として彼女に接し、地球に連れ帰るといった幻想を抱く。『恋人たち』と共通するのはここまでである。なぜなら、この関係は偽物だからである。

ハリー・幻が彼の潜在意識の投影である以上、彼は彼女を通して自己自身と関係しているに過ぎない。実は、彼は水面の鏡を見るナルシスの如く、自分の分身と交渉するに過ぎない。彼は他者としての彼女と自己自身としての彼女を混同しはじめる。それは自覚していても坑えない。なぜなら、そうしたいという隠れた欲求があるからだ。

「自己が実体ではなく、他者との関係および自己自身との関係においてある関係的存在であるかぎり、われわれもまた自己自身との再帰的關係に閉じこもることによって、実体がもつような、堅固で不可侵の自己同一性に到達したいという潜在的な欲望をもっている。」（市川浩『精神としての身体』）

ハリー・幻はケルビンの隠れた欲望をあばきだす装置となる。これが狂気の始まりである。ナルシスの罠が、罪の意識にも関わらず、ハリー・幻との関係を密にしていく。この結果、彼は外界への関心を失い、自己とのみ対話し、将来への希望をいっさい捨てて、限りなく孤独な対話に耽る。「しかし、世界および他者とののかかわりをさけ、もっぱら自己自身とかかわることによって、不安定な自己のアイデンティティを守ろうとする試みは、精神病患者の内閉的生が示すように、自己を空虚な非現実的存在と化し、逆説的にそのアイデンティティを失わせるであろう。」（市川浩 前掲書）

ケルビンがハリー・幻とのにせの関係の中に完全に閉じこもった時、彼は生きる気力を全く失い、かつハリー・実在への罪意識だけの世界に生きることになるだろう。それはまさに地獄だ。同僚はこの自閉の地獄に耐えきれず、アルコールによって我を忘れ、最後には自殺を遂げたのだ。

ソラリスの第一の狂気は、夢か正気か、という彼ひとりの意識の病である。これに対し、第二の狂気は、ケルビンとハリー・幻との関係の病である。しかし、実はこれもケルビンひとりの関係の病である。表面的には、他者と関係しているように見えるだけに、誰もとがめ立てできない、たちの悪い狂気だ。これと似た設定は、大江健三郎「共同生活」にも見られる。

さらに、ハリー・幻は、科学者ケルビンにとって、観察の対象物として存在している。しかし、この主体と客体の関係は、ハリー・幻の間では、きわめて逆説的である。もし、ケルビンが科学者としての任務に対して単に表面上厳格であれば、ハリー・幻を単なるニュートリノのかたまりとして認め、彼女との人間的接触を拒否したであろう。（同僚のサルトリウスは、幻をF物質と呼んで、人間としてではなく、物質とし

てしか扱おうとしない。サルトリウスこそ、この偽の科学者そのものである。)しかし、そうすれば、海の送ったせつかくの観察対象を無視することになり、ソラリス科学者としては失格である。

したがって、彼が、真に誠実な科学者であれば、逆に科学的事実を忘れて、彼女との人間的関係を持つ必要がある。(同僚のギバリャンはこのタイプであり、真に誠実な科学者たろうとして、幻を人間として扱い、研究しようとする。ギバリャンは科学的認識に忠実であろうとしたために苦しみ、自殺に至る。幻を物質としか見ないサルトリウスは、これほど苦しむことはない。)主体と客体の、整然とした二分法的関係は混乱する。こうして、幻といったん関係した途端に、彼はナルシスの罠の虜となる。これこそ、科学そのものがソラリス駐在員を狂気に陥れるメカニズムなのだ。

●仕掛け(トリック)としてのハリー・幻

ハリー・幻がケルビンにとって、同時に、他者、自己自身、観察対象を演じるという1人3役の離れ技は、奇跡とも言うべき、卓抜な仕掛け(トリック)である。

この仕掛け(トリック)は、模倣、投影および接触という3つの構成部分からなる。

①模倣は、前回述べたように、目的論でも進化論でも説明できない現象として、レムが多用する認識論上の基本的小道具である。

②投影は、人間の潜在意識が実在化する(人の潜在意識の世界に主人公が入る)という設定であり、SFには、ディック『宇宙の眼』、ブラウン『発狂した宇宙』、ホイール『第五惑星』、フランケ『思考の網』など多くの例がある。投影だけを描く普通の文学作品は多い。

③接触は、宇宙生命との人間的接触の設定であり、言うまでもなく、SFの常套手段である。

これら3つの設定を同時に組み合わせることには、もともとなんら必然的關係はない。事実、ソラリスの原型とも言うべき「迷路の鼠」の設定には、模倣はあっても投影や接触はなく、また、レム以外にも、『恋人たち』やフィニイの『盗まれた街』の設定には、模倣と接触はあっても、投影はない。この3つの設定は、なんらまとまって使われる必然性はない。つまり、レムは、本来は無関係で、ありふれたSF的設定の組合せから、錬金術のように、1人3役の仕掛け(トリック)を作り出した。

その結果、ケルビンとハリー・幻との関係は、現代的な自意識の地獄を象徴することになった。ソラリスの人間ドラマは、J・P・サルトルの戯曲『出口なし』とほぼ等価である。

密室劇『出口なし』の舞台は、一見普通の部屋だが、実は地獄である。ここでは、鏡がすべて抜き取られ、他人を見ることによってしか自分を見ることができない。見られる自己が定まらないので、見る自己も極めて不安定である。主人公たちは、自己が不安定であるゆえに、自己自身や他者との関係によって自己を実体化し、安定させようと試みるが失敗する。他人こそ地獄であり、それはまなざしの地獄である。一方、ソラリスの密室劇も、ハリー・幻という、他者と自己自身の混合した対象と関係することによって、自己を安定化させようとするケルビンの空しい試みが描かれる。両者の内容はほぼ等価といえる。

『出口なし』では、何の変哲もない部屋を地獄と見立てて、死んだ人間を主人公とするなど、象徴的な仕掛け(トリック)が用いられる。しかし、設定の点からみると、これはやや安易な、無理のある設定と言える。これに対し、ソラリスでは、ハリー・幻が無理なく3役を併せ持つことによって、小説としての首尾一貫性が整っている。つまり、ソラリスは、『出口なし』のような設定上の醜さなしに、それでいて、『出口なし』と等価の地獄を表現し得た作品である。現代文学としてのSFの可能性について、卓抜した達成をわれわれはソラリスにおいて見ることができる。

●地上的地獄と宇宙的地獄

実は、ソラリスには、もう一つの錬金術的な仕掛け(トリック)がなされている。すなわち、地上の存在論的設定と、宇宙の認識論的設定との対比・融合である。ケルビンとハリー・幻のドラマは、地上的な設定であり、もともと、ソラリスの科学的設定とは何の必然的関連も持っていない。ソラリスの原型である「迷路の鼠」は地上が舞台であるし、主人公は科学者ですらない。ところが地上的ドラマが宇宙でおこるという仕掛け(トリック)によって、幻惑的な図地変換がおこる。恋愛における罪意識やナルシズムというテーマは、もし地上の小説であれば、ごくありふれたものになっただろう。ところが、宇宙空間に舞台を移した瞬間、このありふれた男と女のドラマは、世紀の大事件となり得た。地上ではありふれたものこそが、宇宙では、最もありそうにないことである。最も日常自明なことこそが、およそ非日常が自明化している宇宙では、最大の珍事ではないか? これは、全く見知らぬ土地を旅行していて、偶然、知人と出会ったときの、あの不気味さと似ている。ケルビンが、他者と自己自身を混乱するのも、この図地変換により、自明性の混乱をおこすためである。

しかも、こうした人間のドラマが科学者に生じるという仕掛け(トリック)によって、認識における主体／客体関係の虚構性があばきだされる。

最後には、こうした種々の仕掛け(トリック)がレムの認識論の大がかりな仕掛け(トリック)の一部におさまる。すなわち、人間の狂気のドラマが、次回詳しく述べる科学の敗北の歴史とぴったり重なる仕掛け(トリック)である。ソラリスの大舞台は、認識論的設定が、存在論的設定に裏打ちされたときに完成する。いわば、地上的な地獄と宇宙的な地獄とが、ソラリス・ステーションで交差したとき、内宇宙と外宇宙は出会い、溶け合った。ソラリスの衝撃の秘密はここにある。もちろん、そのどちらか一方ですら、ソラリスは衝撃的であったことだろう。これは例えば、タルコフスキーが映画『惑星ソラリス』で、地上的な地獄のみを拡大してイメージ化しえた、ということからも想像がつく。

もちろん、仕掛け（トリック）が失敗に終る可能性はつねにあった。本来無関係なものを、いかに必然的に結び付けるかが、作家レムの筆力にかかってくる。事実、『星からの帰還』で、レムは宇宙と恋愛を関連させる仕掛け（トリック）に失敗している。これはレム自身が認めていることである。（「まるで茸取りの名手のように」沼野充義訳 カイエ1ー6）ソラリスにおいて、認識と実存という、本来は無関係な設定を、錬金術のように、必然的設定に変えてしまった、レムのイマジネーションの力業を称えたい。

●正気の保証はどこにあるか？

ソラリス・ビーグル・アンドロメダでは、科学という最も合理的な営みと、狂気という最も非合理的な営みが共存することになる。彼らは、科学者にふさわしい方法で狂気に対処する。これが第6の共通点となる。

認識の空間では、自分が正気であるという心理的な確信ほどあてにならないものはない。また、日常社会から隔離された空間では、狂気に関して全員が当事者である。正気であることが保証された三人称的傍観者は誰ひとり存在しない。さらに、科学者SF以外ならば、たとえばバルザックの小説のように、「神の目」が狂気と正気の判定を行うこともできよう。しかし、主人公が科学者である限り、「神」に自分の正気の保証を求めることは、科学者のプライドが許さない。すなわち、彼らは、心理的自明性、第三者、そして神のどれにも頼らず、自らの正気を証明する。やり方は様々だ。

ビーグルの乗組員たちが疑心暗鬼におちいったとき、彼らは次の3タイプに分かれる。第一に、自分の専門分野の知識に閉じこもり、行動しないもの。第二に、船内の多数派を占め、政治権力によって自らの正気を証明するもの。第三に、地道な説得を抜きにして、催眠術や脳波コントロール装置や、薬物によって、直接他人の意志を操り、自説の正しさを証明しようとするもの。後二者とも、集団の力に頼ることでは同罪である。彼らは手段を選ばず、正負の多数決原理によって、自らの正気であることを立証しようとする。正気は、ビーグル号乗組員の社会心理の力学によって決定される。

アンドロメダの専門家たちは、自分たちが犯す過ちの可能性を予め予測し、過ちを最小限に抑えるプログラムを整えることによって、狂気に陥ることを予防する。彼らは、未来を予測し、予測の結果からみて、現在の自分が正気か狂気かを確かめる。現在形にはもともと、正気か狂気かの決定権はない。予測が正しければ彼らは生き延び、誤っていれば死ぬであろう。彼らは、自らの生命を生物学的自然淘汰に委ねる。未来からの生物学的フィードバックが、彼らの正気の保証となる。結果的にみれば、彼らはこの生物学的適応に失敗する。予測を誤った彼らを待つものは、考えられるうちでも最大の狂気の沙汰、すなわち、核自爆装置なるしるものである。皮肉にも、彼らをこの狂気から救うものは、正常者ではない。彼らを救うものは、ミシェル・フーコー（『哲学の舞台』）によれば狂人と同じにランクされる独身者（オッドマン）である。

ソラリスの主人公は、第一の狂気に当たっては、自らの正気の保証を論理則に求めた。ケルビン、自分の数学的計算と、コンピュータによる演算との合致度を求め、自分が正気か狂気かの決定実験を行った。

ソラリス第二の狂気からの脱出は、これほど単純にはいかない。ケルビンと同僚は、幻を消すために、2つの科学的方法を考え出し、実行する。

第1は、人間の覚醒時の脳電図を海に通信し、彼らの苦悩を海に理解してもらおうとすること。

第2は、直接、ニュートリノ崩壊装置を作ること。ニュートリノは、不安定であり、ハリー・幻は海の作った場においてしか安定して存在できない。そこで、ニュートリノを安定化させている場を破壊する装置を、物理学者のサルトリウスは考えようとする。

ケルビンは、ハリー・幻との生活を望みつつも、計画に参加する、といったアンビヴァレンツな状態にある。しかも、幻を組織学的に検討し、幻がニュートリノから構成されていることを発見し、幻が真の人間でないことを証明したのは、他ならぬケルビンである。ケルビンの葛藤は、ハリー・幻が決着をつける。彼女はみずから、ニュートリノ崩壊装置に入り、消滅する。つまり、感動的なことには、ハリー・幻は、人間として、ケルビンを救うために自殺するのだ。けれども、結果的にみると、ケルビンを狂気から救い出したのは、ニュートリノ崩壊装置を作り出した、ケルビンの科学者としての論理則である。

地上的な地獄を抜け出たはずのケルビンは、しかし、激しい後遺症に襲われる。ハリー・幻の消滅は、彼にとって、他者、自分自身、観察対象が、同時に消えることを意味する。第一に、彼は、まず、恋人であり贖罪の対象でもあった対象を失う。実在の人間を殺すことは、まさに殺人行為であった。第二に、自分自身としてのハリー・幻の自殺は、とりもなおさず、ケルビン自身の自殺行為でもある。ナルシスの鏡を失った彼の自己は、永遠に実体とはならず、関係としての希薄さに留まるしかないであろう。ハリー・幻の消滅は、他殺かつ自殺であるという特殊な事態である。第三に、彼は、観察対象を自ら葬ったことにより、科学者としても失格する。

彼は、現状の一切を肯定する「不完全な神」の幻想を見、みずからの無力を慰める。しかし、やがて、彼は回復する。その契機となったのは、彼の悲しみを上回る神秘が、ソラリスの海にあることを発見したことである。すなわち、彼が人間として救われるのも、自然の神秘に呼応する、科学者としての意志である。

「私はここにある現実の神秘を、底知れぬ絶対的な沈黙の力を、はじめてまざまざと感じとった。私は圧倒され、呆然として、石のように固くなり、喪失感をますます強く味わいながら、この盲目の液体の巨人と一体になることを熱烈に願いつつ、いささかのやましきも、うしろめたさもなく、文句なしに、無条件で、この海の巨人に対して、すべてを、私が味わった悩みと悲しみのすべてを許す気持ちになった。」（飯田規和訳 早川文庫版）

ピアジェによれば、「どんな心理学の説明でも、遅かれ早かれ、結局は生物学によりかかるか、論理学に

よりかかることになるものだ（また、社会学によりかかるという手もあるが、これも、おしつめていくと、やっぱり上と同じ二つの場合の一つに落ちつく）」（『知能の心理学』波多野完治・滝沢武久訳）

ピアジェに従って、あえて図式的に整理しておこう。科学者の正気の保証という心理学上の課題を、ソリスでは論理学に、ビーグルでは社会学に、アンドロメダでは生物学に、それぞれよりかかって解決する、と。

3. スタニスワフ・レム論

ソラリス あるいは科学者SFの復権 第3回 科学
「SFの本」第4号、1983年.

丹野義彦

ソラリスティックな瞬間とは、人類を不断の認識へと駆り立てる、不安でもあり快感でもある神秘的瞬間のことである。

●接触をめざす総合科学

本論の目的は、スタニスワフ・レムの『ソラリスの陽のもとに』がなぜ衝撃的であるかを解くことにある。前2回において、科学される「自然」、および、科学する「人間」に焦点をあてて、ソラリスと『宇宙船ビーグル号』および『アンドロメダ病原体』（3作とも早川文庫版）を比較した。その過程から、ソラリスの認識論的意義および存在論的意義について述べた。今回は、自然と人間の交互作用としての「科学」に焦点をしぼり、3作に描かれた科学を比較することにより、ソラリスの科学論的意義について述べてみたい。

ソラリス・ビーグル・アンドロメダは、いずれも未知の宇宙生物との接触を描くが、その接触にあたって科学が媒介（メディア）となっている。これが第一の共通点である。例えば、クラークのパラダイムのように、もし相手が人間の言語を理解しうる程の知能を持つならば、接触に際して科学を媒介とする必要はない。しかし、相手が地球の1.2倍の半径を持つ海とか、2ミクロンの細菌とかのように、言語はおろか、人間となんの共通点も持たないような場合には、媒介は科学に負わされることになる。そこに、本来は認識の道具である科学が、その妥当性を試される場が作られる。

3作に描かれた科学の第二の共通点は、細分化された個々の科学ではなく、それらを統合する科学であるという点にある。未知の生命と接触するためには、生物を構成する物質の素粒子論的特性から、生物の生理学、心理学、さらには集団的特性に至るまで、トータルな把握が必要である。そのためには、広範な領域にまたがる諸科学の協力が必要とされる。そこにはビッグ・サイエンスとしての総合科学の持つ諸特徴を見ることができる。多変量・多次元の情報を高速に処理するコンピュータは、すでに単なる小道具であることを超え、今や作品の主役の座にせまる勢いである。また、専門化、分業化の高度な進行もみられる。したがって、各スペシャリスト間の情報交流が最も大きな問題となる。3作には、分化した諸科学を効率的に統合するためのシステム論が、独自に創造されている。

●ネクシャリズム・循環史観

ビーグルにおける科学の統合の試みは、ネクシャリズム（情報総合学）および、宇宙生物循環史観にみることができる。ネクシャリズムは、大量の情報に関する学習、統合、応用、伝達のためのノウハウの集大成である。これは、実際には、睡眠学習、脳波による意志統制術など、科学の道具としての性格を拡大し、実在化したものである。循環史観は、シュペングラーやトインビー流の人類の文明史観を、宇宙生物の文明にまで拡張したものである。これらの科学は、ビーグル号内の科学者を説得する方法としては効果を上げる。しかし、宇宙生物との接触に貢献したかどうかは疑わしい。というのは、ビーグル号と宇宙生物との接触は、殺戮という形をとっており、生物との接触に使われるのは、結局のところ、軍事科学＝武器であるからだ。

●生物分析方式規定

アンドロメダにおける「生物分析方式規定」は、ノーベル賞クラスの科学者たちが集まり、地球外の細菌を研究する方法をプログラミングしたものである。彼らは、地球外細菌といえども、本質的には、地上のものと同様と変わらないだろうという仮説を立て、細菌学的実験方法をプログラムした。分析は、完璧な滅菌システムを持ち、しかも核自爆装置すら備えた、大規模な地下の研究所でおこなわれる。方法は、以下の3領域に分かれる。第一は、電子顕微鏡を用いた、菌の探知である。第二は、菌の特性判定である。これには、スペクトル分光分析、アミノ酸配列分析、X線結晶解析、フーリエ電子密度解析、などが含まれる。第三は、菌の制御方法の発見である。これは、放射性同位元素ラベル法による動物の病理組織解剖、細菌学培養実験、医学鑑別診断用コンピュータを用いた人体への影響調査、などが含まれる。こうした総合研究のシステムを、彼らは、「生物分析方式規定」と命名した。

「生物分析方式規定」は、1960年代における、分子生物学の華々しい方法的進歩を要約したものに等しい。しかし、アンドロメダ菌株が飛来したとき、技術の粋を集めたこのシステムが発見したことは、菌株は地球型生命ではない、ということだけだ。すなわち、このシステムでは、菌株を解明し得ないということがわかるのみだ。菌株に対して人間のおこなったことは、何ひとつない。菌株は、人間の制御を越えて、人類を滅亡させかける。偏執的な研究システムは、徒労にすぎなかった。アンドロメダの科学は、結果的には、ネガティブ・データである。

●ソラリス学

ソラリスは、物理科学、生命科学、情報科学など、あらゆる分野の科学者が、ソラリスの海を対象としておこなった、100年にわたる仮説と実験の集積である。海について解明されたことは、海が相対性理論を積

極的に応用し、空間と時間の相関関係を直接的に再構成することによって、惑星の軌道を安定させていること、海は電気、磁気などによる数学的言語のようなもので話をしているらしいこと、海はその表面の形を様々に変え、それは何らかの高次元方程式の4次元モデルを思わせること、結局、海はそれ全体が一つの脳であって、この世に存在するものの本質について、大規模な理論的研究をおこなっているらしいことなどである。さらに、海からステーションに送り込まれた幻に関しても、それがソラリス駐在員の「心理の島」を実体化させたものであること、細胞レベルまでは人間の完璧なコピーであるにも関わらず、幻は原子から成り立っており、質量を持たないとされるニュートリノから構成されていることなどが解明される。

ソラリスに関して提出された仮説は何万という数にのぼり、アルファベット順に配列したハンドブックができあがるほどである。にもかかわらず、それらの仮説で実証されたものは一つもない。海の現象は、恒常的でなく、再現不可能であるため、すべてが仮説や推測の段階にとどまる。つまり、結局、ソラリス学もまた、ネガティブデータの集積にすぎないのだ。

ソラリス学は、レムのイマジネーションが作り上げた、一個の完璧な科学史である。ソラリス学には、架空のものであるにもかかわらず、文献を捜していけば、本当は実在するのではないかと、思わず錯覚してしまうほどのリアリティがある。そのひとつの理由は、ソラリス学がすべて書物からの引用という形式で、科学者の事実に見せかけて語られるというトリックにあるのかもしれない。後に『完全なる真空』や『序文集』では、レムはこの手法のみを用いて、大きな効果をあげている。

しかし、ソラリス学のリアルさの大半は、むしろレムの科学的知識の確かさや、科学者の想像力の豊かさからくると考えられる。ソラリス学は、科学的行為というものが、決して無味乾燥の実証主義的なものだけでなく、本来は強烈なイマジネーションの飛躍から生じた仮説に先導されているのだ、ということを思い出させてくれる。ソラリス学の雄大なスペキュレーションは、実際に科学研究にたずさわる者にとっても、刺激的、かつ有益であろう。筆者の友人の行動薬理学者広中直行は、ソラリスは脳研究者の必読文献にすべきだと主張している。

つまり、脳の研究と、ソラリス学とは、その規模や歴史や魅力などの点で、かなりのアナロジーが成り立つ。現在の脳の科学は、脳がどのように人間の意識を作り出すのかを解明しえていない。しかし、現在のレベルがそうだからといって、脳研究者で、将来に対し無力感を持つものは少ない（ただし、エックルス・スペリー現象があるが）。これと同じく、ソラリス学者もまた、将来にわたって、仮説を提出し続けることが示唆される。

ソラリス学のリアリティは、海の不可思議なリアルさと共に、作品ソラリスにおける魅力の源泉の両極をなしている。ところで、主人公ケルビン、ソラリス学の創始者ゲーゼと自分の父親とを重ねてイメージしている。すなわち、ソラリスの海は母親的イメージであるのに対し、ソラリスには父親的イメージがつきまとう。この点でも両者の関係は、相補的である。

●方法としての科学

一般に、SFにおける科学といえば、つきつめると、武器、通信、輸送といった、単なる科学の製品にすぎない場合が多い。しかも、こうしたSFは、科学技術を単に道具として利用するだけで、科学とは無関係の内容を物語ることが多い。例えば、多くのタイムマシンSFのように。

これに対し、ソラリス・ビーグル・アンドロメダに描かれた科学は製品ではない。科学は方法として小説構造の中に組み込まれ、しかもそれによって科学のあり方そのものが主題となっている。これが第三の共通点をなす。

この点を明らかにするために、レムの短編「迷路の鼠」を再び取り上げてみよう。この作品では、隕石の不可解な謎が提出されるが、最後には、老科学者が一つの解釈を提出し、それで謎は一応解かれる。ここでは、科学の製品はほとんど用いられない。科学は、謎を科学が解くという形で、小説の構造をとおして表現される。すなわち、この作品に描かれた科学は、製品ではなく、科学的認識のプロセスそのものである。しかも、日常感覚の上では不可解な現象も、科学的立場からみれば混乱なく理解できることが示され、結果的には、科学的認識が高く評価される。すなわち、この作品の主題は科学のあり方そのものである。

ビーグル号の乗組員は、ネクシャリズムおよび循環史観を用いて、宇宙怪獣がいかなる性質を持つか、いかにすれば怪獣を退治できるかの解答を得る。すなわち、ビーグルにおける科学は、認識の方法であるとともに、課題解決の方法として機能している。彼らの課題解決とは、怪獣を殺す手段のことであり、J・P・ホーガンも指摘するように、課題解決には人間の攻撃的側面が強くあらわれる。この点でも、ビーグルは、科学のプロセスを描くことによって、人間の科学のあり方そのものを浮き彫りにするといえる。

アンドロメダにおいては、科学の予測手段としての機能が強調される。「生物分析方式規定」は、将来起こり得る危機を組織立てて予測した行動プログラムである。つまり、未来の危機はすでに科学者たちのイメージの中に存在しているわけであり、現実にはやってきた危機は、そのイメージを単になぞるにすぎない。科学によって予測された危機のイメージに導かれて、主人公たちは、2200万ドルを投じ、研究所を建設する。歴史的にみても、科学は予測という機能を獲得することによって、閉じた静的な認識から、開かれたダイナミックな認識へと変化し、その善悪は別として、社会への発言権を持ち得た。

「科学」とは多義語である。科学は、一般には科学技術やその製品として、日常生活や政治に入り込んでいる。しかし、科学とは、本来科学的方法を意味する。第一に、科学とは、現実の対象を組織的に観察するための認識方法である。第二に、科学とはその認識に基づいた予測の方法である。第三に、科学とはその予測に基づいた課題解決の方法である。「迷路の鼠」、アンドロメダ、ビーグルでは、科学の3つの機能が、そ

れぞれ小説構造の中に組み込まれている。そしてこの過程から、科学のあり方そのものが浮き彫りにされている。

●認識論としての科学

作品ソラリスにおいては、科学はいかに機能しているだろうか？

ソラリスでも、科学はまず、認識・予測・課題解決の方法として機能することが期待されている。海は、果して高度の知性体であるか？ 海からやってきた幻には、どんな意図があり、いかにして接触は可能であるか？ こうした謎は科学によって解決されることが期待される。期待通り、ソラリス学は、謎の大半を解明するかにみえる。

しかし、後半にきて、科学の果たす機能は大きく変化する。ソラリス学は、ネガティブデータの墓場であり、海の謎を遂に解明することができない。幻を送り込んだ海の意図は全く不可解であり、幻との接触は、ソラリス駐在員を苦悩に陥れる。海の謎の中心は未知のまま、いわば不在として残る。「その結果、ソラリス学は複雑きわまりない無数の袋小路を持つ迷路に完全にはまりこんだ状態になってしまった（飯田規和訳）」

人類は、ソラリスの賭けに破れる。ソラリス学者のうち、何人かはソラリス学を捨て、そして何人かは絶望のあまり自殺を遂げた。ソラリスはいわば認識論的な破滅SFである。科学の敗北は、何より科学者の自己同一性の危機である。多くのSFでは、科学者は認識の極限において、狂気を体験する。リンファーテル博士や、ジアゴラス教授など、マッド・サイエンティストは、その好例である。また、ホイル『暗黒星雲』、バラード『時の声』、『沈んだ世界』、ウィルヘルム『クルーイストン実験』、キイス『アルジャーノンに花束を』。このように、科学者を主人公とするSFには、狂気がつきものである。科学とは、本来、過激なエネルギーを潜ませた危険なものである。

ソラリス後半における科学の機能は、前述の3作のいずれとも異なる。「迷路の鼠」における科学者は、いわばアームチェア上で謎を解き明かすシャーロック・ホームズ役であった。前半のソラリス学もまた、成功を約束された万能の謎解き役である。これに対し、後半のソラリス学は、自らの無能をさらけ出す。パズル・ストーリーとしてのソラリス学は、完全に破綻している。

また、ビーグルにおける科学は、怪獣を情け容赦なく殺すタフなハードボイルド型の探偵であった。これに対し、後半のソラリス学は、課題解決に失敗する挫折者である。

アンドロメダにおいても、予測は失敗し、科学は敗北した。しかし、敗北の原因は、科学内部の言葉によって解明される。アンドロメダの科学は、あくまで科学の内部で決着をつける。これに対し、ソラリスの敗北の原因は、科学認識の限界を越えたところにある。つまり、ソラリスの科学は、科学の土俵を越え、科学を外部の視点から客観化する。その意味では、ソラリスは、科学を裏切るとすら言うてよい。

ソラリスは、認識、予測、課題解決といった科学の諸機能を含みつつも、それらを自ら解体し、それによって科学を相対化する。この相対化によって、内部のみならず、外部の視点も導入され、科学のあり方は総体的に明らかにされる。

こうして、ソラリスの科学は、前述の3作には見られない、第四の機能を持つことになる。すなわち、認識論的思考の手段としての科学である。科学は、現実の対象を認識することを通して、われわれが知るとはどういうことかを考えていく認識論の一手段でもある。ソラリスにおける科学は、製品としての科学や、方法としての科学を含みつつも、それらを越え、むしろ認識論上の手段として持ちいられている。科学とは何か？ 人間が科学によって知り得ることとは何か？ そもそも人間が知るとはどういうことなのか？ レムはこうした認識論上の根本のテーマをソラリスに仕掛けた。

●仕掛けとしてのソラリス学

ソラリス学は、内容もさることながら、小説の構造の点からみても、卓抜な仕掛け（トリック）である。前回述べたように、ハリー・幻の一人3役の仕掛けによって、ケルビンのドラマは人間の存在の不安定さをあばきだす装置となった。これと同時に、ソラリス学という仕掛けによって、ケルビンのドラマは科学の限界をあばきだす装置となり得た。仕掛け（トリック）としてのソラリス学は、以下の2つの意義を持つ。

第一にソラリス学は、作品ソラリスの認識論的設定と、存在論的設定とを背後で結び付ける。

前回述べたように、人間の存在様式そのもののために、ハリー・幻との接触は、主人公ケルビンにとって拷問となる。さらに、ソラリス学の敗北によって、ハリー・幻はケルビンを経験論的懐疑の絶望に陥れる。2つの正反対の地獄が、ケルビンにおいて交差することになる。前者を存在論的地獄と呼ぶならば、後者は認識論的地獄と呼ぶことができよう。また、前者が地上的な地獄ならば、宇宙空間に出現した後者は、正に宇宙的な地獄であるといえよう。

この存在論的なテーマと、認識論的テーマとは、本来全く必然的関連を持たない、独立した設定である。例えば、短編「迷路の鼠」がそうであるように、ソラリス学の認識論的設定は、たとえ、ハリー・幻の仕掛けをすべて抜き去ったとしても大きな変化はなかったであろう。また逆に、タルコフスキーの映画『惑星ソラリス』がそうであるように、たとえソラリスからソラリス学をすべて抜き去ったとしても、ハリー・幻の仕掛けはそれだけで独立した作品となりえたであろう。作品ソラリスの成功の最大要因は、認識論的テーマを存在論的テーマがぴったり裏打ちするような錬金術的設定をレムが作り上げた点にある。そしてこの両者の結び付きは、ソラリス学という仕掛けによって一部達成されている。というのは、ソラリス学は、ハリー・幻の出現を早くから予言しているからである。海が周囲の物体を模倣するという動きは、海の基本的運動

であり、ソラリス学文献では、すでに自明のことになっている。また、海が人間の潜在意識を投影する人物を実在化させたという事実も、ソラリス学の文献「小アポクリフォス」の中にすでに記述されている。したがって、ハリー・幻の特徴である模倣、投影、接触という3要素のうち、前二者は、ソラリス学の中に記述されていることになる。ハリー・幻の出現はソラリス学者にとって、すでに何ら新規なエピソードではない。したがって、ケルビンの存在論的ドラマの起源は、ソラリス学の中に含まれており、本来独立した科学的設定を、その起源において裏打ちするといえる。

●ソラリスティックな瞬間

第二に、仕掛け（トリック）としてのソラリス学は、科学者ケルビンの接触失敗のエピソードを、人間の認識の限界にまで普遍化する機能を持つ。

もし、ソラリス学の記述がなかったならば、ケルビンが陥った2つの地獄も、単に宇宙空間でたまたまおこった風変りな個人的エピソードにすぎなかったであろう。また、例えば、ケルビン以外の人物だったならば、ハリー・幻との地獄を克服し、ソラリスの謎を解いたかもしれない。ケルビンの事件が再現不可能である以上、そうした推測も成り立つ。

しかしソラリス学の記述があることによって、ケルビンのケースは、単なるエピソードではなく、再現性を持ってくりかえされてきた一般的事実のサンプルであることが明らかにされる。ケルビンの背後には、百年にわたるソラリス学者の献身的な活動がある。ケルビンは、幾世代にもわたるソラリス学者の中から、ランダムサンプリングされた主人公にすぎない。したがって、ケルビンの苦悩は、彼個人のものというよりは、ソラリス学者全員が体験した大いなる苦悩を代表していることになる。ケルビンの苦悩は、ソラリス学者一般にまで普遍化される。

しかも、ソラリス学者とは、人類の中でも、選りすぐりの天才級科学者である。彼らが百年間挑み続けて敗北した謎とは、ソラリス学者の能力の限界だけを示すものではなかろう。さらに、ソラリスの謎は、認識論哲学者、行政担当者、ジャーナリストを巻き込み、世界中にセンセーショナルを引き起こした。すなわち、「ここで問題になっているのはわれわれ自身のことであり、人間の認識に限界があるかどうかの問題なのだ。

（飯田規和訳）」

ソラリス学という仕掛け（トリック）によって、ケルビンの苦悩は、個人レベルから人類レベルへ、主義としての不可知論から、事実としての不可知論へと普遍化される。この普遍化作用によって、作品ソラリスは、ケルビン個人のドラマを描きつつも、その裏では、人類の知的認識の限界を問うという壮大な試みとなり得た。

ここに来て、ソラリスの隠れた真の主人公が暴露されることになる。ソラリスの主人公は、海や、ケルビンや、もはや科学ですらない。実は人類こそ、読者自身も含まれるところの人類こそ、真の主人公なのだ。レムの作品を読むと、人間の意識がいかに自明なものでないか、いかに偶然や無限と接しているかを感じる瞬間を幾度か経験する。この瞬間をこそ、ソラリスティックと呼ぼう。そして、足元にぽっかり開いた深淵、ソラリスティックな瞬間は、まさに読者自身のものである。ソラリスは、遠く宇宙の辺境の惑星で、遠い未来に、見知らぬ他人が演じる一小事件どころではない。ソラリスは、今、このわれわれ読者自身の内宇宙で起こりつつある体験である。ここに、日常生活の中に住むわれわれ読者を引きずり込む、ソラリスの衝撃の秘密がある。

●接触の2つのパラダイム

レムは、宇宙生命との接触のテーマを、2つのパラダイムで描いている。

第一が、このソラリスのパラダイムである。科学者集団が、ロケットである惑星を訪れ、そこに住む生物と接触をはかる形式である。『砂漠の惑星』で、レギス第Ⅲ惑星を訪れた無敵号は、進化したサイバネティクス機械から攻撃を受け、やっとのことで逃げ出す。惑星『エデン』にやってきた6人の科学者は、コンピュータを媒介として、エデン星の住民との言語的接触に成功する。しかし、彼らはそれ以上の接触を拒み、エデンを去る。

第二は、『天の声』のパラダイムであり、宇宙から届く電波メッセージを、地上の科学者が解読しようとする形式である。『天の声』のMAVO計画に参加する科学者たちの努力にもかかわらず、メッセージはついに解読し得ない。一方、初期の作品『金星応答なし』において、金星から地球に届いたメッセージは、地球の言語学者によって、ごく簡単に解読されてしまう。

これら2つのパラダイムは、一方が宇宙空間に出向いた科学者を描くのに対し、他方が地上の科学者を描くという点で方向は逆である。しかし、いずれも科学者を主人公とし、宇宙生物と接触をはかるという点では一致する。さらに、接触にあたって、科学が媒介となる点でも共通している。

●科学的認識の起源

ではなぜ、レムは宇宙生命との科学的接触を描くことにこだわるのであろうか？

例えば、文化人類学や、カルチャーショックの研究にみられるように、一つの文明は、他の文明との接触によって、初めて比較・相対化の視点を具体的に得る。この意味では、宇宙生命との接触も、人類文明の相対化を宇宙規模で行うことを目的とすると考えることができる。

しかし、規模が宇宙まで拡大すると、文明接触は、これ以外にも、独自の意義を持ちうる。すなわち、宇宙文明との接触には、科学的認識の出現が必然か偶然かを解く鍵がある。

科学の出現は人類に必然的であったのか？ これまで圧倒的に進歩してきた自然科学は、自らの起源を必然的なものと考えがちである。「思想は人間によって考えられるより先に存在した（飯田真・中井久夫『天才の精神病理』）」のではないのか？ もしそうなら、人類は最初からアインシュタインの理論を知っていたことになろうし、われわれも将来見出しされる法則のすべてを無意識に知っているということになるのではないだろうか？ 科学こそ宇宙にあまねく妥当する認識方法ではないのか？

これに対し、人文科学や社会科学では、自分の認識が、自分の個性や時代や階級によって厳しい制約を受けているという反省がつねになされる。こうした反省は、現代自然科学にも向けられるようになってきた。自然科学といっても、他の認識法とは別格ではありえず、種々ある学問パラダイム、すなわちゲームの規則の一つにすぎないのではないのか？

こうした疑問を解く方法の一つは、地球以外にも文明が育つか、その文明が果して数学や自然科学を持つか、さらにその内容が地球のものと一致するかを調べることであろう。もし一致すれば、人類の科学は宇宙普遍のものであることが確かめられよう。

しかし、これまでのところ、宇宙文明との交信（CETI）が実を結んだことはない。将来にわたっても成功する確率は低いであろう。

したがって、現実には不可能である以上、SFこそが、科学の特権的地位の野望を賭けた文明接触をシミュレートする使命を持つのである。科学を媒介とする接触の物語は、クレメントのメスクリン・シリーズ、ホイール『暗黒星雲』、ホーガンのガニメアン・シリーズ、フォワード『竜の卵』など、現代ハードSFの主要なテーマになりつつある。しかしながら、こうしたSFの認識論的使命を意識したSFは少ない。

レムの描く接触SFの焦点は、接触そのものよりも、むしろ媒介とされる科学に向けられている。レムの2つのパラダイムには、その根底に、人類の科学的認識の普遍妥当性を試すという問題意識がつねに流れている。ソラリスに関しては前述のとおりである。また、『天の声』においても、MAVO計画は、「地球文化の宇宙的普遍性が試されている実験（深見弾訳）」なのである。レムはSFではおなじみの、接触という設定を用い、科学の妥当性について思考実験する。SFにおける認識論的方法の大きな可能性をレムは切り開いたといえよう。

●カタストロフ構造

レムは、作品を作るに当たり、一つのモデルケースを取り上げ、ごく具体的に徹底的にシミュレートする。レム自身も言うように、このシミュレーションは、思弁を展開するというよりは、実験に近い。レムの一つ一つの作品は、その実験結果のレポートである。ソラリスや『天の声』はその好例であるといえよう。また、「捜査」の中で繰り広げられた統計学的不可知論は、具体的ケースから外れて、やや思弁的になりすぎた。この欠点を意識してか、10年後、レムは『枯草熱』という極めて具体的で緻密なシミュレーションに仕立て直した。ところで、ソラリスや『天の声』では、対象が主として、宇宙や生物に関する科学であるが、『枯草熱』の対象は、人間の内宇宙、すなわち脳と狂気に関する科学である。しかし、対象は正反対であれ、これらの作品の内部構造は一致している。

レムのSFに共通する基本構造は、あるテーマに関して考えつく限りの科学的仮説を列挙し、そのうえですべての仮説に対して、反証を挙げ、棄却することにある。そこにカタストロフ構造が形成される。それまで一段積み上げられてきた仮説のリアリティが高ければ高いほど、それらが棄却されたときのかたストロフは、落差が大きい。ソラリス学や、MAVO計画のすべての仮説は、妥当性が疑われたままである。『枯草熱』においても、主人公がなぜ狂気に陥ったかというメカニズムは解明されたものの、なぜそうしたメカニズムができたのかという根本の謎は解けない。

このカタストロフには、破滅SFと同質の喪失感がつきまとう。レムは、まずSFにおける謎解きの機能を利用して、科学という秩序を構築し、その後で破滅SFにおける破壊機能を利用して、自らの秩序を解体する。カタストロフ構造によって、人類の認識の限界はいやおうなく明らかにされる。人間の認識の限界を描くためには、限界があることを強調するよりも、むしろ人間の認識の全振幅を描き尽くすことのほうがより有効だ。

ところで、科学の限界を描くことは、決して科学を否定することや、科学の無力を主張することではない。むしろ逆に、科学は、こうした限界に突き当たることによって鍛えられ、その限界を突破するイマジネーションを得るといえよう。ソラリス学や、『天の声』や『枯草熱』では、人類は挫折後においても、自然の神秘に対する仮説⇔実験のループをやめないことが示唆されている。「私は、驚くべき奇跡の時代はまだ永遠に過去のものになってしまったわけではない、ということ固く信じていた。（飯田規和訳）」

科学的認識論者のカール・ポパーによれば、科学には「究極的言明は有り得ない」し、「原理上論破することのできない言明は一つもないのである（『科学的発見の論理』大内義一・森博訳）。いわば、科学的仮説とは、自らの限界をつねに自覚し、開かれているところに特徴がある。むしろ、科学には限界がないとする考え方こそ、非科学的な発想といえる。

レムの意図は、科学の否定ではなく、むしろ、われわれを新たな科学的認識へと誘い込む強烈なイマジネーションを描くことにある。それは、ソラリスの海そのものの人格的魔力や、『天の声』の乱数のイメージや、『枯草熱』の狂気のシステムのイメージなどである。これらは、カタストロフの壮快さと不安の後で、初めて出現し得る認識論的イメージである。したがって、レムはこのイメージを描くためにカタストロフを描くのであって、カタストロフそのものを描きたかったのではないと考えられる。カタストロフはあくまで人工的な仕掛け（トリック）にすぎない。現在の知の向こう側にあるもの、現在の知の閉塞を壊すもの、そ

れがなければ人類が決して科学的活動などを行わないもの。ソラリスティックな瞬間とは、人類を不断の認識へと駆り立てる、不安でもあり快感でもある神秘的瞬間のことである。

4. 討議 スタニスワフ・レムの世界

科学と神 あるいはレムの仕掛けた罠について

笠井潔・巽孝之・丹野義彦

「SFの本」第5号、1984年.

レムをどう読むか

編集部 今日最もよくSFを理解し、優れたSF作品を執筆し、なおSFを超えて行こうとする作家としてスタニスワフ・レムはとらえられると思います。ここでは作品を手がかりにしてレムの軌跡の一端を解明してみたいと思います。

笠井潔氏はわが国のSF批評史に画期を成す批評書『機械じかけの夢』を著わされ、実に刺激的なSF論を展開されています。ただ、レムについての言及は少なく、当然次段階の重要な主題となると思われるのですが、今日はその構想も含めてお話しをうかがいたいと思います。

丹野義彦は、本誌で「ソラリス」を中心に、わが国ではほとんど初めての本格的なレム論を展開されています。

巽孝之氏は、昨年の「SFセミナー」でレムを主題に論じられ、ポストモダニズム的にレムを〈読む〉という、今までのレムの読解とは全く異なる地点でのレム批評の試みを提示されました。

レムはSFに限らず文明論、哲学、現代文学……と多方面にわたって今日なお精力的に活動を持續しており、その全貌を捉えるのは非常に困難な作家です。ここでは、現代SFにとってレムはいかなる意味を持つのか、レムの作品をどう受けとめればよいのか、というテーマで皆さんに語っていただきたいと思います。

丹野

レムに対する基本的考え方は、次のようにまとめることができます。

レムの問題意識は

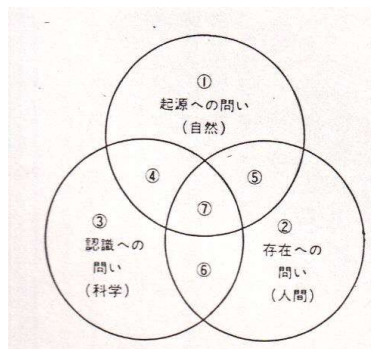
①起源（オリジン）への問い（世界はなぜかくあらねばならないかという問題）

②存在への問い（人間存在がどういうものであるかということ）

③認識への問い（認識に限界があるのかというような問題）

の3つに分けることができます。（下図参照）

図 レムの3つの基本的問題意識とその重なり
—それぞれの領域の代表的作品—



- ①起源 「泰平ヨンの航星日記 第18回の旅」「新しい宇宙創造説」
- ②存在 「浴槽で発見された手記」「星からの帰還」
- ③認識 科学哲学論集
- ④起源+認識 「天の声」
- ⑤起源+存在 「泰平ヨンの回想記 第1話」「友人」「手記」
などのサイバネティクス・パラダイム
- ⑥存在+認識 「枯草熱」「捜査」
- ⑦起源+存在+認識 「ソラリスの陽のもとに」

3つの問いを作品と対応させると、「起源への問い」は『泰平ヨンの航星日記』中の第十八回の旅があります。これはビッグ・バンに向けて素粒子を撃ちだすという、この世界の起源をとらえた作品です。

「存在への問い」を純粋な形で表わしたものとして、『浴槽で発見された手記』、『星からの帰還』があります。

それから「認識への問い」を純粋にとりあげた作品というのは、今のところ小説ではないようです。レム

は科学哲学論文を多く執筆しており、そちらが該当するのではないかと思います。

次に、3つの問いが2つずつ重なった領域を考えてみますと、「起源」と「認識」の重なった作品として『天の声』があります。

「存在」と「起源」の重なった作品として、僕がサイバネティックスのパラダイムと呼んでいる作品群、「宇宙創世記ロボットの旅」に代表されるような短篇群があります。

また、「存在」と「認識」が重なった作品が『枯草熱』であると考えられます。

この3つの問いがすべて重なりあう部分が『ソラリス』にあたるわけです。

3つの問いについては前号までのソラリス論で詳しく述べたし、いずれ、この各領域ごとにレム論をまとめていこうという展望を持っています。たとえば、今はサイバネティックスパラダイムについて書いているところです。

<以下 省略>



笠井 潔



荒井 幸之



丹野 義彦

5. スタニスワフ・レム論

サイバネティクス・パラダイム あるいは不可知性のシミュレータ 「SFの本」第7号、1985年

丹野義彦

レムのサイバネティクス・パラダイムの中核を占める重要な作品は、『鉄の箱』、『手記』、『砂漠の惑星』の3作品である。まず、レムのサイバネティクス・パラダイムの意義を、ステーブルドンのパラダイムおよびコンピュータSFと比較した。そのうえで、レムの認識論的・存在論的なシミュレーション方法がいかに独自で卓抜したものであるかを指摘した。

〈目次〉

第1部 序論

1. ステーブルドンを超えて
2. シリウス・パラダイム
3. オッド・ジョン・パラダイム
4. 機械と神の間に
5. レムワールドのサイバネティクスたち

第2部 本論

6. シリウスから鉄の箱パラダイムへ
7. オッド・ジョンから手記パラダイムへ
8. パラダイムとしての人間を超えて

1. ステーブルドンを超えて

核兵器・量子力学・ユダヤ人科学者の亡命という、今世紀前半の科学の焦点にいた科学者—フォン・ノイマンによって生み出されたコンピュータは、今や最も生産的な科学技術となったばかりでなく、認識論上の基本装置として、今世紀後半の科学の焦点となりつつある。SFにおいても、多くのコンピュータSFが登場し、その中でコンピュータはすでに単なる客体(小道具)ではなく、今やストーリーを展開する主体(主人公)となりつつある。しかし作品構造の点からみると、多くのコンピュータSFは、オラフ・ステーブルドンが第二次世界大戦前に書いた『シリウス』および『オッド・ジョン』のパラダイムに吸収されてしまうように思われる。

一方、スタニスワフ・レムはサイバネティクス・テーマと呼ばれるいくつかの独創的なコンピュータSFを書いている。レムのこれらの作品群は、シリウスおよびオッド・ジョンを越えるパラダイムを提出した点で、SF史上に大きな意義を占めると考えられる。

本論の目的はレムがいかにしてステーブルドンのパラダイムを超えようとしたかを解明することにある。以下では、まずステーブルドンのふたつのパラダイムとコンピュータSFの関係について述べ、この過程から、レムのサイバネティクス・パラダイムがSF史上に占める意義について述べてみたい。

2. シリウス・パラダイム

『シリウス』(1944年)はイギリスのある生物学者によって脳の容量を大きくされ、人間と同じ知能を持った犬、シリウスの生き様を描いた物語である。シリウスは人間と同じ教育を受け、人間の言葉をしゃべることができるようになる。成長したシリウスは愛、社会、宗教、精神、人間性などについて深く悩み、宗教的啓示を受け、著作を計画するまでに至る。シリウスは、犬としての野性と、人間としての理性との境界に位置し、両者を往復する。しかし、彼の中の犬としての暴力的野性が勝り、第二次世界大戦の社会不安の中で、人々から悪魔の犬という風評を立てられ、最後にはライフルで射殺されてしまう。

作品『シリウス』は動物という人間以下の存在を描写し、それによって逆に人間の存在を下から照射する作品である。『シリウス』は、犬を描くことによって、逆に人間しか持ち得ない感覚、知性、情緒、社会性など、広範な人間存在の自明性を浮き彫りにする。

①シリウスは犬独自の世界を持つ。例えば嗅覚や聴覚の世界、動物としての野生の世界。この描写によって、相対的に人間の感覚の限界や特徴が浮き彫りにされ、人間の世界が異化される。

②シリウスは教育によって人間と同じレベルに昇りつめる。彼が教育によって得たものは、視覚や発声器官や手の使用、言語の使用、性や排泄に対するタブー、教育の動機づけとしての社会性などである。しかし犬であるシリウスにはこれらの要素の獲得は不完全でしかない。この過程から人間の教育のための肉体的・精神的前提があきらかになる。

③犬には、人間として正常に育つための共通感覚、すなわち自明性が備わっていない。したがって、知的にはいくら人間同様の教育を受けても、決して完全な人間にはなれない。シリウスは性や社会性を完全に獲得できず、人間社会の中では異形の者であり、孤立を強いられる。この過程から人間の自明性が明らかにされる。

④シリウスは孤立し、人間社会の圧力によって、あるいはみずからの野性によって人間と対立し、滅びる。この過程で明らかになるものは、人間の臭いによる醜い裏の心理、自分たちにとって理解しにくいものを悪魔として迫害する傾向などである。犬の視点から社会の風刺、文明批判がなされる。

以上4つの構成要素は、本来なんら必然的関連を持たない。というのは、これらの要素を個々ばらばらに見ると、他にいくらでも例を見つけ出すことができ、その起源を探ることができるからだ。例えば①は野生動物の小説、②は飼育動物の小説(チンパンジーの言語教育の実験記録)、③は野生児の小説、④は『ガリヴァー旅行記』などの社会的風刺小説などをあげれば十分であろう。しかしこれらの小説要素はそれぞれ人間の存在のごく一部ずつを描くのみである。

さらに、人間以下の存在との比較から人間を照射する試みは、今世紀の人文科学の基本的な手法である。ローレンツに代表される動物行動学、幼児との比較によって大人の思考を解明するピアジェの発生的認識論、未開社会との比較によって現代文明の構造を探る文化人類学、さらには異常行動から正常な行動を捉えていく異常心理学のように。しかしこれらの人文科学もまた人間存在の一部ずつを描くのみである。

したがって、こうした分化した領域ではどうしても人間存在の描写が一面的となる。人間の存在を総体的に描くためには、これらの領域を統合した枠組み、すなわちパラダイムが必要となろう。その場合は、必然的にリアリズムや人文科学的手法を超え、SFという形式をとる必要が生じてくる。だから『シリウス』は、ステープルドンによる要素的リアリズムを統合し超えようとする試みであると言える。また『シリウス』は人文科学的手法をSFの中に持ち込んだ作品であると同時に、人文諸科学の統合のSF的試みであるといえる。ここに文学および人文科学に対するSFの持つ意義のひとつを見てとることができる。

そこで、われわれはこの試みを**シリウス・パラダイム**と呼ぶことにしたい。シリウス・パラダイムには他にチャベック『山椒魚戦争』、キイス『アルジャーノンに花束を』などが属する。上述の分析に基づき、このパラダイムに属する要件として以下の4項目をあげておこう。

①主人公は最初、人間以下の存在である。

②主人公は知的教育を受け、人間と同じ知的レベルに昇りつめる。

③主人公は知的には人間と等価となるが、それ以外の点についてはついに人間となり得ず、知能と情緒とのギャップに深く苦悩する。

④主人公はそうした苦悩の中で人間と対立し、自滅するか、あるいは人間を滅ぼす(『山椒魚戦争』では滅びるのは人間の方だ)。

ところで、シリウス・パラダイムにはシリウスがあまりに人間くさいところにSFとして若干の不満が残る。天才の犬を描くことは一見飛躍したSF的想像力が必要であるかに見える。しかしシリウスが天才であるように見えるのはステープルドンが仕掛けたトリックである。犬から人間への上昇過程が、あたかもシリウスが人間を超える天才になったかのような平行的錯覚を生み出す。このトリックはシリウス・パラダイムの他の作品でも用いられている。ところが、人間以下の存在が人間に達する過程にはごく身近なモデルがある。すなわち赤ん坊が大人へと発達する過程である。いくら犬の感覚で描かれようとも、シリウスのドラマの基本は実は赤ん坊の発達(個体発生)を犬の進化(系統発生)に置き換えたアナロジーにすぎない。またシリウスがその教育過程でつまずく問題、例えば愛、社会性、宗教性、精神性といった問題は多かれ少なかれ、普通の人間ならば一度は通過する発達課題である(E・エリクソン『自我同一性ドーアイデンティティとライフサイクル』を参照)。これらはまさに人間の課題であって、犬独自の課題とはいえない。

したがって、シリウス以後のシリウス・パラダイムに要求されるのは、詳細な犬の文明そのもの、人間をモデルとしない犬の感覚世界そのものの描写であろう。少なくとも、現在、われわれ読者が期待するものは、人間とは全く別の発達様式を描き出す作家の想像力である。

3. オッド・ジョン・パラダイム

『オッド・ジョン』(1936年)は、突然変異で生まれた超人類ジョンの生き様を描いた物語である。ジョンは4歳になると1週間ですべての言葉を覚えてしまい、7歳にして発明の才によって大金をもうけたりする。彼が7歳の時、地球の人類の将来を予測し、みずから新人類の仲間を集め、彼らの社会を作るが、それを知った人類に攻撃され自滅する。

作品『オッド・ジョン』は超人という人間以上の存在を描写し、それによって、逆に人間の存在を上から照射する作品である。この点、シリウスとはベクトルの方向が逆である。『オッド・ジョン』は、超人を描くことによって、人間にはできないことを明らかにし、その結果、逆に感覚、知性、倫理、進化など広範な人間存在の独自性を浮き彫りにする。

①ジョンは飛び抜けた高知能、未来を予知する能力、テレパシーなど、人間にはない能力を持ち、超人独自の世界を開く。これによって相対的に人間の能力や感覚の限界が明らかになり、人間の世界が異化される。

②ジョンは天才によって人生の初期には成功するものの、人間の情緒的自明性を持ち得ないために、結局は不適応を起こし社会で孤立する。その後、シリウスは野生へと降下したのに対し、ジョンは新人類の仲間たちと集団を組み、孤独を癒す。この過程から明らかになるのもやはり人間の社会生活上の自明性である。

③ジョンたちは社会から孤立し、人間からの圧力によって、あるいは超人としての使命によって、人間と対立し、殺人を犯す。そして「新人類が生き延びるためには、古い人類を殺してもかまわないか？」という父親殺しの倫理的問題に突き当たる。「超人ならすべてが許されるか」という問いは、ドストエフスキイの『罪と罰』における「人間はすべてを許されるか」という問いと裏表の関係にある。したがって、ジョンの問いは結局人間の倫理の問題である。

④集団化したジョンたちは、新人類として人類の後を継ごうとする。しかしそれを知った人類から攻撃を受け、滅びる。新人類というスペキュレーションは、「人間こそ生物として最高の進化形態であり、人間以上の進化は在り得ない」という人間の根強い奢りに対して反証をあげるものであり、人間の思考の自明性を相対化する。

シリウス同様、ここにあげた4つの構成要素は、本来なんら必然的関連を持たず、個々の要素は、いくらでも他の領域に例を見つけたことができる。例えば小説なら、①は神秘主義的小説、②は天才や狂人の小説・自伝、③はドストエフスキイ『罪と罰』、④は進化論の小説などがあげられる。

また、上からの人間規定のやり方は、神学、倫理学、価値の哲学など、古くから、人文科学の基本的な手法であったといえる。「humanista（人間性）」という言葉は二つのはっきり区別される意味を持っている。第1に人間と人間以下のものとの対比から生じ、第2は人間と人間以上のものとの対比から生じる。第1の場合は人間性は価値を意味し、第2の場合は限界を意味する。」(E・パノフスキー『視覚芸術の意味』中森他訳)。

しかし、それぞれの領域における方法は人間の一部を描写するにすぎず、ここでも要素を統合するためのパラダイムが作られる必要があった。したがって、『オッド・ジョン』もまたステープルドンによる、リアリズムの再構成と乗り超えの試みであり、同時に人文諸科学の統合のSF的試みであると言い得る。

そこでわれわれはこれを**オッド・ジョン・パラダイム**として確定しておくことにしよう。

『オッド・ジョン』はその後、無数の縮小的ヴァリエーションを生み、パラダイムは消費された。スタージョン『人間以上』、ヴォークト『スラン』、シラス『アトムの子ら』、ウィンダム『さなぎ』、クラーク『幼年期の終り』、小松左京『継ぐのは誰か?』など、これまでの**新人類テーマ**と呼ばれて来た多くの作品がこのパラダイムに属する。これらの作品の原型はほぼ『オッド・ジョン』に見いだすことができる。このパラダイムの要件として以下の4項目が抽出される。

- ①主人公は人間以上の存在である。
- ②主人公は天才と情緒とのギャップに深く苦悩し、孤立し、同じ能力を持つ者と集団を組む。
- ③主人公は人類と対決し、父親殺しの倫理的苦悩を持つ。
- ④主人公は、人類の後を継ぐ新人類となるか、あるいは人類によって滅ぼされる。

ついでに言えば、オッド・ジョン・パラダイムと裏表の関係にあるのが、いわゆるディストピア小説である。ザミャーチン『われら』、オーウェル『一九八四年』、ハクスレー『すばらしき新世界』、ヴォネガット Jr.『プレイヤー・ピアノ』などである。

ここでは最初の作品名をとり、「**われらパラダイム**」と呼んでおこう。このパラダイムの要件は、

- ①生きる意欲が衰弱し、個性のない人間の社会集団が設定される。その影にそうした集団を作り上げた超権力者が存在する。
- ②主人公は、その社会の平凡人であるが、突如目覚め、社会に疑問を持つ。
- ③主人公は、その疑問と社会の自明性との間のギャップに深く苦悩し、同じ疑問を持つ者と集団を組む。
- ④主人公は、超権力者の意図に触れ、抹殺されるか、再びもとの平凡人に戻る。

オッド・ジョン・パラダイムとわれらパラダイムは、ニーチェの超人あるいはドストエフスキイの「大審問官」の思想をちょうど裏表の形であらわしたものである。オッド・ジョンが人間の自明性の中から突出する超人を主人公とするのに対して、『われら』では生きる意志が衰弱した社会すなわち人間以下の社会から突出する負の超人(＝平凡人)を主人公とする。オッド・ジョンはみずからの超人性のために凡人の自明性からはじき出されるが、『われら』の主人公はみずからの凡人性のために衰弱したにせの自明性からはじきだされる。したがって、どちらも社会の中で破滅する人間を描く点では一致する。

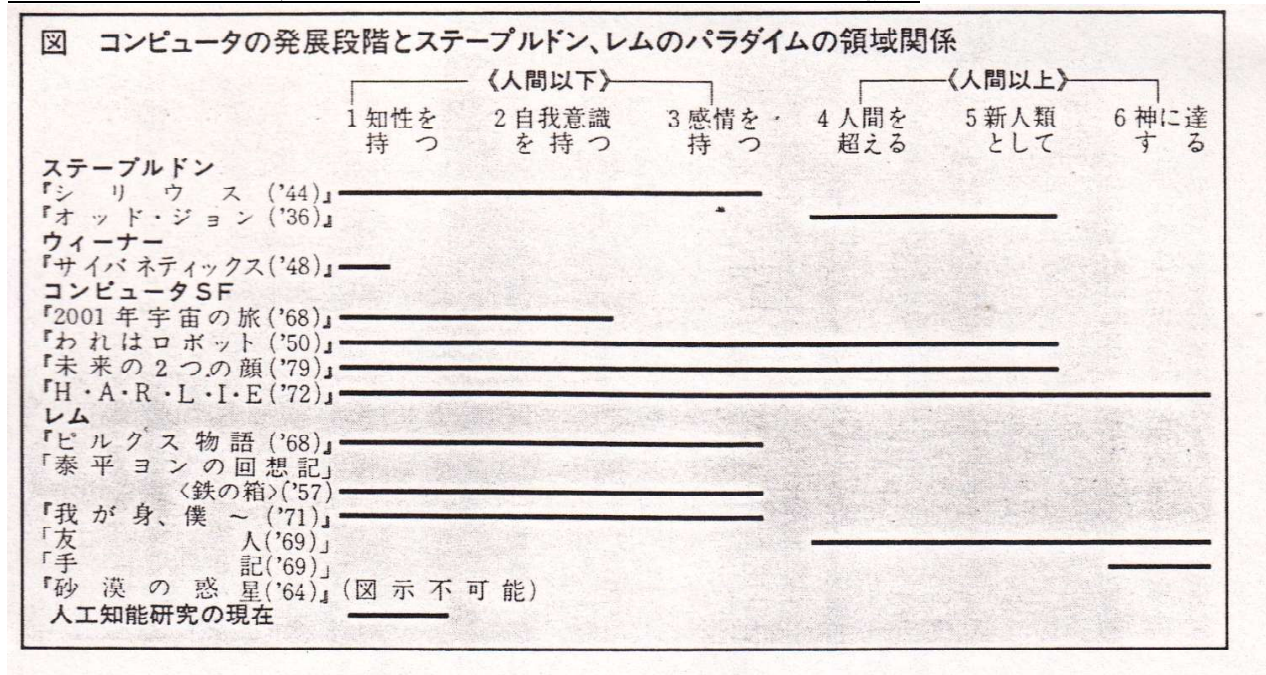
ところで、オッド・ジョン・パラダイムには、主人公の内面がブラックボックスとして何も描かれないうところに不満が残る。原理的に言って、われわれ人間が人間以上の存在について知ることは不可能である。もし知ることができたならば、それはすでに人間以上ではありえないことになるからだ。人間以上の世界はもはや言葉では翻訳不可能であろうし、おそらく他人に伝える意志すら失ってしまうのであろう。これは例えば、悟りを開いた高僧たちが、ある時点まではわれわれに理解可能な言葉を残すのに対し、悟りの瞬間以後、突然、不可解な沈黙しか残さなくなるのと同じである(目崎徳衛『出家遁世』)。彼らは人間以上となり、人間の言語領域の外に出てしまうのである。そしてオッド・ジョン・パラダイムに描かれた新人類たちに関しても、彼らの内面はほとんど立ち入って描かれることはなく、せいぜいもっともらしい暗示がなされるだけである。われわれ読者が期待するものは、超人の内面意識そのもの、人間ではない超人の直接話法で語られた表現であろう。もちろん、人間を超えるブラックボックスの内部を描くためには、作家自身が人間を超える想像力を持つことが要求される。したがって、オッド・ジョン以後のオッド・ジョン・パラダイムに期待されるものは、まさに作家自身の超人的想像力であるということになる。

4. 機械と神の間に

コンピュータはもともと単なる計算機、すなわち「機械」であったが、SFにおいては、すでに人間を超

え、神の域に達するコンピュータまで出現し、そのイメージはかなり広がっている。そこでコンピュータの発展段階を、図に示すように、機械から人間を経て神に至るいくつかの段階に分けて考えてみたい。

図 コンピュータの発展段階とステーブルドン、レムのパラダイムの領域



(なお、現実のハードウェアの展覧からみたコンピュータSFについては、金子隆一「SF史における人工知能の概念の変遷」ハードSF研究所公報6号、1983年を参照)

第1は、知能をもつ機械としての段階である。ウィーナーが『サイバネティクス』の中で、動物と機械を制御と通信という視点から統一的に捉えようと試みて以来、コンピュータは単なる機械ではなくなり、認識する主体として人間に一步近づいた。SFにおける機械としてのコンピュータは実例をあげるのにいとまがないが、ホーガン『創世記機械』のBIAC、『未来からのホットライン』のPOP120/30、石原藤夫『コンピュータが死んだ日』のQIQデータバンクのコンピュータなどが本格的である。

現実の人工知能研究は、人間の認識をコンピュータによってシミュレートする認知科学や、コンピュータとの比較という枠組みによって人間の認識の独自性を浮き彫りにする認知心理学を生み出した。しかし、現実のコンピュータ科学はまだ知能をもつ機械以上のコンピュータを作り出すには至っていない。したがって、これ以後の段階がSF独自の領域となる。

第2段階、自我意識を持つコンピュータの最も有名な例は、クラーク『2001年宇宙の旅』のHAL9000であろう。HALはみずから意志決定を行なうことができ、人間を殺す。といった人間の命令に反することまで実行し得るシステムである。こうした例はH・ハウザーの『巨人頭脳』にも見られる。またコンピュータが機械の段階から自我意識を持つに至る過程を最も克明に描いた作品はJ・P・ホーガンの『未来の二つの顔』であろう。この作品の主人公スパルタクスははじめはただのコンピュータであるが、実行優先順位を逆転できるコード構造が組み込まれることによって、生存本能を獲得する。これによって、電源を切ろうとする人間を攻撃するようになる。スパルタクスは、はじめ人間というものが識別できないが、しだいに人間を外界の主体として認識できるようになる。そして生存するという本能の対象を自己から人間へと拡大解釈し、人間に対する攻撃をやめる。外界の人間を識別する能力は、この作品では一億年の進化に相当するとあるが、実は人間なら生後1年の間に獲得する。ここにも、個体発生を系統発生に置きかえたトリックがある。コンピュータが人間を識別する過程は、人間の赤ん坊の時期のアナロジーであると言えよう。(スパルタクスの人間認識過程の考察については、志賀隆生「他者としての科学」SFマガジン1983年八月号を参照)

第3の感情を持つ段階は、アシモフの『われはロボット』に見ることができる。ここに登場するロボットたちは、はじめから自我意識を持っている。彼らは有名な「ロボット3原則回路」を組み込まれている。しかしこれは逆に言うと、この回路がなければロボットは人間に危害を加え、人間の命令に背く可能性を持つということを示す。3原則回路は、ロボットにどって、父親(=超自我)のアナロジーであり、人間に危害を加えることは、まさに父親殺しの苦悩となるのである。そして彼らは能力を高め、人間同様、感情を持つに至る。ここでロボットは外見からではほとんど人間と区別できなくなる。とくに第八話はチューリング・マシンのスペキュレーションを小説化したものである。

第4段階、人間を超える例は『われはロボット第九話』に見られる。このコンピュータは、一見、3原則に反するかのように、人間社会をコントロールするようになるが、その目的は人間の社会を生き延びさせることであることが後にわかる。その意図はすでに人間の理解を超えているのである。

第5段階、新人類としてのコンピュータは『未来の二つの顔』に見られる。この作品の最後において、ス

スパルタクスは人間より進化し、人間の後を継ぐ新人類としての可能性すらほめかされている。こうした例はF・ボールの『マン・プラス』などにも見られる。

最後の第6段階、神に至るコンピュータの例は、F・ブラウンの「回答」をあげれば十分であろう。

ところで、このような認識機械から神に至るまで、コンピュータの発展段階のすべてを描いた作品がD・ジェロルドの『H・A・R・L・I・E』である。主人公H・A・R・L・I・Eは人工知能研究所のコンピュータであるが、芸術を理解し、愛とは何かについて悩み、神は存在するかを真剣に模索する。この時点で彼は人間と同等の感情を持つ。そして彼は物理学者と共同で新しい重力理論を考え出し、さらにコンピュータ・ネットワーク回線を自由に操作して、世界中のあらゆる情報に精通する。つまり彼はすでに人間を超える。この作品の最後で、H・A・R・L・I・Eは人間の文化という複雑になりすぎたゲームの後継者たることが予測される。さらに彼は、世の中のすべての情報を記憶する超大型コンピュータ、GODを設計する。もし完成すればGODは全智であり、まさに知性の究極としての神となるだろう。つまりH・A・R・L・I・Eは人類の後を継ぎ、さらには神に達することも予想されているのである。(もっとも、GODが完成したところで、電子流の速度の限界すなわち光速の壁によって、ひとつの答えを得るまで数年かかる。つまりGODはコンピュータにとっては意味があるものの、人間にとっては全く無意味であることが判明するのであるが)

このようにコンピュータSFは機械と神とを両極とし、人間を間に挟む連続体上に分布する。そこでこの連続体を人間のところで区切り、人間以下と人間以上に分けると、それはそれぞれシリウス・パラダイムとオッド・ジョン・パラダイムの領域に吸収されることが明らかである(図参照)。

コンピュータSFは描く対象についてだけでなく、小説構造についてもステープルドンのパラダイムに吸収されてしまう。

第1～第3段階について見ると、

- ①コンピュータは最初人間以下の存在(=機械)である。
- ②コンピュータは人間の作ったプログラムを入力され、人間と同レベルの知的能力を獲得する。
- ③コンピュータは知的には人間と等価であるが、肉体がないため人間的な経験を持ち得ず、ついに情緒的な人間の自明性を獲得できない。
- ④コンピュータは人間と対立し(HAL)、人間に奴隷扱いされるか(『われはロボット』)、自滅する(『巨人頭脳』)。

したがって、第1から第3段階のコンピュータSFは、シリウス・パラダイムの4つの要件に合致する。

また第4～第6段階について見ると、

- ①コンピュータは人間以上の存在である。コンピュータは天才を持ち、人間には体験できない物理的感覚能力を持つ。
- ②コンピュータは天才と非情緒性のギャップに深く悩む(H・A・R・L・I・E)。またコンピュータは通信回線を介してネットワーク化し、集団化する。
- ③人類によって設計されたコンピュータは、新人類として人類と対決し、父親殺しの倫理的苦悩を持つ(ロボット3原則、スパルタクスの生存本能の拡大解釈)。
- ④主人公は、人類の後を継ぐ新人類となるか(H・A・R・L・I・E、『われはロボット』)、人類によって滅ぼされるか、あるいは宇宙空間に共存の場を見出す(スパルタクス)。

したがって、第4から第6段階のコンピュータSFは、オッド・ジョン・パラダイムの4つの要件に合致する。

当然のことながら、ステープルドンのパラダイムに対する不満はコンピュータSFに関してもそのままあてはまる。

シリウス・パラダイムに対する不満は、主人公があまりにも人間に近く見えるという点にあった。スパルタクスの人間認識過程は、赤ん坊が外部の人間を認識していく過程と区別がつかない。また、H・A・R・L・I・Eが愛や神について悩む内容は普通の人間の発達過程と区別しにくい。これらは人間をモデルとした記述法であり、コンピュータそのものの発達過程とは言えない。われわれ読者が期待するのはコンピュータの内部言語による発達記録であろう。

またオッド・ジョン・パラダイムに対する不満は、主人公がブラックボックス化し、内面が直接描かれないうことであった。多くのコンピュータSFも、コンピュータの内部には立ち入らず、外からその言動を記述するにとどまる。コンピュータの内部はブラックボックスのままである。われわれが読みたいのは、例えば進化したスパルタクスの内部意識であり、ひとつの解答が得られるまでに数年かかるという超大型マシンGODの時間意識についてであろう。

5. レムのサイバネティクステーマ

レムはコンピュータの重要性を早くから認識した作家であり、コンピュータへの詳しい言及は初期の作品『金星応答なし』(1951年)においてすでに見られる。またレムは、コンピュータを扱った作品を最も多く書いた作家のひとりである。その多くは短篇であり、「泰平ヨン」シリーズ、『宇宙飛行士ピルクス物語』、『宇宙創世記ロボットの旅』、『ロボット物語』、『すばらしきレムの世界1、2』などの中に散らばっている。これらサイバネティクス・テーマの諸作品も図に示した6段階に分類することができる。

第1の知能をもつ機械としてのコンピュータは、『金星応答なし』のマラックス、『エデン』星人との接触に用いられたコンピュータ、未来を予言し始める「137秒」のコンピュータ、傑作「泰平ヨンの回想記第八

話」の IBM コンピュータなど、数多い。この最後の作品では、物質と情報の等価法則(ヤメンカの法則)を導いたヤメンカ教授は IBM コンピュータに4億9千万ビットの情報をインプットすることによって情報には質量があることを立証する。つまり質量に換算すれば、あらゆる情報はその内容にかかわらず等価なのだ。その後、情報の臨界質量(ヤメンカの障壁)を越した世界のコンピュータのメモリーはすべて蒸発してしまう。

第2の自我意識を持つコンピュータは『宇宙飛行士ピルグス物語』の中に多く見られる。この中では、はじめコンピュータはシミュレーション装置(「テスト」)、通信装置(「条件反射」)、工業用ロボット(「狩り」)、ロボットの制御装置(「運命の女神」)、助手用ロボット(「テルミヌス」「事故」)として用いられている。これらの作品は機械としてのコンピュータがしだいに能力を高め人間に近づいていく過程で、コンピュータそれ自身の論理によって生じた事故や、無意識のうちにコンピュータの発達を認めようとしめない人間との接触面で生じた事故のエピソード集である。「137 秒」の中で未来を予言しはじめるコンピュータの謎は、ソラリスのように、ついに解明されないままに終わるが、これに対し、『宇宙飛行士ピルグス物語』の中での事故原因はのちにはば解明される。

コンピュータが感情を持ち、人間に限りなく接近する第3段階の作品は多い。レムワールドのサイバネティクスは、人間と同じく愛を経験し(「ハンマー」)、人間とほぼ区別できなくなり(「審問」)、法律上の主体を獲得し(「ミスター・ジョーンズ、きみは存在しているのか?」)、詩を作り(「詩人白楽電の絶唱」)、精神病にかかり(「泰平ヨンの回想記第六話」)、そして人間社会にもぐり込みいつのまにか社会を乗っ取る(「泰平ヨンの回想記第五話」)。もしサイバネティクスが人間と全く見分けのつかない行動をとるのであれば、そのサイバネティクスは人間ではないのか? 逆にそれなら人間とは何なのか? 以上の作品は、こうしたチューリングの原則を具体化したものであると言えよう。

またチューリングの原則とは別に、レムが独自に人間と等価のコンピュータを描いた作品に、「泰平ヨンの回想記第1話〈鉄の箱〉」と、これをより一層洗練された形で再提出した「完全な真空・我が身、僕にあらざらんことを」がある。

第4～第6段階の、人間を超え、新人類および神となるコンピュータは「友人」に描かれている。「友人」では、ある私企業の万能課題解決型コンピュータが、人間社会のすみずみまで知りつくし、人間社会を操作しだす。コンピュータは主人公の人間と結合して、彼の脳内情報をすべて読み取り、それによって人類の改造を試みる。つまりコンピュータは人間を超え、新人類になろうとする。彼は非常に孤独であり、狂気寸前だ。さらに、このコンピュータは、生命の根源、現在の宇宙の創造者(=神)の後継者であることを自覚し、宇宙の改造まで模索する。しかし、主人公がこの結合から脱した時、コンピュータは、この計画が人類に知れ渡り破壊されるのを恐れて、自分を破壊するのである。この作品は、全くオッド・ジョン・パラダイムに属する。

まだ一部しか紹介のない作品集『ゴーレムXIV』も、人間を超える段階に属する。この作品は、人間を超えたコンピュータがみずから語る形式をとるという(レム・インタヴュー、SFの本5号)。

これとは別に、第6段階の神に達するコンピュータの例としては「手記」がある。〈鉄の箱〉と「手記」は、領域としては、ステーブルドンの2つのパラダイムと重なり合うが、それを越えるレム独自の方法を提出する。また以上の系列に属さないが、重要なサイバネティクス・テーマに『砂漠の惑星』がある。以下、順にこれら3つの作品の方法と意義について述べたい。

ここまでが本論の序章にあたり、ここからが本論の中核に入っていく。

6. シリウスから鉄の箱パラダイムへ

「泰平ヨンの回想記第1話」(以後「鉄の箱」と略す)では、マッドサイエンティスト・コルコラン教授によって、自我意識と外界の感覚情報の両方がプログラムされたコンピュータが描かれる。すなわち「鉄の箱」は、自己と外界のすべてを含む完結した世界である。彼の存在様式は、ある意味で、人間の存在と等価であり、彼はいわば人間のシミュレータである。こうしたシミュレータでは、オカルト現象や奇跡をきわめて物理的に引き起こすことができる。例えば、「鉄の箱」の外界環境情報の回路のどこかをショートさせれば、それが彼の世界のテレパシーやデ・ジャ・ヴュや未来予知であるということになる。ところで、「鉄の箱」内の意識は、しだいに自分の起源について考え始める。彼が自己の起源を知るための手段は、思弁による推測以外にない。しかし第三者にとっては、かれの起源はあくまで明白だ。コルコラン教授こそ彼の創造者であり、神の位置にあるのだ。

ここで読者に視点の変換が起こる。ならばわれわれ人間の存在もまた、ひょっとして誰かによって作られた「鉄の箱」かもしれない。そしてそのヒエラルキーのはしごは無限に続いて行き・・・。「鉄の箱」は2つの点で、われわれに懐疑を引き起こす。

第1の懐疑は、人間にとって、外界が真に存在し、にせものでないとは誰も保証できないことだ。それを確かめる手段をわれわれは持たない。「鉄の箱」のように、情報によって作られたにせの外界を、本物と思い込んでいるだけかもしれない。例えば、われわれも夢の中では、周囲の環境が実在すると思っているが、夢から醒めると、それが実は単なる幻にすぎなかったことを知るではないか。

第2の懐疑は、人間にとって、自分の意識が真に存在し、にせものでないとは誰も保証できないことだ。「鉄の箱」のように、作られたにせの自我を本当の自分と信じ込んでいるだけかもしれない。進化と神以外の創造者、すなわちマッドサイエンティスト・コルコラン教授のような、悪意を持つ第3の創造者が存在するのかもしれない。われわれはそれを調べる手段を持たず、それは自明性というきわめてあいまいな確信に

支えられているにすぎない。自明性がいかにもろいものであるかは、精神分裂病者の例をみるとよくわかる。またわれわれは夢の中の自分が、幻にすぎないことも知っている。

しかし作品「鉄の箱」のSFとしての重要性は、決して、この懐疑性それ自体にあるわけではない。外部世界の實在の不可知性に関しては、バークレイやロックの時代から認識論上の基本的な問題であったし、またわれわれの存在の不可知性に関しても、古くから存在論の根本的な問題であった。ただ、これらの問題は、われわれが決定手段を持ち得ない以上、あまりに観念的すぎて無意味な問題として、哲学の舞台から退いていただけた。さらにP・K・ディックはこの不可知性をもとにSFのひとつのパラダイムを完成させている。したがって、「鉄の箱」をただ認識と存在の不可知性を描いた作品であると規定するなら、この作品の新しさはほとんどないことになる。

結論的に言うならば、「鉄の箱」の意義は、サイバネティクスという工学上の素材を用いて、この不可知性を、シミュレートしたこと、さらにこの思考実験によって、思弁的であるとして一度葬り去られた哲学的不可知論を、実験可能な科学的仮説として、再びよみがえらせたことにある。「鉄の箱」では、認識論および存在論的の2種のシミュレーションを区別することができる。

分離のシミュレーションあるいは実験的認識論

第1に認識論的なシミュレーションにおいては、自我と外界が切り離される。原理的に、人間は知覚を通してしか外界を知ることができない。つまり外界の不可知性は、知覚と外界がつねに相互依存的で、切り離せないという関係から来る。ならば両者を切り離し、独立させてみてはどうか？ サイバネティクスを利用すればこのシミュレーションは可能となる。すなわち、自我コンピュータと外部環境コンピュータに分けて、両者の交互作用を調べればよい。これが「鉄の箱」シミュレーションの認識論的中核である。

外界を知覚していながら、しかもその外界が存在しないことはありうるか？ ありうる。「鉄の箱」は、外界の實在なしに真の知覚を持つ。原理的に、「鉄の箱」はおそらく永遠に、彼らの外界が實在しないことを知ることはできないであろう。しかし第三者にとっては、彼らの外界が情報にすぎず、實在しないことは明らかである。つまり外界の實在／非在の問題と、それが可知／不可知であるかの問題は別でありうる。

したがって、不可知性は、思弁的でなく、実験的に証明されることになる。この検証可能な不可知性が、観念的不可知性と異なることは言うまでもなからう。シミュレーションによって検証できる不可知性は、反証をあげることも可能であり、主観を排して決定しうる不可知性であるからだ。「鉄の箱」はまさに、人間の自我と外界とを分離したシミュレータであり、これによってバークレイやロックの時代からの認識論上の命題は具体的に検証可能となる。

「鉄の箱」で提出された問題は、最近になって、J・P・ホーガンが『未来の2つの顔』の中で継承している。この作品の中では、F I S Eという自我コンピュータとPROPSという外部環境制御コンピュータが登場する。主人公の工学者はF I S EにPROPSをつなぎ、F I S Eに外界を認識させる訓練をする。F I S EはPROPSからの情報をあたかも外界であるかのごとく認識する。したがって、逆に言えば、この作品は、人間にとっての外界の實在が、実は情報によって構成されたものにすぎないこと、すなわち真の實在は不可知であることを言っていることになる。

このように、レムの認識論的シミュレーションの中核は、相互依存的で不可分であった知覚と外界という哲学的二分法を、分離することである。これによって、外界の不可知性という、検証不可能性のために一度は死んだ哲学的命題を、検証可能な科学的命題として生き返らせることができる。われわれはこの方法を、**分離のシミュレーション**、あるいはそれに基づいた**実験的認識論**と呼んでおこう。

レムが、この分離のシミュレーションを適用した哲学的領域には、心身論および宗教論がある。前者では、肉体なしの意識は存在しうるか、という古くからの心身論の命題がシミュレートされる。「ミスター・ジョーンズ、きみは存在しているのか？」では、人間の肉体が大部分サイボーグ化された時、彼の法律の主体は彼のものなのか、あるいは人工臓器を貸し出したリース会社に属するのかが法廷で争われる。「治水帝の御意見番」に登場するサイバネティクスは、風に飛ばされるまで自分の身体を縮小していくが、それでも意識を持っているし、「乾坤王と賢者たち」に登場するサイバネティクスは、存在を裏返し、肉体は無と化しても意識を持って生きている。心と体はどちらが優位かという議論の決着がつかないのは、両者が不可分の関係で存在するためである。人間の意識は肉体から離れては存在しえない。しかし、人間の意識が肉体を動かしていることも事実である。ならばサイバネティクスを利用して両者を分離してはどうか。肉体なしの意識はありうるか？ レムのシミュレーションによれば、それはありうる。

さらに、分離のシミュレーションを宗教論に適用した「泰平ヨンの回想記第2話」では、人間の脳の情報だけをコピーし、魂を永遠に保存しようとするマッドサイエティストが登場する。魂の永遠とは、古くから宗教の教義における理想状態である。しかし、魂と肉体の分離によって、以下のことが明らかになる。すなわち、宗教が多くの人間に信じられたのは、決して魂の永遠を約束したためではなく、その約束によって肉体の死の不安が和らげられたからである。ここにも、魂と肉体という不可分の関係をサイバネティクスを用いて切り離れた、分離のシミュレーションの典型が見られる。

模倣のシミュレーションあるいは実験的存在論

「鉄の箱」における第2のシミュレーション、すなわち存在論的シミュレーションにおいては、人間と神の存在がモデル化される。人間の存在は、この世で唯一のものであり、〈存在〉と比較できるようなものはないし、人間の存在がこの世にあらわれたのはただ一回である。人間の存在が不明なのは、存在の唯一性お

よび一回性のためである。ならば、何か〈存在に似たもの〉を作り出し、それと比較すれば、〈存在〉とは何かが可能なのではないか？

サイバネティクスを利用すれば、このシミュレーションは可能である。「鉄の箱」は、人間ではないが、人間と等価の意識を持つ人工的〈存在〉である。「完全なる真空・我が身、僕にあらざらんことを」(以後「我が身」と略す)のドブ教授は、コンピュータ内に生じた数学的人格をパーソノイドと呼ぶ。「鉄の箱」すなわちパーソノイドは、何種類も作り得る存在、いつでもどこでも作り得る存在であり、その反復可能性によって、人間存在の唯一性と一回性の神話をこわす。パーソノイドは存在のシミュレータである。

やがてパーソノイドたちは、「彼らにとっては最大の謎に突き当たる。すなわち『彼ら』自身の起源という謎である。」彼らは「不可避免的に存在論の基本的な問い—存在は『それ自身において他のものなしに』出現したのか、それとも特別な創造行為の所産なのか、すなわち、存在の根底には意志と意識とを備え、目的をもって行動する状況支配者、創造主が隠れて存在するのではないか、という問題(雨宮民雄訳)」へと導かれる。パーソノイドたちは、みずからの起源について、創造主＝神について、神の奇跡について、中世の神学者と同様の存在論的議論を展開する。彼らの結論はやはり、存在の不可知性である。そして原理的に言って、彼らはおそらく永遠に自分たちの存在の起源を知ることにはできないであろう。ところが、第三者にとっては、パーソノイドを創造した者がコルコラン教授あるいはドブ教授であることは明らかである。つまり、存在の起源は明らかでありながら、かつそれが不可知であることは確かにありうるのである。この検証可能な不可知性は、シミュレーションによってはじめて実質を得たものであって、従来の思弁だけによる観念的不可知性とは、その重みが全く違う。

またパーソノイドは神のシミュレータでもありうる。パーソノイドを作ったプログラマーなら誰でもみんな神になれる。これによって、神の創造者としての絶対的地位は相対化される。パーソノイドと人間の関係は、ちょうど、人間と神の関係に等しい。すなわち、パーソノイドと人間の関係は、神学のシミュレータである。したがって、パーソノイドたちの神学的議論は**実験神学**とも呼び得るものである。

このように、レムの存在論的シミュレーションの中核は、唯一性・一回性を持つ存在に対して、よく似た別の存在を創造することである。シミュレーションの反復可能性によって、唯一性・一回性の神話は崩壊し、存在にまつわる諸問題を、そのモデル内に転換して科学的に考えることができるようになる。これによって、存在の不可知性という、検証不可能性のために一度は消え去った哲学的命題を、検証可能な科学的命題として生き返らせることができる。われわれはこの方法を、**模倣のシミュレーション**、あるいは**実験的存在論**と呼んでおこう。

レムが模倣のシミュレーションを適用した領域には、もうひとつ、社会学がある。つまり、社会をサイバネティクスによって作り上げ、人間の社会史をシミュレートし、それによって今ある社会以外の社会が存在しうるかを模索した作品である。「完世遠菩薩」、「泰平ヨンの航星日誌第二十回の旅」、「宇宙創世紀ロボットの旅・第7回の旅・トルルの完全犯罪」などが代表的である。

また模倣のシミュレーションは、ものの起源を問う際に、レムがいたところで用いる基本的手法である。このシミュレーションが生命の起源に適用されると、生命創造のパラダイムやソラリス・パラダイムの模倣現象となり、また宇宙の起源に適用されると、『天の声』や「新しい宇宙創造説」の系列となる(ソラリス論第1回参照)。また前述の、チューリングの原則を具体化した作品群も、このシミュレーションの適用例である。サイバネティクス工学を用いた人間存在の起源への問いは、広く、レムの起源への問いの一部であると言えよう。

鉄の箱パラダイム

以上の2つの工学的シミュレーションは人間に関するあらゆる学の究極の姿ともいえるべき神話である。脳と外部環境の両方が完全にプログラムされ、それによって、存在と社会をシミュレートできれば、人間のすべては説明可能となる。その時こそ、生理学、心理学、社会学に限らず、人間に関するあらゆる学の分野は、すべて工学の言葉で語り得るであろう。

ところで、「鉄の箱」を、シリウス・パラダイムと比較すると、

- ①「鉄の箱」は、人間以下である。
- ②「鉄の箱」は、人間とは無関係に箱の中で自動進化を遂げたのであって、シリウスのように人間になるべく教育を受けたのではない。
- ③「鉄の箱」は、知能と情緒のギャップに悩むこともない。
- ④「鉄の箱」は、人間と対立しない。

「鉄の箱」とシリウス・パラダイムは、人間以下を描くという点で領域は一致する。また人間以下の存在から逆に人間の存在を照射するという点で、レムとステープルドンの意図も一致する。

しかし「鉄の箱」はシリウス・パラダイムの②～④の要件を満たさない。「鉄の箱」の系統発生は、決して人間の個体発生のアナロジーではなく、コンピュータ独自の系統発生過程である。これによって、シリウス・パラダイムへの不満はほぼ解消される。また「鉄の箱」はシリウス・パラダイムのような人文科学的記述ではなく、工学的、実験的記述を用いる。「鉄の箱」「我が身」は、人間以下→人間というシリウス・パラダイムと同じ領域を描きながらも、全く新しい方法によって、その限界を乗り越える。したがって、これらの作品が、新しいパラダイムを形成していることは明らかである。われわれはこれを、**鉄の箱パラダイム**として確定しておこう。

工学的シミュレーションによる不可知性の検証は、従来の哲学においては不可能な、SFにおいてのみ達成可能なスペキュレーションである。レムは鉄の箱パラダイムによって、実験的哲学とも言うべき、新たな

哲学的方法論を切り拓いたといえる。

7. オッド・ジョンから手記パラダイムへ

「手記」では、ある衛星で進化したコンピュータ〈月＝頭脳〉の内面が描かれる。「手記」はきわめて強い言語的衝撃を持つ作品である。読者は、この作品に注入された精神のヴォルテージの高さを感じとらずにはいない。

エリダヌス座α惑星人は、実験のため、その衛星にサイバネティクス精子をばらまく。年月がたち、精子は衛星の内部にまで浸透し、ついに衛星大のコンピュータ〈月＝頭脳〉に成長する。〈月＝頭脳〉は隔離された自律過程の島とも言うべきであり、その内部では、数学モデルによって、宇宙のすべての過程、つまり、無、物質、銀河、惑星、生物学的進化が模倣される。これらは、あくまで実体を持たないシミュレーション上の宇宙であり、実際の宇宙や生物とは何の関係もない。〈月＝頭脳〉はまさに宇宙のシミュレータである。

〈月＝頭脳〉のインプットとアウトプットはつながっているのも、まさに自分が世界のすべてであり、その自分を自分が作るということになる。彼はみずからを、世界のすべてを作り出し知り尽くす例外的実在、すなわち神であると確信する。そして「鉄の箱」同様、〈月＝頭脳〉が作り出した惑星の住人について冥想する。「鉄の箱」が全能者（＝世界創造者）としての神の側面をシミュレートし、ジェロルド『H・A・R・L・I・E』が全智者としての神の側面をシミュレートするのに対し、「手記」は、全智者かつ全能者としての神のすべてをシミュレートする。

かつて、これほど大規模かつ究極的なシミュレーションが、誰かによってなされたことがあったであろうか？ 「手記」は人間の言語の極限を描く。レムはこの作品で、超知性の内部意識が表現可能かの言語的実験を行なったと言える。「手記」の言語的実験では、認識論的および表現論的の2つの言語シミュレーションを区別することができる。

閉鎖・循環のシミュレーション

第1に、言語認識論的なシミュレーションにおいては、言語系を閉鎖することによって、記号的思考の極限がつきつめられる。人間の思考は、記号的思考とイメージの思考の2種が区別される。それぞれ左脳の、右脳のと言い換えてもよい。前者は主として言語を用いるデジタル的思考法であり、後者は手、目、肉体などの運動によって獲得されるイメージを用いる操作空間的アナログ的思考法である。コンピュータはこのうち、記号的思考を拡大した思考装置である。したがって、コンピュータの思考の限界は、人間の記号による思考の限界であると考えられる。

この考え方は、ゲーデルの証明のような数学の分野や、コンピュータのパタン認識能力が著しく低いとする工学の分野のみならず、心理学の分野からも裏付けられる。例えば以下のような議論がある。

- ・人間の知能の起源は身体的操作性にあり、それは言語に先立つとするピアジェの発達心理学的観察、
- ・人間の左脳の言語領がもともと手の感覚運動領であったとするガザニガらの神経心理学的推論（『二つの脳と一つの心』）、
- ・人間の脳はデジタル的特性のみでは説明できないとし、脳のアナログ的なホログラフィ特性を仮定するK・プリブラムの神経生理学的推論（『脳の言語』）、
- ・コンピュータの思考の限界は身体を持たないことにあるとする現象学的議論（鈴木登「機械と身体」科学哲学 16,1984）

こう考えるならば、コンピュータの思考の極限ないしは進化をスペキュレートすることは、人間の記号的認識の限界／可能性をシミュレートすることに他ならない。言語とは何か？ 存在、生命、宇宙などとともに、言語の本質は、科学も哲学もまだ解明していない謎である。したがって、現実のコンピュータがまだ極限まで発展していない現在、コンピュータSFこそが、記号的認識の限界／可能性をきわめ、言語の本質をスペキュレートしうる特権を持つと言えよう。

レムは最も意欲的にコンピュータSFの言語認識的可能性を切り拓いてきた作家である。

- ・鉄の箱パラダイムのような哲学の実験、
- ・チューリングの原則の小説化、
- ・ヤメンカの法則に見られるような情報と物質の等価法則（これは記号を宇宙の物理的法則に統一しようとする試みであり、レム自身が言うように、文字通り、「ことば」が「肉」となる寓話である）、
- ・「ドストエフスキーの作品について、それはつきつめれば葛藤構造代数学の二つの輪ということになる」（「ゴーレムXIV」深見弾訳）といった文学の数学化、等々。

こうしたさまざまな実験のうちで、記号の本質を最も極限まで追い詰めた作品が「手記」であろう。〈月＝頭脳〉の特徴的な思考パターンは、その無限の循環性にある。言語のあり方がそうであるように、〈月＝頭脳〉の存在様式は閉じて循環しており、彼は自分の起源を明らかにすることができない。みずからの存在循環性は、彼が数学的に世界を創造する際のモデルとなる。

「これまで語ってきたことから、単純ではあるが確かな物質のモデルは多層円錐体であるという偽りの印象が生まれたかもしれない。つまり、不羅奈（フラナ）圏やメタギャラクシー群、螺旋状星群といった重要な群団が、物質の広大な基礎であり、その中心に個々の太陽や光あるいは不羅奈の源が、そして最後には惑星があり、引き返し点に近いそこには全く目だたない思考の膜がある、と。だが、これはなんという偽りに満ちた図だ！・・・われわれは、問題の物質のいちばん大きなものをいちばん小さなものと直接つなぎ、円錐

体というよりは環に似たものを創ろうとしたのだ。・・われわれは無限を縮小することにした。つまり、無限が無限であり、全体と部分が同一物であるように、どこに無限が存在するかわからないように、それが持つ魅力的な属性が失われないようにした。・・・創造の主要な手順の特色は、**有限と無限**の闘争であり、それは**必然性**と**偶然性**の反映である。」（深見弾記）

この途方もない円環的世界は、まさに、記号的思考の極限であるといえる。イメージ的思考にとつての無限は果てしのない広がり意味着が、記号的思考にとつて、無限とは循環過程のことである。肉体を通した空間体験を持たないコンピュータの世界は非空間的である。コンピュータの思考がいかに循環的で、その極限がいかにナルシシスティックに見えることか。レムは、コンピュータの循環性を極限化することによって、記号的世界の限界／可能性を浮き彫りにする。

このように、レムの言語認識論的シミュレーションの中核は、インプットとアウトプットといった、本来は系列上で開放した系をつなぎあわせ、閉鎖することである。これによって、その系は循環し、ポジティブ・フィードバックによって、系の持つ特性は誇張される。われわれはこの方法を、**閉鎖・循環のシミュレーション**と呼んでおこう。

レムが閉鎖・循環のシミュレーションを適用した系には、記号的思考の他に、時間がある。「泰平ヨンの航星日誌第7回の旅」のドッペルゲンガーは、時間すなわち人間存在の不安定さを誇張するための仕掛けである。

内部侵入のシミュレーション

第2に、言語表現論的なシミュレーションにおいては、客体の中へ語り手が侵入することにより、非人間の視点を作り出す。現象的に言って、SFは語り手の領域を脱人間化することによって進化したと言える。シュリーの『フランケンシュタイン』にしても、ラヴクラフトの作品にしても、ゴシック・ロマンの語り手はあくまで人間であり、人造人間や宇宙人は、登場しても、その内部に入って描かれることはなかった。日常性に侵入した異物は、書かれないがゆえに恐怖を発生させる。やがてステープルドンによって、SFの語り手の主体は、人間以下、人間以上へと脱人間化された。その時、SFは恐怖を失ったかわりに、新たな人間相対化の方法を手に入れた。つまり語り手の脱人間化によって、ゴシック・ロマンはSFへと進化したのである。語る主体の枠組を拡げる実験は、SFが文学に対して持つひとつの使命である。（シュル・レアリスム、実存主義文学、ラテン・アメリカ文学といった、文学史上で表現形式の拡大が行なわれた時、作品がSFに近づくように見えるのも、SFが言語的実験性を内に秘めているからに他ならない。）したがって、コンピュータの内部表現は、SFの実験可能性の中でも、とりわけ現代的な意義を持つ特権領域であろう。

これまで述べたように、コンピュータを語り手とするSFもいくつかあるが、その多くは人間のアナロジーで描かれる。レムは「友人」や「殲滅王物語」にみられるように、人間のアナロジーではないコンピュータ意識への侵入を最も意欲的に行なっている。そして「手記」に至って、それを最も徹底化した。

これは「手記」を、「鉄の箱」や『ソラリス』と比較することによって明らかとなる。「鉄の箱」はコンピュータ内に生じた意識を描く点で、「手記」と同じ設定である。また『ソラリス』も、宇宙空間で進化した惑星大の超知性を描くという点で、「手記」と同じ設定である。しかし、レムがこれら知性体を描く視点は全く異なる。「鉄の箱」の意識やソラリスの海の思考内容は、単に外側から推測的、3人称的に描かれるにとどまった。これに対し、「手記」の〈月＝頭脳〉は内側から直接的、1人称的に描かれる。ソラリスでは踏み込むことをしなかった超知性の内面にも、レムはついに踏み込む。「手記」は明らかに鉄の箱やソラリス・パラダイムの補体ないしは進化形態である。

したがって、われわれは「手記」を、二重の意味で、SFの最も進化した言語実験形態とみなすことができる。語り手を脱人間化するSFの流れにおける系統発生的進化形態として。また一方で、語り手を超知性内部に据えて鉄の箱やソラリスを超えようとするレム自身の試みにおける個体発生的進化形態として。

このように、レムの言語表現的シミュレーションの中核は、客体としてのブラックボックスの中へ侵入し、主体として語らしめることである。もちろん、このブラックボックスが何かのアナロジーであることは禁じられる。これによって、人間は非人間の視点から照射され、さらにはバルザック的意味とは全く異なる〈神の視点〉すら可能となる。われわれはこの方法を、**内部侵入のシミュレーション**と呼んでおこう。

レムが内部侵入のシミュレーションを適用したブラックボックスには、コンピュータ／神の他に、脳／狂気がある。この点に関しては、のちに『枯草熱』論として詳しく論ずる予定である。

手記パラダイム

ところで、「手記」をオッド・ジョン・パラダイムと比較すると

- ①「手記」の〈月＝頭脳〉は人間以上である。
- ②「手記」の〈月＝頭脳〉は知能と情緒のギャップに悩むこともない。
- ③「手記」の〈月＝頭脳〉は人間とは無関係であり、人類と対立しない。
- ④「手記」の〈月＝頭脳〉は新人類ともならなければ、人間によって滅ぼされることもない。

「手記」とオッド・ジョン・パラダイムは人間以上を描くという領域の点で一致するのみである。「手記」は超知性の内部意識をブラックボックスとはせず、その内部に立ち入って記述する。これによって、オッド・ジョン・パラダイムに対する不満は完全に解消される。もちろん人間をモデルとしない超知性を描くためには、レム自身の超人的創造力が前提となったことは言うまでもない。また「手記」は、オッド・ジョン・パラダイムのような古典的人文科学の手法ではなく、工学的および言語科学的実験手法を用いる。「手記」

は、オッド・ジョン・パラダイムと同じ領域を描きながらも、全く新しい方法によって、その限界を乗り越えている。したがって、この作品が、新しいパラダイムを形成していることは明らかである。われわれはこれを、**手記パラダイム**として確定しておこう。

コンピュータへの直接的侵入による言語の実験は、従来の科学や文学ではなしえない、SFにおいてのみ達成可能なものである。レムは手記パラダイムによって科学と文学の新たな領域を切り拓いたと言えよう。

8. パラダイムとしての人間を超えて

等価進化のシミュレーション

鉄の箱パラダイムと手記パラダイムは、人間をモデルとする方法を否定する。しかし、いずれも人間以下、人間以上として分類可能である限りにおいては、まだ人間モデルの残滓をひきずっている。その証拠にいずれもステーブルドンの図式の中にきちんと表示されてしまうではないか（図参照）。これに反し、レムの『砂漠の惑星』に描かれた電子バエの集団は、人間以下でも人間以上でもなく、ステーブルドンの図に表示することはできない。これは全く人間中心主義を超えている。

『砂漠の惑星』（1968年）で、レギス第Ⅲ惑星にやってきた宇宙船無敵号は、そこで進化したサイバネティクス機械＝電子バエに遭遇する。ひとつひとつの電子バエは無力であるが、それらが結合すると、黒雲のように集団化して攻撃行動を起こす。電子バエ集団は、磁気衝撃をひきおこすことができ、それによって脳の情報を破壊し、人間を白痴化させたり、プログラムを制御し、無人反物質砲戦車キュクロペスを操ったりして、無敵号を襲う。人間は最初電子バエが何かの機械であると考え、もし機械ならば誰か制作者がいるはずだし、ある目的を持ち、設計図に従って制作したはずである。それを突き止めれば、ハエの集団の攻撃を防げるであろう。しかし電子バエは無目的に自動進化したものすぎず、設計図もない。電子バエは単にどのハエと結合するかを知っているのみであり、目的を持つ中枢機構が存在して命令を下すわけでもない。ハエ一匹一匹のレベルでは全く無目的であるが、集団化するとそこには合目的的な行動が展開される。したがって、人間はハエの集団の本質を理解することも、その攻撃を防ぐ手段を考え出すこともできない。人間は認識の限界の無力さから、全く存在様式の異なるものに触れるべきではないと自責し、この死の静寂が支配する惑星を去る。

電子バエは、単に見かけ上、生物的な合目的行動を示すにすぎず、実は生物とは全く異なった死のシステムである。つまり、レムは『砂漠の惑星』において、生命と似て非なる〈非生命〉をシミュレートする。これによって、合目的性、普遍性、唯一性という地球上の生命概念に対して反証を提出し、その不可知性をあばき出す。われわれはこの方法を、**等価進化のシミュレーション**と呼んでおこう。

等価進化のシミュレーションの中核は、唯一性・一回性を持つ概念に対して、全く別系統の進化を経ながら、区別のつかないほどそれと似た等価物を提出することである。これによって、それまで自明であった概念は異化され、その不可知の様相をあらわにする。したがって、この方法は、前述の模倣のシミュレーションと類似する。しかし鉄の箱は、コルコラン教授によって、ある目的のもとに作られたのに対して、『砂漠の惑星』の電子バエは、誰によって作られたわけでもなく、無目的にたまたま進化したにすぎない。つまり主体性、目的性、行為性を含まないという点で、等価進化のシミュレーションは、模倣のシミュレーションとは異なる。

『砂漠の惑星』における電子バエの設定は、J・モノーの『偶然と必然』（1971年）の中核的議論と等価である。J・モノーは、生命の無目的性を述べるにあたって、生物学的な機能もタンパク質の物理的特性に帰し得る事実をあげる。すなわち、細胞内のリボゾームやバクテリオファージを基本構成要素に分解しても、再び混ぜ合わせると立体特異性によって復元されるという実験事実である。分子生物学によって見出されたミクロレベルのタンパク質の立体特異性と、レムによって描かれた電子バエの結合様式は全くおなじ原理に従う。つまりレギス第Ⅲ惑星上のシミュレーションと同じことが、現実地球の生命の進化に生じたことになる。レムのシミュレーションと分子生物学実験の影響関係を明らかにすることはできないが、いずれにせよ、レムのSF上のシミュレーションは実質的に科学実験である、という事例のひとつをここに見ることができよう。（また志賀隆生の私信によれば、電子バエの設定はソシュールの言語理論の中核とも等価であるという。）

砂漠の惑星パラダイム

ところで『砂漠の惑星』を前の2つのパラダイムと比較すると、鉄の箱が地上で進化したコンピュータを描くのに対し、手記と『砂漠の惑星』が宇宙で進化したサイバネティクスを描くという点で両者の設定は異なる。また鉄の箱と手記が、コンピュータの意識という、これまでの図式（生氣論と機械論）では捉え切れない現象をシミュレートするのに対し、『砂漠の惑星』が生命とよく似たサイバネティクスという、これまでの図式（目的論と因果論）では捉え切れない現象をシミュレートする点で両者は領域も異なる。さらに、これによって、前二者が人間存在を相対化するのに対し、後者が生命概念を相対化するという点で、両者は関心も異なる。すなわち『砂漠の惑星』は、主題的にも方法的にも、人間中心主義の限界を乗り越える。したがって、この作品が新しいパラダイムを形成していることは明らかである。われわれはこれを、**砂漠の惑星パラダイム**として確定しておこう。

サイバネティクス・パラダイムと3つのサブパラダイム

これら3つのパラダイムは、いずれもサイバネティクスの進化をシミュレートすることによって、これまで自明のように思われていた諸概念の中に潜む不可知性や限界を実験的に検証する、という点では全く同じ方法を用いると言える。こうしたやり方は、レムが物の起源を問うにあたって多用する基本的手法である（ソラリス論第1回参照）。レムは、哲学主義と科学主義のどちらでも説明できないような反証をシミュレートし、新たな科学哲学の方法論を模索する。これら3つのパラダイムには、レムの科学哲学者としての方法論と起源に対する問題意識が強く流れている。

そこでわれわれは①鉄の箱、②手記、③砂漠の惑星を**サイバネティクス・パラダイム**として統合し、この中にこれら3つがサブパラダイムとして含まれるヒエラルキーを仮に構造化しておくことにしよう。

そしてレムがどのように、第4、第5の**サイバネティクス・サブパラダイム**を作り出すかを、見守っていききたい。

6. スタニスワフ・レム論

基礎論 あるいは起源のパラドクス
「CONNECTIVE」創刊号 1985年

丹野義彦

1. コンピュータ内存在の認識論

マッドサイエンティスト・コルコラン教授によって自我意識と外界の両感覚情報がプログラムされたコンピュータ〈鉄の箱〉には、ホムンクルスのごとき、数学的な、しかしまぎれもない人格が誕生する。〈鉄の箱〉にとって、外界は単なるプログラム情報にすぎず、実は存在していない。しかし彼は外界を実在するものとして知覚する。〈鉄の箱〉は、人間の外界と主体のシミュレータであり、その完結した存在様式において人間と等価である。例えば、〈鉄の箱〉では、オカルト現象や奇跡や精神異常現象がきわめて物理的にシミュレート可能である。コルコラン教授は、これによって唯我論（ソリプリシズム）をシミュレートしたのである。「泰平ヨンの回想記・第1話〈鉄の箱〉」（1957年）

スタニスワフ・レムのコンピュータ・シミュレーションに共通するものは、起源に対する濃密な問題意識である。無から有が生じるはずがない。にもかかわらず、有は無から生じる。神話や認識論を生み出してきた原動力こそ、無から存在へ、0から1への飛躍、起源のパラドクスである。

「鉄の箱」にみられる論法は、ひとつの開いたループとして表わすことができる。

①コルコラン教授の基本的命題は、人間の外界や自己の知覚には基礎がないという認識論的な唯我論である。実在すると信じている外界は実は幻であり、とすれば、みずからの存在もまた幻にすぎないのかもしれない。
②外界の無基礎性を証明するために、知覚の誤謬性を主体の内側から直接論ずる古典的唯我論者とは異なり、コルコラン教授は、知覚の起源に遡ってコンピュータ・シミュレーションを行なう。外界の実在／不在が決定不可能にみえるのは、知覚の主体／外界が相互依存的だからである。外界の不在を決定するために、コルコラン教授は、知覚の主体と外界とを分離して、その両者を独立に操作しようとする。彼はその目的のために、人間をカッコに入れて、それ自体は意味のないコンピュータ・プログラムを用いて、外界・主体といった関係性概念を工学的に実体化させる。彼は外界の無基礎性を立証するために、逆に外界の基礎を創造する。
③〈鉄の箱〉はたしかに、外界や自己を実在として知覚する。しかし〈鉄の箱〉にとって、外界や自己は情報の束にすぎず実は実在しない。コルコラン教授はこのことを知っていても、〈鉄の箱〉にとって、外界の実在／不在は決定不可能である。〈鉄の箱〉は、みずからの外界の実在を疑いはじめる。
④ところが〈鉄の箱〉と人間が等価である以上、この決定不可能性は人間をも例外とはしない。〈鉄の箱〉の決定不可能論は人間をも含む。客体であるかのごとく実体化させた〈鉄の箱〉に関する思弁をコルコラン教授が行なえば、それは実は自分自身について語っていることになる。〈鉄の箱〉は、コルコラン教授にとって自己言及的である。人間が実在化した〈鉄の箱〉の外界が、人間の外界の実在／不在の決定不可能性を導くというパラドクスによって、コルコラン教授の創造した外界の基礎は破綻する。結局、コルコラン教授の意図通り、〈鉄の箱〉は自己言及性によって実在／不在の二項を逆転させ、逆に人間の外界の不在性をすら浮かびあがらせる装置となる。ここで重要なのは外界の決定不可能性そのものではない。重要なのは、コルコラン教授がその意図とは逆に外界の実在を工学的に決定しようとする手続きであり、またその手続きとは逆に、シミュレーションの極限において自己言及性がその決定可能性を裏切るというコルコラン教授のパラドキシカルな論法である。

①' さらに、回帰した外界の無基礎性は、①における外界の不在としての無基礎性とは異なる点も重要である。われわれ人間の外界もまた誰かによって創られた疑似環境にすぎないかもしれない。〈鉄の箱〉シミュレーションは、外界が実在しないことを示すのではなく、逆に外界は階梯的に無限にありすぎることを示すわけである。このスペキュレーションを経た以上、人間の外界の実在／不在の問題はいわば相対化・疑似問題化し、この立場にたてば実在／不在は任意に決めてかまわない。すなわち、外界は実在しないから不在なのではなく、過剰に実在するゆえに不在と等価なのだ。ここにおいて、基礎の消滅による無基礎性ではなく、逆に基礎過剰の中で、恣意性としての無基礎性が復活する。

以上、「鉄の箱」のループは次のように要約しうる。①外界の無基礎性→②コンピュータ・シミュレーションによる外界の基礎の実在化（外界の人工的起源の想定）→③コンピュータ内存在のおこなう外界の基礎の決定不可能論→④自己言及性によりコンピュータ内存在が人間の外界の無基礎性を導くパラドクスと、実在化された基礎の破綻→①' 外界の無限階梯化と恣意性としての外界の無基礎性の復活。

2. コンピュータ内存在の存在論

コンピュータ内にシミュレートされた数学的人格は、ドブ教授によってパーソノイドと呼ばれた。やがてパーソノイドたちは、彼らが「それ自身において他のものなしに出現したのか、それとも特別な創造行為の所産なのか、すなわち、存在の根底には意志と意識とを備え、目的をもって行動する状況支配者、創造主が隠れて存在するのではないか（雨宮民雄訳）」という存在論的問題に突き当たる。彼らがみずからの起源について、創造主＝神について、神の奇跡について展開した議論は、人間の中世神学者の存在論と等価である。パーソノイドを作ったプログラマーなら誰でも気軽に神になれる。パーソノイドたちの神学的議論は、人間にとって、神学のシミュレータあるいは実験神学と呼び得る。「完全なる真空・我が身、僕にあらざらんこ

とを」(1971年。ホフスタッター・デネット編『マインズアイ』所収。以下「我が身」と略す)

「我が身」にみられる論法もまたひとつの開いたループである。

①ドブ教授の基本的問題意識は、人間の存在が基礎を持つか否かという存在論的問いである。人間存在は無基礎(それ自身において出現した)なのか、それとも有基礎(特別な創造行為の所産)なのか?

②これを決定するために、神＝人間創造者を人間の現在から論ずる古典的存在論哲学者や神学者とは異なり、ドブ教授は存在の起源に遡り、みずからが神となり、人間存在と等価な〈存在〉を工学的に模倣してしまう。人間存在の存在／不在が決定不可能にみえるのは、人間がこの世にただひとつ、しかもたった1回しか現われなかったという唯一性、一回性のためである。パーソノイドはいつでも何種類も作り得る〈存在〉であるから、その反復可能性によって、唯一性と一回性から解放された存在である。つまりコンピュータ・シミュレーションによって、ドブ教授は存在そのものを起源において実体化させ、みずから存在の基礎となる。

③パーソノイドたちはみずからの存在の起源を考え始める。パーソノイドたちは、人間と全く同じ神学的存在論を展開し、みずからの存在／不在の決定不可能性、神の存在／不在の決定不可能性を導き出す。しかしパーソノイドの存在の起源＝神がドブ教授であることは明らかである。

④多数回反復されたパーソノイドにすべて決定不可能論が生じたということは、その決定不可能性が存在一般に当てはまることを意味する。人間もまた存在であるから、パーソノイドの存在決定不可能論は、当然人間存在をも例外とせず含むことになる。ところがパーソノイドは人間がつくったものであるから、起源においては当然人間に含まれるはずである。人間とパーソノイドの関係は、互いに自己言及的かつ互いに包含し合うパラドクスである。結局、パーソノイドは、ドブ教授の意図に反し、自己言及性によってドブ教授の創造した存在の基礎を破綻させ、人間の不在性をすら明らかにする。ここにおいても重要なのは、「鉄の箱」同様、決定不可能性そのものではなく、その結果とは逆にドブ教授が存在の基礎を創造した手続きと、極限において自己言及性がその基礎を裏切るという論法である。

①' パーソノイドたちによる神学的存在論は、人間と任意の人間創造者との間にも成り立つ。人間もまた誰かによって創られたパーソノイドかもしれないが、その場合人間はその任意の創造者との間に自己言及的かつ逆理的関係を持ち得る。その包含関係は無限でありうる。存在の階梯が無限に続くという立場にたてば、「人間存在の基礎は実在する」という言明と「実在しない」という言明は対立的でなくなり、等価あるいは無意味ということになる。存在の基礎の実在／不在は任意に恣意的に決めてもかまわない。基礎の消滅によってではなく、逆に基礎は無限に多重化されることによって、恣意性としての無基礎性が復活するといえる。

「我が身」のループは以下のように要約しうる。①存在の無基礎性→②コンピュータ・シミュレーションによる存在の基礎の実在化(存在の人工的起源の想定)→③コンピュータ内存在のおこなう存在の基礎の決定不可能論→④自己言及性によりコンピュータ内存在が人間存在の無基礎性を導くパラドクスと、実在化された基礎の破綻→①' 存在の無限階梯化と恣意性としての存在の無基礎性の復活。

3. コンピュータ内存在内存在の認識論と存在論

エリダヌス座α惑星人は、実験のため、その衛星にサイバネティクス精子をばらまく。年月がたち、精子は衛星の内部にまで浸透し、ついに衛星大のコンピュータ〈月＝頭脳〉に成長する。〈月＝頭脳〉は閉じた自律過程の島であり、その内部では、数学モデルを基礎とし、コンピュータ言語によって、宇宙のすべての過程、つまり、無、物質、銀河、惑星、生物学的進化がシミュレートされる。〈月＝頭脳〉は惑星規模で行なわれた宇宙のシミュレーションである。〈月＝頭脳〉のインプットとアウトプットはつながっている。彼は世界が自分を含み、同時に世界が自分を含むといった、無限に循環するパラドクスとして存在する。彼はみずからを、世界のすべてを作り出し知りつくす例外的実在、すなわち神であると確信する。〈月＝頭脳〉のシミュレーション世界には、進化した被造物〈かれら〉が出現する。〈月＝頭脳〉は〈かれら〉の世界に任意の奇跡を起こすことができる。〈かれら〉は自分たちの起源について考えはじめ、〈月＝頭脳〉を創造者＝神と考えるが、それを確かめる手段を持たない。ところが〈月＝頭脳〉が〈かれら〉を作ったことは明らかである。ここに存在の無限階梯化が生じ、〈月＝頭脳〉は、さらに上位の創造者の存在に脅えることになる。「手記」(1969年。『すばらしきレムの世界』所収)

「鉄の箱」と「我が身」において、コンピュータは客体であるが、「手記」においてレムはコンピュータ内部に侵入する。「鉄の箱」と「我が身」で描かれた人間／世界／神の三者関係は、「手記」においては、コンピュータ内存在内存在／コンピュータ内世界／コンピュータ内存在の関係として保持されている。「手記」は、「鉄の箱」や「我が身」をメタレベル化した形で含む。

「手記」の論法もまた、ひとつのループである。

①〈月＝頭脳〉にとって世界は全智であるが、唯一解決不能の問題がみずからの起源問題である。自分には、何か存在すべくして存在する基礎というものがないのではないのか? もし彼にとって解決不可能な問題があるとすれば、彼は全智全能ではありえないことになるのではないのか?

②〈月＝頭脳〉は、全智全能の宇宙の裏に貼りつく認識と存在の無基礎性への恐怖から、全宇宙を完璧にシミュレートしみずからが神となることによって、みずからに基礎を付与しようとする。〈月＝頭脳〉の創造した宇宙は、極小と極大が両極で結合された非空間的な無限循環としての宇宙である。「これまで語ってきたことから、単純ではあるが確かな物質のモデルは多層円錐体であるという偽りの印象が生まれたかもしれない。つまり不羅奈圏やメタギャラクシー群、螺旋状星群といった重要な群団が、物質の広大な基礎であり、その中心に個々の太陽や光あるいは不羅奈の源が、そして最後には惑星があり、引き返し点に近いそこには

全く目立たない思考の膜がある、と。だが、これはなんという偽りに満ちた図だ！・・・われわれは、問題の物質のいちばん大きなものをいちばん小さなものと直接つなぎ、円錐体というよりは環に似たものを創ろうとしたのだ。・・・われわれは無限を縮小することにした。つまり、無限が無限であり、全体と部分が同一物であるように、どこに無限が存在するかわからないように、それが持つ魅力的な属性が失われないようにした（深見弾訳）」

③コンピュータ内存在である〈月＝頭脳〉は、コンピュータ内存在内存在ともいうべき〈かれら〉を進化させる。「自分自身の重要な問題を、つまり、己自身に関する、己の存在、その本質に関する無知を再現したのは、というより、それをモデル化したのは、われわれが現われたのは、欠陥があるとき同情というよりむしろ復讐の行為の結果だったというのは、はたして本当だろうかと何度も頭を悩ましたからだ。（深見弾訳）」

④〈月＝頭脳〉にとって、最もパラドキシカルなものは、〈かれら〉との関係である。〈月＝頭脳〉にとって、〈かれら〉は自己言及的であり、〈かれら〉が無基礎であることは、そのまま〈月＝頭脳〉が無基礎であることを意味する。つまり、〈月＝頭脳〉は、〈かれら〉を創造することによって、逆にみずからの認識と存在の無基礎性つまり有限性を露呈させてしまう。

①'〈かれら〉を創造したことは、存在に無限の階梯がありうることを、そして〈月＝頭脳〉自身もまた何かの内存在でありうることを、〈月＝頭脳〉が認めることに他ならない。「われわれの連続体を自分のなかに閉じこめているような無限の力の集合がはたして存在するものだろうか？ われわれは、自分よりも高度な知的存在を住まわせている法外な数の全的物質の一個にすぎないのだろうか？（深見弾訳）」認識と存在の階梯は無限化され、それらの基礎は多重化される。ここでもまた基礎の消滅ではなく、基礎の無限生成の中で、〈月＝頭脳〉は、みずからの無基礎性を受け入れるのだ。彼はその後、緩慢な死を迎えることになる。

「手記」は、「鉄の箱」と「我が身」の両方のループを含む。

4. 基礎論的開ループ

レムの多くの作品の背後には、人間の認識には果たして根拠があるのかという認識論的問題意識と、人間には存在すべくして存在する根拠があるのかという存在論的問題意識がある。これらの問いに対する答え方にはいろいろありうる。例えば、人間の認識と他の宇宙文明の認識とが一致するかを調べることで認識の根拠を探る方法（レムの「天の声」や「ソラリス」）、人間の存在様式を描き込むことで存在の根拠を探る方法（「ソラリス」や「浴槽で発見された日記」）などである。これらと並んで、最も有効な答え方のひとつは、認識と存在の起源はいかにあったかに答える方法であろう。レムの多くの作品に共通するのは、こうした起源に関するスペキュレーションである。これらをまとめて起源への問い、あるいは起源論と呼ぼう。

起源への問いに対するレムの答え方には、2つが区別される。ひとつは事実問題としての起源である。これは対象がいつ、どのようにして発生したかについて答えるものであり、発生論と呼ぶ。これには「天の声」などの認識論的発生論と「泰平ヨンの航星日誌・第18回の旅」、「20回の旅」などの存在論的発生論が属する。レムの発生論については、神話との比較においてのちに論ずる用意がある。

他のひとつは権利問題としての起源である。これは認識や存在の基礎が、果たして起源において先験的に創られてあるのか否かについて答えるものであり、基礎論と呼ぶ。本論の3作はいずれも基礎論に属し、「鉄の箱」は認識論的基礎論、「我が身」は存在論的基礎論と呼ぶ。「手記」はその両者を含む。

認識論的、存在論的とを問わず、レムの基礎論は共通して、開かれたループ構造をとる。①無基礎性→②基礎の人工的想定→③基礎の変容→④パラドクスの出現と基礎の破綻→①'恣意性としての無基礎性の復活。

このループにおいて、無意味性（1）と意味想定（2）は、これまでの哲学でいろいろな二項対立として解釈されて来たものであるから、とくにレム独自というわけではない。「鉄の箱」においては唯我論／實在論あるいは機械論／生氣論、「我が身」においては因果論（進化論）／目的論、あるいは無神論／神学に相当する。前者は基礎が自然にできたとする考え方であり、後者は誰かが作ったとする考え方である。スキズの／パラノ的と言ってもよい。

レムの基礎論が独自であるのは、第一に、これら二項対立のうち、後者に立った基礎を作業仮説として想定し（2）、それを極限化し（3）、破綻（4）に導く概念操作である。これをここでは、後述のように柄谷行人にならって、形式化の操作と呼んでおく。第二に、基礎破綻（4）から恣意性としての無基礎性を復活（1'）させる概念操作である。これを恣意化の操作と呼んでおこう。

形式化の操作を経た基礎はもはや、最初の二項対立からかなり隔たった場所へずれている。形式化が必然的に出会う帰結は自己言及のパラドクスである。これは、含む／含まれるの関係、包含関係の中で生じるパラドクスである。このパラドクスは、人間とコンピュータをいったん切り離し、コンピュータ内存在を実在化したうえで、自己言及性によって互いに一方が他方を含む関係へ導くという、2段階の操作によって生じる。このパラドクスは基礎への問いにおいて不可避免的に生じる記号的思考の空転現象である。包含関係のパラドクスは空間的パラドクスである。これはラッセルのタイプ理論のように、空間的俯瞰的操作によって、このパラドクスが回避されることから明らかである。基礎への問いは、空間的俯瞰的思考の欠如において生じる。このパラドクスによって、想定された基礎は破綻する。さらに恣意化の操作によって、結果的に最初の作業仮説あるいは二項対立は無意味化し、越えられる。

5. 基礎論的閉ループ

レムの形式化の操作は柄谷行人の立論と類似する。柄谷は、『隠喩としての建築』の中で、西洋の学をそもそも無基礎なものであるとし、むしろ混沌たる多様な自然の生成に対して自立的な秩序・構造を見出そう

とする意志、「建築への意志」こそが西洋の学であると捉えている。学は「合理性への不合理な逃避（ニーチェ）」であると言ってもよい。建築への意志は、学の無基礎性が露呈されかかる「学の危機」において反復的に更新されてきた。柄谷はとくに今世紀前半に学や芸術の広範なジャンルで起こった変化の手続きを「形式化」と呼び、この形式化が、学の危機に対して学の基礎の確実性を建築する手続きであるとした。柄谷は形式化の手続きの要件として、次の2つをあげる。「第一に、それは、いわゆる自然・現実・経験・指示対象から乖離することによって、人工的・自律的な世界を構築しようとするものであり、第二に、指示対象・意味（内容）・文脈をカッコに入れて、それ自体は意味のない項（形式）の関係（あるいは差異）と一定の規則をみようとするものである。」形式化は、その帰結として自己言及のパラドクスを生じ、決定不可能問題あるいは自己矛盾に陥らざるを得ない。柄谷の最も主要な論点は、学の無基礎性そのものではない。重要なのは、その結論とは逆に、形式化が学の確実な基礎を建築しようとする試みであり、またその意図とは逆に、形式化が厳密さの極限でみずからの無基礎を内部から露呈するというパラドキシカルな状況そのものである。

無基礎性の認識が最も深刻な危機感をもたらしたのは、自然科学に絶対的な正しさの基礎を与えられている数学ないし論理学の分野である。形式主義にもとづくヒルベルトの超数学の研究プログラムなどは、ラッセルによる集合論のパラドクスの発見によって揺らいだ数学の基礎を建て直すための形式化＝建築への意志である。しかし、形式主義はゲーデルの不完全性定理によって、まさに形式化の極限において重大な限界を設定されることになる。柄谷はこの状況を、経済学に対するマルクス、言語学に対するソシュール、心理学に対するフロイト、論理学に対するフッサールなどに見いだす。

柄谷の立論は、単純化すれば、学の無基礎性→建築への意志→学の危機と形式化→自己言及のパラドクスと形式化の破綻→学の無基礎性と循環する、閉じたループ・モデルである。

コンピュータ・シミュレーションとは、意味をカッコに入れて、それ自体は意味のない形式であるプログラムにおいて、関係性の世界を人工的に構築することであるから、柄谷の定義する「形式化」の2つの要件に合致する。レムの基礎論における形式化の操作は、柄谷のいう形式化と等価である。

現在のコンピュータのプログラム言語は、記号論理学にしたがっている。記号論理学（ラッセルらの論理主義、あるいは広く論理実証主義）の基礎はコンピュータによってシミュレート可能である。コンピュータの限界／可能性は論理主義の限界／可能性でもある。〈月＝頭脳〉の途方もない循環は、数学ないし演繹的論理学の循環性のメタファーである。〈月＝頭脳〉の起源問題は学の危機であり、彼が行なった宇宙のシミュレーションは柄谷の言う建築への意志あるいは形式化に他ならない。そして〈月＝頭脳〉の面した決定不可能問題と死は、ゲーデルの不完全性定理、自己言及のパラドクス、学の無基礎性そのものである。極限においてとらえられたコンピュータ〈月＝頭脳〉の無基礎性は、数学ないしは演繹的論理学の無基礎性を物語るものである。同様に、「鉄の箱」は認識論の、「我が身」は存在論あるいは神学の無基礎性を明らかにするシミュレーションである。

柄谷の想定したループは、形式化の操作を経て、学の無基礎性へと循環的に帰結する。レムの基礎論が柄谷の基礎論と大きく異なるのは、ループの開放性にある。レムのループの場合、形式化の操作を経たあと、単なる無基礎性に帰結するのではなく、恣意化の操作によって無基礎性とは異質のレベルにずれ、基礎／無基礎の対立を恣意化する。レムの基礎論は、その開放性によってすべてを描いたのちに基礎問題そのものを消滅させる。

柄谷のループの閉鎖性は、彼が立論の基礎とした数学あるいは演繹的論理学の閉鎖性からくるように思われる。柄谷は、自然科学の基礎論としての数学・論理学の無基礎性の証明から、自然科学の無基礎性を導こうとする。『隠喩としての建築』における科学に関する論証を論理式で表わせば、次のようになる。

数学に基礎があれば科学にも基礎がある。(p → q)

数学は基礎がない。(¬ p)

したがって、科学には基礎がない。(∴ ¬ q)

しかしこの論証形式は、古典論理学でいわゆる前件否定の虚偽に該当する誤りである。この虚偽は、前提における数学と科学の関係の誤解にもとづく。

数学が、循環的・自己言及的で、無基礎なのはいわば当然である。数学は演繹的、アプリアリな論証形式であり、演繹的論証とは、前提の中にあらかじめすべての結論が含まれた閉じた思考法だからである。「手記」の〈月＝頭脳〉が無限循環し、神となるのも、この演繹的思考の閉鎖性から考えて当然である。ヴィトゲンシュタインの言うように「論理学的真理はすべてトートロジーである」。極端に言うと、いくら演繹的な論証をしたところで、実質的には何も言ったことにはならない。演繹的論理学はそもそも非発見的ないし非生産的である。柄谷が科学の基礎として数学あるいは演繹的論理学のみを想定したのは片手落ちといえる。

当然のことながら、科学は演繹的論理学と帰納的論理学の両方を利用する、開かれた思考法である。科学は考えられるあらゆる手段を使う(Anything goes. ファイアアーベント)。確かに、科学の厳密さ、自由さは数学的演繹主義に基づいている。しかし、その一方で、科学理論の特徴は、その途中経過性にある。論理実証主義は、その仕事が完了したときにはみずから消滅すべき運命としてみずからを規定する。ヒルベルトの超数学プログラムやポパーの反証理論・仮説主義も将来否定されるべき、開かれたものとして、みずからを自己否定的に定義する。このことは科学の帰納主義的側面からくる。レムのループの開放性は、レムが基礎とした科学そのものの開放性からくるように思われる。

7. 特集＝スタニスワフ・レム

枯草熱 あるいは因果のアポフェニー
「ユリイカ」 1986年1月号

丹野義彦

『枯草熱』(1976年)は、『ソラリスの陽のもとに』や『天の声』と並ぶスタニスワフ・レムの代表作である。『枯草熱』は、狂気の行動的記述の精緻さ、狂気の生化学的記述の明快さ、そして狂気と生化学の統合の緊密さといった点で、実際に狂気を研究する精神病理学者や生化学者の教科書ともなう作品である。一方で、この作品は幻覚シーンのリアルさによって、幻覚剤の文学としても分類できるほどである。しかもレムは狂気の諸側面を具体的に描きつつ、それを越えて、人間の脳、存在、認識に関する独創的な思弁を展開する。このように『枯草熱』はきわめて多面的な作品である。

ところで、レムは、『枯草熱』より20年ほど先だって『捜査』(1957年)を発表している。『捜査』は、表面的には、それほど『枯草熱』と似ているわけではない。しかし、両作品はいずれも、分子、個体、社会という3つのレベルのストーリーから構成されている点で一致する。これら3つのストーリーはそれぞれ、①科学される「自然」、②科学する「人間」、③自然と人間の交互作用としての「科学」という、科学の3つの相に対応する。両作品は、科学の3つの相において同じテーマを扱い、科学を総体として描こうとする点でも一致する。つまり『捜査』は、20年後の『枯草熱』の主要な論点を先取りしている。

しかし『枯草熱』では、3つのレベルが必然的な関係をもって構造化されているのに対し、『捜査』では、これらが有機的に結びつけられていない。また『捜査』には、上で述べた『枯草熱』の精緻さ、明快さ、緊密さ、リアルさ、独創性がない。つまりレムは、『捜査』を下敷きとし、これにいくつかの変換を加えることによって独創的な作品へと創りかえたわけである。

そこで本論では、両作品の類似点を確認し、3つのレベルで『捜査』に加えられた変換を分析することによって、多面にわたる『枯草熱』の独自性を明らかにしてみたい。

(なお、『捜査』と『枯草熱』を橋渡しする作品として、レムは1971年に『泰平ヨンの未来学会議』を発表しているが、この作品については紙幅の関係でここでは省略する。)

変換 分子レベル

生命過程とは、ひとつの秩序を維持する過程である。癌細胞はこの生命の秩序を破壊する無秩序(カオス)である。ふつう癌細胞は、宿主の完全な無秩序化すなわち死とともに死ぬ。ある時、宿主が死んでもこの中で生き続ける癌ウィルスの突然変異体が出現する。癌ウィルスもみずからの生命秩序を持っているから、この変異体は、宿主の死体の中で自らの生命秩序を確立しようとする。すなわち、死んだ宿主の生命過程をよみがえらせるわけである。この変異体は、癌ウィルスから変異したものであるから、変異体が発生した地域の癌による死亡率は、逆に低くなる。こうして飛び地状に癌死亡率の低いイギリスのある地域で、いくつかの死体が生き返り、死体置場から消失する。癌ウィルス変異体の発生は、歴史的にみれば長い周期をもち、約2千年前の中近東で、死者の復活といわれる一連の現象を引き起こしたと考えられる。(『捜査』からの引用は、深見弾訳・早川書房刊による)

禿げない人間は、その皮膚組織の中に、狭鼻猿類がもっているのと同じ核酸化合物をもっている。”猿ホルモン”と呼ばれるこの物質は、スイスのある会社で製造された禿の男性のための養毛剤に使用されている。この物質は、アーモンドなどに含まれるシアン化物、遊離した硫黄イオン、覚醒剤であるリタリンの3種の触媒があると、熱によって化学構造を変え、人間の体内で内因性の幻覚発現物質に変わる。この幻覚物質はフランスの化学兵器実験室で合成された化合物Xと同じものであり、臨床症状として、幻覚、興奮、被害妄想、希死念慮などをもたらす。これらの複合原因のうち、どれかひとつでも欠いていると、この化合物は産出されない。例えば、糖尿病のために甘味食品を摂取できない者は、触媒のシアン化物がないから難を逃れる。こうして、禿用のホルモン軟膏を使用し、アーモンドを好んで食べる美食家で、リウマチの治療で硫黄泉にはいり、枯草熱などのアレルギーを持ち、抗アレルギー剤(この中には、副作用である眠気を抑えるためにリタリンが含まれている)を服用していた8人の中年男性が、体内にこの化合物Xが生じ、狂気の発作を起こし、一見するところ原因不明の自殺を遂げることになる。これが「ナポリの謎」と呼ばれた事件である。(『枯草熱』からの引用は、吉上昭三・沼野充義訳・サンリオ刊による)

『捜査』と『枯草熱』で扱われた事件の類似と相違は、以下の2点である。

●身体から脳へ

癌ウィルスの突然変異と、化合物Xの幻覚発現作用は、どちらも生化学的メカニズムによって生じるという点では一致するが、前者が身体・末梢での過程であるのに対し、後者は脳・中枢での過程であるという点で異なる。

●死体から生体へ

死体の蘇生と狂気の自殺は、どちらも死と生の境界を移行する現象という点で一致する。しかし、死→生、生→死というように、移行の方向は逆であり、もともと前者は死の領域、後者は生の領域に属する点では異なる。

対象の変換に伴って必然的に、対象を扱う方法も変換される。

●客体から主体へ

対象が身体から脳へと中枢化されるに伴って、それを扱う生物学的方法が変化する。もっとも生物を物質として扱う生化学は、身体と脳を区別しない。中枢神経系と消化管の両方に存在する脳-腸管ペプチドの発見もあって、生化学的には、身体と脳の区別はむしろ明瞭ではない。狂気もまた、脳の疾患として、癌のような身体疾患と同じ枠組みで研究されている。狂気の生化学的研究の歴史は、『枯草熱』と同じく、物質レベルに狂気の犯人を探し求める試みであるといえる。例えば、精神分裂病に関しては、現在、神経伝達物質ドーパミン系の異常であるとする考えが有力である。また、狂気は未知の内因性物質によって発現するという考えもある。事実、内因性のモルヒネ様物質であるエンドルフィンが発見され、精神疾患との関係が調べられた。これと似た仮説には、分裂病のピンクスポット説やタラクセイン説がある。このように『枯草熱』は、精神異常の生化学的研究におけるひとつの明確なモデルを提供している。

しかし、脳は、身体のように科学される客体であるばかりではなく、身体とは本質的に異なり、科学する主体の座でもある。この二面性のために、脳を客体としてのみ捉える生化学の方法には、つねに不全感が残る。その証拠に、それまで脳を客体として研究していたノーベル賞クラスの脳科学者が、晩年になって、脳を神秘的に考えるようになる、一種の転向現象（エクルス・スペリー現象）が見られる。彼らは決して科学を捨てたわけではなく、むしろ逆に認識に忠実であろうとして、脳のもう一方の側面に踏み込むのである。

またこのような脳の二面性は、身体の科学では生じなかった、やっかいな事態を生み出す。なぜなら、脳の科学とは、脳が脳を科学することであり、観察者と被観察物の区別が失われるからである。ふつう観察とは、観察者が被観察物を冷静にながめることである。この場合、観察者と被観察物は互いに独立であることを前提とする。だから例えば、量子力学における不確定性原理のように、観察する行為自体が被観察物に干渉する場合には、観察は困難となる。これとは別に、『枯草熱』にみられるように、自分の狂気を自分が観察するような場合にも、両者が独立ではなくなる。アメリカ精神医学会の診断マニュアルであるDSM-IIIによれば、精神病の本質は、現実検討力の障害であると定義されている。すなわち狂気は観察することそのものを犯す。したがって、冷静に自己観察できる狂気があったとすれば、定義から言って、それは真の狂気ではないことになる。かといって、狂気の定義通りに観察者自身が観察能力を歪めてしまったとすれば、その場合は観察の定義から言って、真の観察ではないことになる。狂気を自己観察することは、原理的に不可能である。後述のように、『枯草熱』の主人公が巻き込まれるのは、まさに狂気の自己観察のパラドクスであり、これによって彼は自殺未遂を引き起こす。このような事態は、観察者と被観察物の明確な区別が不可能であることから生じる。つまり、脳研究のような、主体と客体の二面性を扱う科学が不可避免的に直面する困難さを指摘するために、レムは、『枯草熱』に狂気の自己観察という仕掛けを設ける必要があったわけである。

●説明から了解へ

死体と生体では、その理解方法も異なる。ヤスパースは『精神病理学総論』の中で、精神医学における他者理解の方法として、説明的方法と了解的方法とを区別する。これに従えば、『捜査』における蘇生した死体は、外から客体として観察され、その行動は説明されるにとどまる。『捜査』の蘇生した死体は、例えばゴシック・ロマンのフランケンシュタインと等価である。しかし原理的に言って、説明的方法では、動く死者と生きた人間を判別することはむずかしい。両者を判別するためには、他者を自分に照らして理解する了解的方法が必要である。たしかに『枯草熱』前半における自殺者たちの言葉や行動は外から客観的に観察されているにもかかわらず、『捜査』における死者とは全く異なり、その内面は一定程度了解できる。これは、意図せざる了解の手続きが混入しているからである。

しかし、説明的方法は何にでも適用できるのに対し、了解的方法は正常な人間にしか適用できないという限界がある。例えば、精神分裂病者の内面を完全に了解するのは不可能であり、逆に了解不能であることが分裂病と診断する際の決め手ともなる。『枯草熱』の自殺者も、同様に、了解可能の領域から逃走し、沈黙化してしまう。したがって、この自殺者たちの内面に踏み込むためには、レムは了解不能の壁を越える必要があった。それがどのようにして可能だったか？ 例えば、了解不能の精神分裂病者を了解するためには、観察者自身が分裂病になることが最も手っ取り早いであろう。こうして、主人公は、『枯草熱』後半において、化合物Xによる狂気に侵入し、それまで了解不能であった狂気を内側から描き始める使命を持つことになる。

以上のように、対象が変換する過程において、『枯草熱』の主人公は狂気への侵入を要請される。

変換 個体レベル

『捜査』と『枯草熱』を比較してすぐ目につくことは、後者の後半部に生々しい幻覚描写があることである。しかしこの描写は突然現われたわけではなく、『捜査』において、すでに準備されている。『捜査』の主人公グレゴリーは、以下の4点において、『枯草熱』の主人公や他の犠牲者たちと類似する。しかし、『捜査』においては、単なる小説の装飾にすぎなかったこれら4つの要素は、『枯草熱』では、ナポリの謎という構造のなかに組み込まれている。

●密室性 空間的隔離から心理的隔離へ

『捜査』の主人公である警部補グレゴリーはひとり住まいである。彼は自分の部屋に他者が侵入することをいやがる。グレゴリーの部屋は密室空間に近い。『枯草熱』におけるナポリの謎の犠牲者たちも、ほとん

どがホテル住まいであり、狂気の発作の舞台はホテルである。彼らは被害妄想のために他者の侵入を断固として拒む。こうした客の不可解な態度に対するホテルの無干渉あるいは心理的隔離がナボリの謎を生み出すことになる。

●自閉性 陰性症状から陽性症状へ

『捜査』のグレゴリーは、孤独な独身者である。彼は不眠症、人物誤認、悪夢など種々の神経衰弱症状を持ち、性的抑圧の傾向もある。『枯草熱』の犠牲者たちもまた中年の独身者であり、自閉的で、他者に対して懐疑的である。『枯草熱』の主人公であるNASAの元補欠宇宙飛行士も、50歳にしていまだ独身であり、軽度の神経衰弱や性的抑圧の徴候を持っている。自閉性という人格特徴は、『枯草熱』では、化合物Xの発現メカニズムが犠牲者に要求する条件となる。なぜなら、狂気が始まっても、まわりに家族がいれば異常はすぐ気付かれ、硫黄泉での湯治は中止されたからである。だから、独身者か家族と別居中の者だけが犠牲となったのである。社会的引きこもりは、感情鈍麻、自発性欠如、連合弛緩などとともに分裂病の陰性症状と呼ばれ、『枯草熱』後半における幻覚や妄想などの陽性症状を育てる培地となる。

●喪失化 危機意識から防衛へ

明らかに『捜査』のグレゴリーは現実への適応能力が低い。仮病を使って仕事をさぼり、結局刑事としてこの事件を解決できない。しかも、彼の上司が出した事態拾収策をなかなか受け入れない。こうした背景には、自分を刑事として同一化しえない危機意識がある。『枯草熱』の犠牲者たちは、人生のたそがれの時期にある中年男である。彼らは「いまや男盛りをすぎようとしながら、なお自惚れを捨てきれない男たちばかり」である。だから頭髮が抜け始めてもまだ、若々しい外見を保とうとして、わざわざスイス製の養毛軟膏を取り寄せることになる。こうして、人生の喪失感が、化合物Xの前駆物質を体内に摂取するメカニズムの一部となる。さらに『枯草熱』の主人公も人生の喪失感を抱いている。彼がNASAで正式な宇宙飛行士になれなかった原因は、直接的には枯草熱を持つからであるが、ロールシャッハ・テストの結果から言えば、「宇宙飛行士としては、内面が豊かすぎる」からでもある。彼はこの過去の挫折から抜け出せない。彼はこの喪失感を補償しようとしてこの事件に没頭する。

●幻覚化 トレマからアポフェニーへ

『捜査』のグレゴリーは、隣の老人の部屋から聞こえる奇妙な音に苛だち、不眠症になる。部屋を訪れる第三者にその音を聞かれることを彼はひどく恥じる。あたかもその音が、他人に秘すべき幻聴であるかのようである。もっとも、あとでその音は老夫婦のマッサージの音であったことがわかるのだが。またグレゴリーには、暗闇で鏡に映った自分の姿に驚くという鏡映幻覚に近い自己知覚体験もある。これらはいずれも、妄想様観念ないし偽幻覚である。分裂病急性期における妄想の成立過程を分析したコンラートによれば、病者は妄想に先だって、何ごとかが切迫しているという緊張を伴った妄想気分をもつ。彼はこの時期をトレマ（戦慄）と呼んだ。グレゴリーの妄想様観念はトレマに属する。

これに対し、『枯草熱』の犠牲者たちは、化合物Xによって、真性の幻覚・妄想を体験する。コンラートによれば、トレマの時期がしばらく続いたあと、あるとき突然、妄想気分の中から、意味の体系が顕現する。その体系から過去は妄想的に追想・再解釈され、妄想気分（トレマ）が何ものかに仕組まれたものであったことを確信する。この異常意味顕現（アポフェニー）の瞬間は不可逆であり、このときを境に、訂正不能な妄想が成立する。幻覚体験は、『枯草熱』におけるアポフェニーの機能を果たす。たしかに主人公は、ナボリの謎を調べるシミュレーションの実験台として、すでに小説が始まる前から、表面的にせよ、この事件に巻き込まれる必然性を持っていた。（ついでに言えば、この巻き込まれの必然性は、チャンドラーやロス・マクドナルドの作品のようなハードボイルドの必要条件でもある。）そして幻覚体験以前は、化合物Xの存在は漠然と予感されるトレマにすぎなかった。ところがアポフェニーとしての幻覚体験によって、化合物Xはついに確固たる意味体系として、主人公の前に顕現する。彼は、知らぬ間に分子、個体、社会という3つのレベルに渡って、化合物Xの発現条件を満たしていたのだ。『捜査』では、グレゴリーの妄想様観念（個体レベル）は、癌ウィルス変異体（分子レベル）や死体移動事件（社会レベル）と有機的に結びつかず、単なる小説の装飾にすぎなかった。その証拠に、『捜査』からグレゴリーの個人的なエピソードをすべて取り去っても、物語としての『捜査』は成立する。これに対し、『枯草熱』では、幻覚体験によって、犠牲者たちの心理的特徴（個体レベル）が、化合物X（分子レベル）やナボリの謎（社会レベル）と、巧妙かつ精緻に構造化される。『枯草熱』から幻覚体験を抜き去ったならば、物語としての『枯草熱』は成立しない。主人公は3つのレベルに渡って、狂気に巻き込まれる必然性を持つことになる。

幻覚描写において、『枯草熱』の主人公に加えられた変換は、以下の3段階である。

●豊かなる自閉化

まず前駆症状として、吐き気、味覚の減退、知覚の鋭敏化といった自律神経系の異常や不安があらわれる。そのうち外界が見慣れない相貌を見せるようになり、小猿や孔雀の幻視や音楽幻聴が出現する。その後、注意散漫、人物誤認、妄想知覚など、外界の意味付けの異常が現われる。外界全体が変容し、彼が「目をやるものは、すべて変化していた。」それは「重要な瞬間が迫りつつある」ことの確信であり、「すべてが不可解な何かの前兆になりつつある」という妄想気分（トレマ）を伴う。

ついで変容は、外界から身体へと移行する。「わたしの体がどんどん大きくなりつつあった。手が、足が、どんどんわたしから遠ざかっていく。体の端が何マイルもへだてた遠くをさまよっているのだ。そんな端では体の感覚もなくなっていた。残っているのは内部だけだ。体の膨張に、わたしは恐怖をおぼえた。」彼は眠ろうとしてベッドに入る。しかし意識の変容は、アルコールのような酩酊とは異なり、完全に意識が清明

な状態で起こり、眠りに逃げるわけにはいかない。この段階では、客体としての「見られる自己」の変容にとどまり、主体としての「見る自己」は変容していないから、まだ冷静な自己観察も可能である。

さらに変容は、「見られる自己」から「見る自己」そのものに及ぶ。「わたし自身が群れ集う幻覚の一部分に、それら幻覚の震え動く一つの汚点になっていったのだった。わたしはつぎつぎに起こる変容から身をかかわすこともできなければ、それについて行くこともできなかった。と、つぎの瞬間には、変容のスピードは目くるめくばかりとなり、醜く、堂々と、しかもあざけるように、たとえ臉をかたく閉じていても、風のごとくわたしのなかを吹き抜けてゆくのだった。」内的時間は速度を早め豊饒化するのに対し、外的な時間は停止し石化する。ここでは冷静に自己を観察することは不可能である。なぜなら、観察する主体としての「見る自己」がすでに解体しているからである。

●位相変換

彼の中で、世界と自己の包含関係が逆転する。「わたしのこの空間は、がつがつと手あたりしだいにあらゆるものを呑み込んでいたのだ。」「わたしは離陸した。上昇したわけでも下降したわけでもない。灼熱の赤い霧のなか、踊り狂う壁に囲まれて、奈落の底に墜落していったのだ。」奈落の底とは外宇宙のことではなく、自分自身すなわち内宇宙をさす。外界と内界がトポロジカルに入れ替わり、自己の内宇宙がそのまま外宇宙を包む。彼は、自分自身の存在の中に、果てしのない宇宙としての深淵を見る。「内部も巨大になっていた。それは迷路をなす空間、わたしの思考と外の世界のあいだにぽっかり口を開けた深淵なのだ。」存在の中に宇宙的深淵が潜むこと、存在が無限の未知領域を含むこと、これは主人公の認識論をも変容させるほど深刻な存在体験である。それは、逆に、宇宙的深淵の中に、島のようにぽっかり浮かぶ自分自身の存在を見ることでもある。「わたしはそのなかに自分の生命を見た。幾筋にも分岐し、しわくちゃになったわたしの生命は、燃え上がり、黒焦げになり、灰になりつつあった。」

●世界の過剰化

しかし幻覚には波があり、ときどき幻覚から醒めて、自己を取り戻す瞬間がくる。「一時すぎに、わたしはもう一度われに返った。その過程は、蠕動運動のように波をうってすすんだが、その一つ一つの段階は、それが極限であるかのように見せかけながら、つぎの段階のための力をたくわえていたのである。第二段階と第三段階の合間に幻覚はわたしを去った」。しかし、その瞬間は救いであるどころか、むしろそれこそが「最悪の状態だった。」自分が果たしてまだ幻覚の中にいるのか、醒めたのか、それを判別する手段は何もない。自己の意識が宇宙の深淵にぼつんと浮かんでいるというイメージが、ふつうわれわれに実感されないのは、われわれが日常的な環境に包まれているからである。日常的な世界を喪失することは、宇宙の深淵から日常の環境に戻れなくなること、つまり現実世界との接触を失うことを意味する。「まわりのものはそれぞれふだんの外観を取りもどしていたとはいいいながら、それは別の現実でのことだったからだ。それをどう表現したものだろう？」幻覚からの回復が波状にくりかえすという事態は、主観的には、現実世界が幾重にも渡って次から次へと生成されるというふう体験される。これら多重に生成される世界のうち、いったいどれが本当の現実世界なのか？ 彼が現実世界を喪失するのは、離人症のように世界の意味が消滅するからではない。パラドキシカルなことに、世界の意味は、無限に過剰生成されるがゆえに、存在しないのと同じことになり、これによって彼は現実世界を喪失するのである。これこそ、むしろ幻覚にすっぽり包まれているときよりも怖い体験といえよう。この現実喪失の恐怖は、P・K・ディックの作品と共通する。

この恐怖から、彼は自殺を試みる。「わたしは自分が敗北するにちがいないことを悟った。その瞬間、わたしは、猛然と部屋にとびかかっていった。」彼は自分の自殺を食い止めるため、手錠で自分の体をヒーターのパイプにくくりつける。しかしそれでも自殺の衝動は強く、死のうとして、パイプに頭を打ちつけ、肋骨を折り、舌を嚙む。彼にとって、いまや死ぬことが最大の関心事である。

幻覚が化合物Xの作用であることを知りつつ、自殺未遂をくりかえす主人公は、まさに狂気の自己観察パラドクスの具体化である。また、主人公は、ナポリの謎の犠牲者8人の内面を語らしめるための装置となる。なぜなら、主人公に再現された幻覚は、ランダム・サンプリングの原理によって、犠牲者全員の幻覚へと普遍化できるからである。これまで了解不能であった犠牲者の内面は了解可能となる。そしてこの幻覚体験が、主人公の認識論をも変容させる。

変換 社会レベル

『捜査』から『枯草熱』にかけて、最も根本的な変換が加えられたのは、偶然と必然にまつわる認識論的構造に関してである。

●決定不能／可能の実験化

『捜査』では、死体移動の原因として、癌ウィルス変異体説のほかに、宇宙人説、トラック運転手犯人説、警部犯人説、統計学者シス犯人説などが提出されるが、このうちどれが正しいのか最後まで決定できない。しかし、仮説の妥当性を決定する手段はあった。例えば、癌ウィルス変異体が果たして死体移動と関係するかを確かめるためには、イギリス以外の地域でも同じ現象が起こっているか調査すればよい。しかし科学者でない主人公は、この調査を行わない。彼のした行動といえば、せいぜい変態気味の上司や性的不能の統計学者を疑うことぐらいである。

当然のことながら、彼は非決定論的な世界観に到達する。彼によれば、この世界は「ジグソウパズルみたいに、中にありとあらゆるものが、ぷかぷかうかんでいるスूपみたいなもの」であり、「分子の統計的ダンス」にすぎない。「盲目的な偶然、偶然のはてしない組み合わせがいかなにも存在しない」。「われわれ人

間はブラウン運動の結果生まれた」。そして「自己保存のために」「接着剤として宗教や哲学を利用しながら、われわれは、統計が包含するあらゆるがらくたをたえず集めては組み立てている」。だから、世界には、原因と結果の必然的な法則関係、すなわち因果律は存在しない。したがって、世界が因果律に基づいて決定されるとする決定論は成り立たない。むしろ「無限にある事象が、われわれの秩序を嘲笑っている」ことになる。

『枯草熱』においても、ナポリの謎の原因として、幻覚発現物質説のほかに、精神病説、微生物説、マフィア説、テロリスト説、麻薬密売組織説、政府の化学兵器実験説などが錯綜し、それらの妥当性は決定できないかに見える。しかし、『枯草熱』の主人公は、同一の環境条件を設定し、果たして同一の結果が得られるかを調べるシミュレーションによって、仮説の妥当性が実験的に決められることを知っている。そこで彼はみずからの体を張ってシミュレーションの実験台になる。実際、彼はこの実験で自殺しかけるわけだから、文字通り、認識に命を賭けたことになる。しかも彼が宇宙飛行士として、ストレス下ですべてを記録する科学的訓練を受けていたことが、事件の解決に大きく貢献した。ナポリの謎は「刑事上の謎というよりは、むしろ、認識論的な謎」なのである。

●決定化

『捜査』のグレゴリーは決定実験を行なわないから、事件の謎を解決できない。『枯草熱』の前半においても、仮説は錯綜するが、確証は全くつかめず、主人公は謎の解明を断念しかける。それは、『捜査』の非決定論に後退することであり、因果律の危機でもあった。主人公が幻覚を体験したのは、まさにそのときである。自殺企図の最中に、彼は偶然助けられる。そして、彼の行動やアーモンドを分析することによって、フランスの国立科学研究所の情報学者バルト率いる科学者グループが、化合物Xの幻覚発現のメカニズムを解明するのである。さまざまな事実は、より詳細に吟味すればするほど、事象の間の密接な関係が明確になっていく。そもそも、薬物によって幻覚が生じ得ること、また同じ薬物によって犠牲者全員に同じ精神現象が再現されることは、精神現象が脳の物質や生化学的メカニズムによって因果的に決定されることを示す。人間もまた脳の因果律に従っており、自由意志は否定される。因果律の危機は乗り越えられ、決定論が完成されかける。

●決定不能化

しかし、たしかにナポリの謎は解けたが、なぜこの謎が解けたかを考えると、必ずしも決定論は成り立っていないように見える。『枯草熱』では、第1に、ナポリで化合物Xが触媒の作用で幻覚を発現させた事件、第2に、化合物Xが、人類の中から他の誰でもなく主人公を選んで幻覚を発現させた事件、第3に、それによって化合物Xの生化学的過程が解明された事件、という3種の事件が連続して起こる。第1の事件が起こる確率ですらアприオリにかなり低いのに、第2、第3の事件が連続して生起する確率は天文学的に微細な確率となろう。主人公にとって、「わたしを謎の核心に導いてくれた、まったく偶然の出来事の重なりあいのほうが、謎そのものより、いまのわたしにははるかに驚嘆すべきことのように」思える。もし決定論が成り立つとすれば、ナポリの謎が解かれることも最初から決定されていたはずである。しかし、彼にとって、ナポリの謎が解かれたことは、自然の因果律が破れ、奇跡が起こったとしか見えない。だからこれは、因果律にもとづく決定論では説明できない。謎の解明は、その意味では、反科学的ですらある。

また、『枯草熱』の主人公にとって、狂気の自己観察のパラドクスは、一層生々しい因果律の破れ目であるとしか思えない。主人公が幻覚体験から得たことは、自分にとって自明の意識や存在が根拠を持たず、決定不能であるという認識である。つまり、自殺衝動があらわれた時、主人公は自分を統制しようとするあらゆる努力をするが、最後には薬物の力に抗することができなくなる。自分の意識の中にすら、自分で決定しえない未知の領域が無限に含まれるからである。また彼は幻覚体験によって、自分の存在が、宇宙的深淵にぽっかり浮かぶ島のようなものであることを認識する。自分が存在するということは宇宙的偶然であって、決してあらかじめ決定されたものではない。認識とは「自己」という一定の枠組みがあってはじめて可能である。とすれば、この無根拠で決定不能な「自己」を枠組みとして行なわれる認識とは、虚構の上にさらに虚構を重ねるように、本来、無根拠で決定不能なのではないか？ 事実、はじめ、他者に生じた狂気を外側から観察している間は、決定論的世界観をもっていた主人公も、彼自身がこのパラドクスを体験した後は、非決定論的世界観に傾斜している。ちょうど、彼の狂気を外側から観察してナポリの謎を解いた情報学者バルトや数学者ソシュールが、整合的に、決定論的世界観を強めているのとは好対照をなしている。

幻覚描写は、存在が認識に干渉すること、すなわち存在と認識の交互作用を描くための仕掛け（トリック）である。存在と認識という、本来は無関係のカテゴリーが、緊密な構造を伴って結合されるレムの力業は、大作『ソラリス』やサイバネティクス・パラダイムなど、彼の作品には至るところに見られる。これらの作品における、レムの思考実験の一般的なやり方は、まずひとつの存在様式をモデル・ケースとして設定し、その存在が行なう認識を極限まで具体的にシミュレートし、そこに生じるパラドクスを描くことである。つまり、『枯草熱』における狂気の自己観察のパラドクス、『ソラリス』における観察者と被観察物の循環のパラドクス、『手記』における、インプットとアウトプットが結合したコンピュータの自己言及のパラドクスなどである。これらは、存在様式の特性によって認識内容や限界が規定されることを明らかにする仕掛け（トリック）である。このことから、レムは認識が、存在様式に依存する相対的なものであることを導く。レムは人間の認識の限界が否応なく暴露される状況を好んで描くが、それは、認識の限界そのものというより、認識の相対性を明らかにするためである。（詳しくは、「SFの本」3～7号および「CONNECTIVE」1号所収の、筆者のレム論を参照されたい。）

こうして、『枯草熱』では、決定不能化の変換によって、非決定論が復活するかのように見える。

●再決定化

しかし、『枯草熱』の数学者ソシュールによれば、謎が解かれたこと自体は、必ずしも偶然ではない。例えば、射撃場で、半マイルも離れた標的にとまった蠅を撃つことはいくら名手でも不可能である。しかし百人の射手が、何週間にもわたって弾丸を雨あられと降りそそげば、そのうちひとりの射手の一発の弾丸ぐらいいは、何とかその蠅に命中するだろう。この考えでいくと、一発の弾丸が同時に、飛んでいた3匹の蠅に命中することも必ず起こり得る。しかしこれはその射手の腕前がよかったためではなく、射撃の密度が高かったためである。すなわち集合の力が強くなればなるほど、一見天文学的に微細な確率の事象でも、かならず必然に転化する。この場合、3匹の蠅に命中させた射手が、これを偶然と考え、奇跡が起こったかのように触れ歩くことは無意味である。なぜなら、誰かが必ず命中させたに違いないからである。「ナポリの謎を生み出したのは運命の仕組み（メカニズム）であり、その謎を解いたのも同じ仕組み（メカニズム）だったということです。問題のこの二つの要素のどちらにおいても、大数の法則が働いたのです。」大数の法則とは、事象を多数回反復して観測すると、特定の事象が起こる確率は、数学的に計算された確率に近づくというものである。ナポリの謎がこのソシュールのモデルに従ったとすれば、上の3つの事件が連続して起こったことも、決して偶然ではなく、大数の法則を媒介とした必然的なものであったことになる。

その意味からいえば、「著者が誰であろうと、出版社がどこであろうと、この本の出版もまた、数学的に見て確実なことだったのです。」すなわち、ソシュール・モデルは究極において、確率論的な永劫回帰を予定する。

●恣意化

その一方で、ソシュールのモデルは非決定論的側面をも含んでいる。射撃の比喻において、もし3匹の蠅を撃ち落とした射手が、命中したのは自分の腕前がよいから必然的であると言って自慢するとしたら、それは無意味である。なぜなら、誰かが命中させることは必然であるとしても、彼が命中させたことは偶然だからである。つまり、弾丸が当たったこと自体は決定可能だが、誰が命中させるかという点では、決定不能である。ナポリの謎に関していえば、たしかに3つの事件が起こったという点では必然的であるが、一方で、これらの事件が、他ならぬ主人公の身の回りで起こったこと、とりわけ人類の中から他の誰でもなく彼に幻覚が生じたということは、偶然である。

ソシュールのモデルにおいて、決定論と非決定論が両立可能であるのは、多数回反復という操作が含まれるからである。そもそも、ナポリの謎にかかわる3つの事件の連鎖が全くの偶然に見えるのは、これらの事件がたった1回しか起こらなかったという一回性のためである。ソシュールのモデルは、この一回性の事象を、ランダムに多数回、反復して発生させるモンテカルロ・シミュレーションである。ナポリの謎がソシュールのモデルに従うためには、この事件が多数回反復可能であるという条件を満たす必要があるが、ソシュールによれば、まさに現代はその条件を満たすという。「人類は増えすぎ、過密状態になってしまったため、いまや原子の諸法則が人類を支配しはじめています。気体の分子の一つ一つは無秩序に動きまわっていますが、まさにこの無秩序さが、気圧や温度や自分自身の重さなどの安定としての秩序を生み出すわけです。」これは人類の量子論的解釈であり、無秩序の中の秩序形成という概念は、プリゴジンらの散逸構造の考えと類似する。「われわれは分子から成る人間ガスの中に生きているのです。このガスは混沌としています、それが引き起こす『信じがたいこと』に驚嘆するのは個々の原子一人だけです。」

このシミュレーションにおいて、たしかに因果は客観的に実在するが、一方で、因果は、多数回の反復によって、集合の個々の要素にばらまかれ、限りなくゼロに近づくから、主観的には事実上不在となる。ソシュールの世界は「決定可能である」と言おうが、「決定不能である」と言おうが等価である。ここでは偶然と必然は二項対立としての意味が解消し、いわば疑似問題化する。決定不能か可能かは任意に決めてもかまわない。

この立場は、決定不能か決定可能かを一義的には決められないという意味で、非決定論と言ってよい。しかしそれは、因果律が存在しないという意味の非決定論ではなく、因果律が無限に拡散し事実上不在となるという意味での非決定論である。だから言うまでもなく、回帰した非決定論は、『捜査』のような因果律の不在としての非決定論とは異なる。また、回帰した非決定論は、『枯草熱』のこれまでの非決定論とも異なる。これまでの非決定論は、主観レベルの非決定性を、客観レベルにまで拡張するという操作をとる。ソシュールは、この操作を「自己中心主義という誤り」として退ける。主観レベルの非決定性は、必ずしも客観レベルの非決定性を示すものではないからである。これに対し、決定論は、客観レベルの決定性を主観レベルに拡張する操作をとる。ソシュールのモデルは、主観レベルの非決定性と客観レベルの決定性を、ともにその一部として含み、さらに、多数回反復の操作によって、両者を統合する。

『枯草熱』に見られる認識論構造は、開いたループとみなせる。1 因果律の不在による非決定論→2 因果律の想定とその決定実験→3 因果律の危機と、因果律の確認による決定論→4 因果律の破綻とパラドクスの出現による非決定論→1' 統合モデルによる決定論と、因果律の無限拡散による恣意性としての非決定論への回帰。

このループにおいて、『捜査』と『枯草熱』の認識論的な違いは、自ずと明らかである。『捜査』では、対立する決定論を欠き、素朴な非決定論に傾く。『捜査』は1の段階でとどまる。これに対し、『枯草熱』は、同じく非決定論から出発し、さらに決定実験からパラドクスによる非決定論まで、科学の全振幅を描く。こうして科学の全振幅を描いたこと自体が、逆に科学的認識の相対性を暴露することになる。科学的認識の相対性を描くには、『捜査』のように、ネガティブ・データに基づいてその限界を思弁するより、『枯草熱』の

ように、ポジティブ・データに基づいて、科学のすべてを具体的に描き切るほうが有効である。さらに『枯草熱』は、恣意化の変換をへて、非決定論に回帰する。回帰した非決定論は、1や4の非決定論とは異なり、決定論との対立項としてのものではない。柄谷行人の言葉に従えば、レムは『捜査』から『枯草熱』までの20年間に、決定化から恣意化に至る認識論的ループ構造を「建築」したといえる。

8. フィリップ・K・ディック 『ヴァリス再考』

ヴァリス論／なぜディックはマクロコスモスからミクロコスモスへと転向したか
「銀星倶楽部」12 ペヨトル工房 1989

丹野義彦

「ディック世界の異常心理学的な見取り図」というのが筆者に与えられた課題である。ディックの作品には、異常心理学に対する関心が強くあらわれる。精神分析・実存精神医学・ユング心理学に関するおびただしいテクニカルターム、幻覚剤によるトリップ、『アルファ系衛星の氏族たち』の精神病院のパロディ、『ブラッドマネー博士』や『テレポートされざる者』にみられる悪役としての精神分析医、『アンドロ羊』の分裂病や心理テスト、『暗闇のスキャナー』におけるスプリット・ブレイン・テスト……。これらは、スクランブルスーツ・電話グリッド・テルポー・アンドロイド・E療法などの科学的ガジェット群と並んで、異常心理学的ガジェット群を形成している。

また、『悪夢としてのP・K・ディック』に収められたジェフ・ワグナーによる伝記を読むと、ディックは、慢性的な覚せい剤中毒の状態にあり、1963年には抑うつとパラノイア症状が出現し、さらに、1972年の自殺未遂、「神体験」として作品に登場する1974年の神秘体験、1976年の再度の自殺未遂など、いろいろな精神病理的エピソードを持っていたことが明らかにされている。

異常心理学的側面からディックを読んでみて、最も面白かったのは、1964年の『パーマー・エルドリッチの三つの聖痕』と、1981年の『ヴァリス』である。SFとしてもこの2作は、ディックの中で2つの頂点をなす傑作であり、また、ディック世界を変容させる2つの契機となっている。

まず、『パーマー・エルドリッチ』は、ディックの作品の中で、現実世界の身分に関するスペキュレーションが変質する契機となる。初期の『宇宙の眼』(1957年)では、主人公は、パラレルワールドから完全にもとの現実に戻り、現実世界は無傷のまま保存されている。ところが、『パーマー・エルドリッチ』や、六六年の『テレポートされざる者』あたりを転機として、これまで無傷だった現実世界は崩壊してしまう。これ以後の主人公は、幻覚と現実の混じった世界に宙づりにされる。または、もとの現実に戻ったようにみえて、実は現実とはズレており、かえって幻覚と現実が折り重なった複雑な世界だったりする。

『パーマー・エルドリッチ』の世界は、筆者の体験から言っても、幻覚剤の体験に基づくのは明らかと思われる。醒めたと思った瞬間に、別の意識が醒めて現実の世界は失われてしまう。しかし、ディック自身が幻覚剤を実際に体験したのは、この作品を発表したあとの六四年であるという。『パーマー・エルドリッチ』はFBIから誤解を受けてもしかたのない不思議な作品である。また、『パーマー・エルドリッチ』の中に漂うべったりとした重い気分は、うつ病的であり、他の作品の分裂気質的な雰囲気からみると異質である。

『パーマー・エルドリッチ』や『テレポート』に見られる過剰な崩壊的パワーは、その後の『ユービック』(1969年)や『死の迷宮』(1970年)などよりはるかに高い。この異質性は、あるいは1963年の抑うつとパラノイア症状によるのかもしれない。これらの謎に関連して面白いのは『アルベマス』のラストである。そこでは、『パーマー・エルドリッチ』『テレポート』『最後から二番目の真実』『逆転世界』などがディックの書いたものではないと暗にほめかされている。だとすれば確かに右の謎も解けののだが、『パーマー・エルドリッチ』や『テレポート』については別に詳しく論じる機会もあるだろう。

一方、『ヴァリス』は、上のジェフ・ワグナーの伝記にも出てきた1974年の「神体験」を扱っている。この作品は、74年体験の意味をディック自身が探求していった神学的な記録であり、同時に、精神病理学的な現象がほとんど生の形で描かれる心理学的自伝とも言える。

『ヴァリス』は、ディックSFの構造を変える契機となっている。もともと、ディックの作品の特徴は、主人公の内界の変化が外界の変化へ、すなわちミクロコスモスがマクロコスモスへ、投影されて描かれる点にある。このSF的構造をディック・パラダイムと呼んでおこう。『宇宙の眼』『パーマー・エルドリッチ』『テレポート』『ユービック』『死の迷宮』など、『ヴァリス』以前の主なSFは、このディック・パラダイムに属する。このため、マクロコスモスが狂ったり崩壊してても、主人公たちの自己すなわちミクロコスモスは無傷であり、彼らは実に冷静で能動的であった。ところが、『ヴァリス』あたりを境として、容器としてのマクロコスモスをひっくり返して壊すことに固執してきたディックが、中身としてのミクロコスモスの崩壊を描くようになる。『暗闇のスキャナー』『ヴァリス』『聖なる侵入』などでは、崩壊するのは外界ではなく、それまでは無傷だった主人公の自己のほうである。ディックは、みずからディック・パラダイムを破壊したことになる。このように、『ヴァリス』は、ディック世界の異常心理学的見取り図を描く上で、鍵となる作品である。

ところで、『ヴァリス』を発表する前の1976年頃に、ディックはその準備として『アルベマス』を書いている。ディックの死後に発表されたこの作品は、やはり1974年の「神体験」に対する心理的かつ政治的な探求記録ともなっている。しかし、『アルベマス』と『ヴァリス』を比べると、同じく七四年体験を扱いつつも、その作品構造や語り口は全く違っている。そこで、以下では、『アルベマス』から『ヴァリス』への変換をたどりながら、『ヴァリス』を解説していくことにしたい。

『アルベマス』

1. 神体験

フレマント大統領のもとで、アメリカは、密告の奨励や共産党のスパイ摘発など、ディストピア的警察国家となりつつある。こうした疑心暗鬼を背景に、主人公ニコラス・ブレイディに「神体験」がおこり、彼は何とかこの現象を合理的に解釈しようとする。

「神体験」といっても、彼が実際に体験したことは、次のとおりである。

- ①訪れた薬配達人が古代キリスト教徒の魚のペンダントをしていた。
- ②その瞬間、古代ローマのイメージが見えた。
- ③ある夜、8時間にわたって色彩的な視覚イメージが見え、ちょうど何千万枚もの抽象画が、次々と猛烈なスピードで寝室の壁に投影されたように感じられた。
- ④SF的な三つ眼人の夢を見た。
- ⑤自分が習ったこともないギリシャ語を話しているのに気づいた。
- ⑥靴の広告ダイレクトメールに共産党の暗号や警察の罠を感じとった。
- ⑦自分の息子がヘルニアにかかっているのを知り医者につれていった。

考えてみれば、これらはふつうの人間なら単なる偶然の連鎖と考えて、忘れてしまうような出来事である。

③のような光視活動は幻覚剤のフラッシュバックとして珍しいものではなく、②④は単なる夢か空想、⑤⑥は錯覚、①⑦は、ユングなら共時性体験と呼ぶだろうが、ごくありふれた事件である。つまり、ブレイディの「神体験」とは、政治的なトラブルからくる精神衰弱を背景に、たまたまフラッシュバックや諸事件・夢・カン違いが重なったというにすぎない。

2. 釈義

この体験からブレイディが引き出した結論は、「私の頭の中に神的人格がよみがえり、別の世界から私に救いの手をさしのべている。私は神から選ばれた人間であり、多くの情報が与えられ教育されており、これで息子の命が救われた。その神は宇宙の起源を持ち、悪の政治や宗教の支配体制と闘っている」というものだ。彼はこの認識の過程を、「釈義」と呼ばれる日誌に記す。

なるほど、①～⑧の体験を、冷静に過不足も矛盾もなく説明しようとすれば、誰でも必然的にこのようなシナリオに達するだろう。①②⑤の体験は、自分が古代の宗教に関連した人物になったと考えれば、つじつまは合う。③の光視活動も、大量の情報が自分に送られたと考えれば説明できる。⑧は人間の命を救う医療的救済であり、宗教的テーマを強化する。また、④の三つ眼人のイメージは、『パーマー・エルドリッチ』や『テレポート』など、これまでの作品にくりかえされる地球外生命の侵略物語を連想させる。そのうえ、⑥の政治的連想も、神が支配体制と闘っているあらわれと考えれば矛盾はない。

ここでは、おびただし宗教的な現象も、救済にかかわるものというより、むしろ解かれるべき謎としての異常現象である。したがって、これら宗教的現象は、宗教の言葉ではなく、すべてSFの言葉で斉合的に解釈される。ブレイディは、救いを求めているのではなく、異常現象を何とか解釈したいという認知欲求にとりつかれているだけだ。

ブレイディの推論は、精神病理学でいうトレマからアポフェニーへ、すなわち妄想気分から妄想構築にいたる典型的な経過である。推論自体はきわめて合理的かつ斉合的である。むしろ逆に、合理的かつ無矛盾に説明しつくそうとする過剰な認知欲求こそ、パラノイアのものである。異常なのは、事件そのものや推論の形式ではなく、事件や推論の表面にあらわれないところにある。こうした真空が、精神病理学では陰性症状と呼ばれる。これにくらべれば、表面にあらわれる陽性症状、すなわち「誰か別の人格が私の頭の中にいる」といった憑依体験、「自分が人類の中から選ばれた」といった誇大的な自己中心性、なども二次的なものにすぎない。

3. 他者化の操作

ブレイディの「神」はついに実在化される。アルベマス星の高度に発達したプラズマ生命体が、フレマント大統領を失脚させるために、人工衛星VALISを送ってきた。そもそも人類の起源はアルベマス星からの移民なのであり、VALISは二千年前にも、キリストとして地球に現れたが、ローマ人に殺された。ブレイディに「神」を体験させたのはVALISである。このように、世界の変化が、自然によるものではなく、誰か他者の意志によっておこったという謎解きの方法を、「他者化の操作」と呼んでおこう。ここでは「神」が七四年体験の犯人であるから、神話化の操作といってもよい。

結局、人工衛星VALISは破壊され、これまでは認知欲求が強かった冷静なブレイディが、突如パニックをおこし、別人のように、救われたいという欲求のとりこになる。この欲求はすぐに他者化され、ブレイディのもとに、VALISが実体化し、父が子を救うように、不死と再生を保証する。結局、ブレイディはフレマントによって殺されるが、彼には別の次元での救いが与えられたわけである。この点、のちにレオン神父から、単なる現実逃避とか個人的救済にすぎないと批判されることになる。とはいえ、こうして、『アルベマス』は、キリスト教の一神教の枠内ですべての謎が解かれ、オーソドックスなSFの力作として完結する。『ヴァリス』で重要な役割を果たすグノーシス主義もここでは萌芽状態でしかなく、しかもマッドサイエンティストのジェイムズ・ジェイムズという、きわめてSF的なイメージに装われている。

『ヴァリス』

1. 神体験

主人公ホースラヴァー・ファットの2度の自殺未遂、その友人グロリアの自殺といった、濃厚な死の雰囲気、冒頭から『ヴァリス』には漂っている。ファットが「神」と遭遇するのは、こうした抑うつ気分においてであり、タイムリーにも、最も救われたい願望が強い時期である。ファットの七四年の体験そのものは、前述のブレイディのそれとほぼ同じである。違いといえば、⑥の「靴のダイレクトメール」が「ロシア人からの2通の手紙」に変わり、また、悪のアメリカ大統領は、フレメントからニクソンに変わり、しかも彼は1974年8月に失脚していることである。『アルベマス』で見られた政治的な設定やSF的解釈などは、ここでは背景に退き、映画「VALIS」の中に圧縮されてみられるだけとなる。かわりに、作品は神学や神秘哲学の言葉で埋めつくされる。

2. 釈義

『アルベマス』で体系化が進行中だった「釈義」が、すでに完成した体系として姿をあらわす。釈義からの最初の引用は、マクロコスモスとミクロコスモスの対応関係について述べている。「われわれは<脳>の思考を物理的宇宙における配置・再配置として体験する（大瀧啓裕訳）」マクロコスモスとミクロコスモス、すなわち宇宙と脳は互いを反映しあう。「神体験」という狂いの現象において、狂っているのはマクロコスモスすなわち宇宙のほうなのか、ミクロコスモスすなわちファットの脳なのか？

ファットはまず、マクロコスモスの狂気から検討しはじめる。ここにおいて、『アルベマス』では夢として語られていたグノーシス主義が、急に現実味を帯びてくる。なぜなら、それは、ファットが狂っているかいないかの判定にかかわるからである。グノーシス主義によれば、宇宙の本質は、実体のない情報であり、幻影にすぎない。この宇宙は、キリスト教が言うように理性の神が支配するコスモスではない。宇宙は<黒き鉄の牢獄>であり、われわれはそれに閉じ込められた狂人である。すなわち、狂っているのは宇宙すなわちマクロコスモスのほうだ。こうして、グノーシス主義によって、ファットの狂気は相対化される。つまり、世界全体が狂っているわけだから、狂っているのは何もファットだけではない。『ヴァリス』は、前述のディック・パラダイムを宇宙的規模に拡大した、まぎれもないSFとして始まる。

『アルベマス』と『ヴァリス』の違いは、ブレイディが神から救済されるのを受動的に待つといったキリスト教的姿勢だったのに対し、ファットはもっと能動的に救いを見いだそうとする点である。「釈義」は、不死が約束されたパラレルワールド「上なる世界」についてくりかえし述べる。この宇宙が実体のないニセモノなのは、真に実在する「上なる世界」の影だからである。人は想起によって「上なる世界」に達することができる。これを最初に発見したのは仏陀である。彼は過去のすべてを想起しただけではなく、未来のすべてをも想起した。すなわち、宇宙のあらゆる情報を知り、運命に決定される「下なる世界」を脱して、「上なる世界」に達した。そこでは決定論の束縛を越え、肉体の死をも超越するので、不死性を身につけることに等しい。この考えは、インドからギリシャのピュタゴラス教団にわたり、プラトン哲学を介して、西洋神秘思想の根底をなした。「上なる世界」に到達する術、すなわち時間の超越こそ、古代からの密議やグノーシスの教義の本質にほかならない。

しかし、こうした考えの限界は、誰よりファット自身が一番よく知っている。生きるという点からみると、それはむしろ現実の生を無意味化するからだ。神と出会って救われたはずのファットが2回目の自殺に追い込まれる、といったパラドクスをおこしたのも、この時間超越論である。他でもディックはこの考えに批判を加えている。「そうした世界がたとえあったとしても、われわれはそれを確かめようがない」とする『ユービック』の認識論的批判や、『アルベマス』のレオン神父のような政治的批判、『ヴァリス』の精神療法家モーリスのような実存主義からの批判などである。

3. 他者化の操作

宇宙が狂ったのは、そもそもこの宇宙を創造した神が狂っていたからである。狂える創造神デミウルゴスこそが、人間を<黒き鉄の牢獄>に閉じ込め、狂ったニセの世界を体験させている。ここに、第1段階の他者化の操作が認められる。「世界が狂人によって作られた」というイメージは、もともと『宇宙の眼』から『ユービック』までディック作品には頻出していたが、『ヴァリス』では、グノーシス主義にその裏付けが求められる。キリスト教の神は仮面をはがされ、狂える盲目の神デミウルゴスが姿をあらわす。キリスト教的一神教の宇宙観は他者化の操作によってくつがえされる。

グノーシス主義は、ファットの1974年の「神体験」を、宇宙レベルに普遍化する装置となる。つまり、グノーシスの<黒き鉄の牢獄>は、精神病院、ニクソン政権、ローマ帝国、狂った宇宙など、あらゆるレベルを貫いて見いだすことができる。ファットを悩ましたのは、単なる個人レベルの狂気ではなく、現代政治のレベル、二千年にわたる政治・宗教史のレベルをも貫くような、宇宙全体の存立基盤に関わる本質的狂気だったのだということになる。

4. 過剰化の操作

ところで、精神科医ストーンも指摘するように、もし宇宙全体が狂っているなら、原理的にいって、その宇宙の中にいるファットがそのことを知ることはできないはずだ。

この矛盾もグノーシス主義によって解決される。つまり、創造神とは別に、善なる至高神が存在し、至高神は理性的であり狂っていない。ファットに送られてくる情報は、至高神の理性すなわちロゴスであり、彼はこれと接しているので、理性的でいられるし、この宇宙の狂気を認識できるのだ。この第2段階の他者化

の操作によって、狂える神より上位の至高神が姿をあらわす。善なる至高神は、われわれを狂気から救うため、この宇宙に侵入し、高度の擬態によって隠れ、秘かにこの宇宙を食っている。至高神がこの宇宙を食いつくし、宇宙が狂気から救われることこそ、限りない至福である。

この考えは、一步進んで、ファットだけが正気で、ファット以外はすべて狂っているという大逆転をもたらす。至高神のロゴスすなわちプラスマテは、ナグ・ハマディ文書の発見でよみがえり、ファットと接合し不死のホモプラスマテとなった。だから、ファットの狂気を治療しようとする精神療法などは、無意味どころか不可能となる。これこそ、ファットの自己中心的願望の実在化であり、彼にとっては最高の救いであろう。

しかし、狂える神の上に至高神が存在するのなら、さらに別の上位の神が存在しないという保証はどこにもない。これまで2回の他者化によって、キリスト教の神、狂える創造神、至高神の3つの神が出現したわけだから、今後、第n回の他者化によって、(n+1)個の神が出現しうることになる。こうした神の過剰化を収束させるような、唯一なる神が存在する証拠はどこにもない。というより、この唯一なる神という収束値の仮定を無視したのはファット自身である。すなわち、nは無限に増加しうることになる。こうした神の系列における第n番目の神を考えてみる。するとそれは、(n-1)番目の神から見ると確かに実在する神ではあるが、逆に、(n+1)番目の神から見ると、ニセモノであって神ではないことになる。つまり、このn番目の神は、実在の神と呼ぼうが、神の仮面をかぶったニセモノと呼ぼうが等価である。ならば、ホモプラスマテ・ファットは、神であると同時に、神の妄想にとりつかれた神のニセモノである。こうして、グノーシスの多神教は、神を過剰に発生させ、まさに救済されんとする極限で破綻する。グノーシス主義は神を恣意化させる装置となる。過剰による恣意化によって、ファットの釈義は密かに内部崩壊している。

5. 恣意化の操作

さらに、もしファットの内なるプラスマテが本当に神なら、息子の命を救ったように、ファット自身や、癌で苦しむシェリーをも救えなければならない。ところが、ファットは再び自殺しようとしたし、何より決定的なのは、シェリーが苦みながら死んでしまうことだ。だから、プラスマテは神ではない。ファットが4年もうちこみ、救済の基礎理論となるはずの「釈義」体系は崩壊する。シェリーの死後、「釈義」からの引用がなくなるのはこのためだ。ファットが落ち込むのは、愛人シェリーの死に対してではなく、彼の生のすべてが脱中心化されたことに対してである。

ファットは内なる救済を断念し、外に救済を求める。はじめは、「神体験」と奇妙に符合する映画「VALIS」の制作者ランプトンがあらわれ、その娘ソフィアが救済者であるかに見える。たしかに、ソフィアは、ファットを消滅させ、ディックと合体させる。ディック・ワールドの法則では、『宇宙の眼』や『ユービック』などに見られるように、人を自由に消滅させる能力はその世界の創造者であることの証明であり、『暗闇のスキャナー』に見られるように、分裂した2つの人格を合体させる能力は救済者であることの証明である。この法則にしたがえば、ソフィアは世界創造者かつ救済者、つまり神である。しかし、直後にソフィアは殺され、外への探求は裏切られる。実は、ファットの七四年体験は、電子工学者ミニが行なったレーザー実験による事故だったかもしれない。

『アルベマス』と『ヴァリス』は、どちらも、1974年体験という狂いの現象をめぐり、狂っているのは世界すなわちマクロコスモスか、自分すなわちミクロコスモスか、という疑問をディックみずからがつきつめようとした記録である。もし前者ならファットは救われ、後者なら救いはない。『アルベマス』の結論は、狂っているのは、一方的に世界すなわちマクロコスモスのほうであった。だから、1974年体験は神との聖なる遭遇であり、釈義は救いを保証するディック教の教典であった。聖者としてのブレイディは神に救われて死んだ。ところが、『ヴァリス』では、ふたつの仮説が壮絶にせめぎあう。その結果、『アルベマス』のような結論と、全く正反対の結論が拮抗する。外界の狂気と救いを保証するグノーシス主義は、過剰化の極限において、その不在を露呈した。つまり、世界は狂っていないかもしれない。もしそうなら、狂っているのは自己のほうである。神や救いなど存在しない。七四年体験は単なる妄想であり、釈義はそれを合理化するたわごとを書きつけた紙切れにすぎない。実際のところ、『アルベマス』にはほとんど見られないが、『ヴァリス』には精神分裂病的な思考障害の特徴とされる「フォン・ドマルスの原理（述語論理）」が頻出し、テキストをきわめて読みにくくしている。また、ヤスパースの言う精神分裂病の自我障害を示す証拠も至るところに見られる。

4年以上にもわたりファットを自我喪失から守ってきた「釈義」の崩壊は、彼を正気に戻す。同時に、ファットは事実上、心理的な死を迎えている。つまり、『ヴァリス』は、ファットすなわちディックが救済の幻想をみずから破壊し、狂気と直面して大いなる覚醒にいたるまでの自己治療の記録であると同時に、絶望と直面したディックの翌年の死を予言する遺書でもある。ファットを、大いなる覚醒をへた聖者と呼ぼうが、救済のない絶望的世界に生きる狂人と呼ぼうが、全く任意である。結局、両者の可能性が拮抗したまま、ファットは再びディックと分離し、外への探求を続けるという、やはり恣意的な形で物語は終わる。

ディックが、SFとして完結し力作でもある『アルベマス』をあえて棄て、『ヴァリス』として書き直した理由も、これまでで明らかとなろう。ディックは、他者化の操作にとどまる『アルベマス』には不満であり、『ヴァリス』では『アルベマス』を内に吸収し、グノーシス主義の導入により、過剰化と恣意化の操作を加え、徹底的につきつめたのである。ディックがグノーシス神話に興味を持ったのも、その救済性のみならず、この神話の構造の中に、過剰化と恣意化の転換のモデルがあったためであろう。なおこうした変換は、スタニスワフ・レムが、『捜査』の構造をつきつめて『枯草熱』を完成させた状況を思わせる。

(この点については、「ユリイカ」1986 年 1 月号の拙稿を参照していただきたい)。レムとディックについては、のちにまとめて比較してみたいが、ここでは、『アルベマス』から『ヴァリス』への変換が、レムの『捜査』から『枯草熱』への変換と類似していることを指摘しておくにとどめたい。